

令和4年度 全国私立中学高等学校

# 全国私学教育研究集会岐阜大会

## 研究集録



## これからの時代に対応する私学教育の使命 ～私学独自の教育の再構築～

主催 一般財団法人日本私学教育研究所

実施 日本私立中学高等学校連合会中部支部／岐阜県私立中学高等学校協会

後援 岐阜県／岐阜市／日本私立中学高等学校連合会



# 目 次

発刊のことば	1
実施概要	3
大会役員等一覧	4
全体集会	5
開会式	6
岐阜県私立学校活動紹介	10
報告	11
記念講演	18
部 会	22
私学経営部会	22
教育課程部会	37
法人管理事務運営部会	54
特色教育部会	80
参加者アンケート	101
参加者数	113
開催地・研究目標一覧	114
編集後記	118



# 発刊のことば

一般財団法人日本私学教育研究所所長 平方邦行

令和4年度全国私学教育研究集会岐阜大会は、令和4年10月20日（木）・21日（金）の2日間、初日は岐阜県岐阜市の長良川国際会議場、2日目は都ホテル岐阜長良川（私学経営部会・法人管理事務運営部会）とホテルグランヴェール岐山（教育課程部会、特色教育部会）を会場に「これからの時代に対応する私学教育の使命～私学独自の教育の再構築～」を研究目標に掲げて開催しました。本大会は岐阜県、岐阜市及び日本私立中学高等学校連合会の後援により、日本私立中学高等学校連合会中部支部、岐阜県私立中学高等学校協会及び一般財団法人日本私学教育研究所が実施し、全国の私立中学校・高等学校・中等教育学校から541名の参加者を得て、盛会裡に終了することができました。関係各位に心より御礼申し上げます。

初日は全体集会（開会式・全体会）を行い、開会式では岐阜県知事の古田肇様と岐阜市長の柴橋正直様に臨席頂き、祝辞を賜りました。全体会では岐阜県私立学校活動紹介として、学校法人富田学園（富田高等学校・岐阜東高等学校合同）ギター・マンドリン部の生徒がギター・マンドリン演奏を、聖マリア女学院高等学校の聖歌隊・ハンドベル部・ダンス部の生徒がハンドベル演奏に合わせた聖歌・ダンスを披露しました。続いて、日本私立中学高等学校連合会の吉田晋会長及び当研究所の平方邦行所長による「教育政策と私学情勢について」をテーマとした報告、東京大学宇宙線研究所教授の梶田隆章先生による記念講演「神岡でのニュートリノ研究を通して考える理科教育」を行いました。全体集会終了後の教育懇談会では岐阜県知事の代理として岐阜県副知事の大森康宏様と岐阜市長の代理として岐阜市副市長の後藤一郎様に臨席頂き、祝辞を賜りました。

2日目は私学経営、教育課程、法人管理事務運営、特色教育の4部会に分かれ、それぞれの部会研究目標の下で、講演、パネル・ディスカッション、実践発表等を行いました。なお、今回は法人管理事務運営部会の中に法人管理事務運営分科会と部活動運営分科会を置き、午前中は部会全体、午後は分科会に分かれて行いました。2日間を通して参加者からは今後の参考となる内容であり、自校に持ち帰り、実践したい等の評価を頂きました。

新型コロナウイルス感染症が減少、増加を繰り返す中、全国各地から多くの先生方に参加頂き、大会関係者が一丸となり、参加された先生方にもご協力を頂き、徹底的な感染防止対策を行い、無事に大会を終了致しました。

最後に、本大会の成功は、講演・発表を頂いた方々、運営に携わって頂いた中部地区私立中学高等学校連合会と岐阜県の私立中学高等学校の先生方と当研究所の役員、専門委員の先生方、全国から参加された先生方、また会場のスタッフの方々、すべての方々が一丸となって、ご準備、ご協力を頂いた結果と確信しています。この場をお借りして心より御礼申し上げます。



# 実施概要

- 1 研究目標 これからの時代に対応する私学教育の使命～私学独自の教育の再構築～
- 2 会 期 令和4年10月20日（木）～21日（金）の2日間
- 3 会 場 初 日 長良川国際会議場（全体集会）／都ホテル岐阜長良川（教育懇談会）  
2 日目 都ホテル岐阜長良川（私学経営・法人管理事務運営部会）  
ホテルグランヴェール岐山（教育課程・特色教育部会）
- 4 参加人員 541名（募集600名）
- 5 基本日程

月日	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
						30 45	15	15 45		30 45	
10月20日 (木)				受付	開 会 式	全 体 会				教育懇談会	
					★	※1 報告 I	※2	★ 記念講演	★		
10月21日 (金)		部 会		昼 食		部 会			(※1) 私立学校活動紹介 (※2) 報告 II (★) 休憩		

- 6 全 体 会  
岐阜県私立学校活動紹介  
「ハンドベル演奏」 聖マリア女学院高等学校聖歌隊・ハンドベル・ダンス部  
「ギター・マンドリン演奏」 学校法人富田学園ギター・マンドリン部  
(富田高等学校・岐阜東高等学校)  
報 告 「教育政策と私学情勢について」  
日本私立中学高等学校連合会 会 長 吉 田 晋  
一般財団法人日本私学教育研究所 所 長 平 方 邦 行  
記念講演 「神岡でのニュートリノ研究を通して考える理科教育」  
東京大学宇宙線研究所 教 授 梶 田 隆 章
- 7 部 会  
1. 私 学 経 営 部 会 未来を見据えた私学経営  
2. 教 育 課 程 部 会 新しい時代の私学の教育課程  
3. 法 人 管 理 事 務 運 営 部 会 これからの私学運営のあり方  
法人管理事務運営分科会 私学の魅力ある職場づくり  
部 活 動 運 営 分 科 会 私学の部活動運営の新たな可能性  
4. 特 色 教 育 部 会 ポストコロナ時代の私学の特色ある教育
- 8 教育懇談会（希望者のみ）  
日時 10月20日（木）17時45分～19時30分（受付：17時30分より）  
会場 都ホテル岐阜長良川 2階「ボールルーム」

# 大会役員等一覽

## 1. 大会役員

吉田 晋	一般財団法人 日本私立高等学校教育研究所	理事長・校長
長塚 篤夫	一般財団法人 日本私立高等学校教育研究所	副理事長・全国集会総括責任者
山中 幸平	一般財団法人 日本私立高等学校教育研究所	副理事長
平方 邦行	一般財団法人 日本私立高等学校教育研究所	理事・所長
鈴木 康之	一般財団法人 日本私立高等学校教育研究所	理事・全国集会副総括責任者

## 2. 実行委員

委員長 下屋 浩 実	日本私立高等学校連合会 中部支部 支部長	支部長
須田 英克	富山県私立中学校協会 会長	理事長・統括校長
向 孝志	石川県私立中学校協会 会長	理事長
荻原 昭人	福井県私立高等学校連合会 会長	副理事長
川手 佳彦	山梨県私立中等学校連合会 会長	理事長・校長
安藤 善二	長野県私立中等学校協会 会長	評議員
仲田 晃弘	公益社団法人 静岡県私立学校協会 会長	常務理事
榊 直樹	愛知県私立東邦学校協会 会長	理事長
梅村 光久	三重県私立三重高等学校協会 会長	理事長
古木 純司	岐阜県私立可児高等学校中学校協会 副会長	統括校長
長塚 篤夫	一般財団法人 日本私立高等学校教育研究所	副理事長・全国集会総括責任者
平方 邦行	一般財団法人 日本私立高等学校教育研究所	理事・所長
鈴木 康之	一般財団法人 日本私立高等学校教育研究所	理事・全国集会副総括責任者

## 3. 運営総括委員

委員長 古木 純司	帝京大学 可児高等学校 中学校	統括校長
副委員長 和田 尚夫	京 高 等 学 校	校長
松本文孝	岐阜女子高等学 校	校長
鹿野孝紀	済美高等学 校	校長
米田 聡	富田高等学 校	校長
古田 健二	大垣日本大 学	校長
横山 豊	鶯谷中 学	校長



# 全体集会

1 日 時 令和4年10月20日(木) 13時~17時30分

2 会 場 長良川国際会議場 1階「メインホール」

3 開会式 司会：梅津 節子／記録：川口 治久  
(1) 開会のことば 運営総括委員長 古 木 純 司  
(2) 主催者挨拶 一般財団法人日本私学教育研究所 理事長 吉 田 晋  
(3) 実行委員長挨拶 日本私立中学高等学校連合会中部支部 支部長 下 屋 浩 実  
(4) 来賓祝辞 岐阜県知事 古 田 肇 様  
岐阜市長 柴 橋 正 直 様  
(5) 登壇者紹介  
(6) 次期開催地区代表挨拶 中国・四国地区私立中学高等学校連合会 会長 中 村 道 郎  
(7) 閉式の辞 副運営総括委員長 和 田 尚

4 全体会 司会：梅津 節子／機材担当：丹羽 雅和／記録：川口 治久  
岐阜県私立学校活動紹介 進行：黒田 誠二・信条 希望  
「ギター・マンドリン演奏」 学校法人富田学園ギター・マンドリン部  
(富田高等学校・岐阜東高等学校合同)  
「ハンドベル演奏」 聖マリア女学院高等学校  
聖歌隊・ハンドベル・ダンス部

## 報 告

「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会長 吉 田 晋  
一般財団法人日本私学教育研究所 所長 平 方 邦 行

## 記念講演

講師紹介：古木 純司／謝辞：下屋 浩実

「神岡でのニュートリノ研究を通して考える理科教育」

東京大学宇宙線研究所 教授 梶 田 隆 章

(総合案内：名越 龍男・高橋 由美子)

(救護担当：竹本 万里子・中村 紗友里・駒田 皇)

5 全体集会運営委員・指導員(順不同)

委員長	和 田 尚	中 京 高 等 学 校	校 長
副委員長	黒 田 誠 二	岐 阜 東 中 学 高 等 学 校	校 長
	田 中 信 博	中 京 高 等 学 校	副 校 長
	川 口 治 久	岐 阜 東 中 学 高 等 学 校	教 頭
	丹 羽 雅 和	岐 阜 東 中 学 高 等 学 校	教 頭
	名 越 龍 男	中 京 高 等 学 校	教 諭
	梅 津 節 子	中 京 高 等 学 校	教 諭
	竹 本 万 里 子	岐 阜 聖 徳 学 園 高 等 学 校	養 護 教 諭
	中 村 紗 友 里	岐 阜 東 中 学 高 等 学 校	養 護 教 諭
	駒 田 皇	中 京 高 等 学 校	養 護 教 諭

# 開 会 式

## 【開会の言葉】

運営総括委員長 古 木 純 司

長い夏もやっと終わり、少しずつ秋の到来を感じさせるこの岐阜県にようこそお越し下さいました。心より歓迎いたします。令和4年度全国私学教育研究集会岐阜大会の開会にあたり、ご公務ご多用の中、岐阜県知事の古田肇様、岐阜市長の柴橋正直様のご臨席を賜り、また、全国各地よりたくさんの先生方をお迎えして、この開会の日を迎えることができました。心より感謝申し上げます。それでは、「これからの時代に対応する私学教育の使命～私学独自の教育の再構築～」をスローガンに掲げ、本年度の全国私学教育研究集会岐阜大会を開催いたします。



## 【主催者挨拶】

一般財団法人日本私学教育研究所

理事長 吉 田 晋

本日はここ岐阜長良川の地に541名の参加者の皆様にお集まり頂き、岐阜県内の100名近い先生方を中心に中部地区の先生方のご尽力により、「これからの時代に対応する私学教育の使命～私学独自の教育の再構築～」をテーマに70回目を迎える全国私学教育研究集会が開催されますことを改めて感謝するとともにお礼を申し上げます。さらには公務ご多用中にもかかわらず、古田肇・岐阜県知事、柴橋正直・岐阜市長に自らお越し頂き、我々私学の教職員の大会を盛り上げて頂きました。有り難うございます。



私たち私学は今、いろいろな問題を抱えています。特にこの3年、コロナというとんでもない化け物のおかげで、学校教育はある意味、滅茶苦茶にされたかもしれません。しかし、一昨年の6月の休校以降、一気にICT教育が進みました。そしてそれとともに子供たちが学校に来て、

対面で授業を受けることの重要性、楽しさというものを得てくれたのではないかと思います。ほとんどの学校が通常の授業に関しては対面式で行い、休暇中の補講等はICTを利用したハイブリッドな教育というようなことを繰り返しながら行って来たわけですが、実は文部科学省ではまだデジタル教科書のことは何も決まっていません。この後に若干の報告をさせていただきますが、私は日本の教育の原点は私立学校にあると信じています。そして私立学校が文部科学省に決められた学習指導要領という非常にきつい縛りの中で、少しでも新しい教育、今の子供たちに必要な教育をやっていこうという努力をして、日本の教育を維持していると思っています。

ですから、教育に関するいろいろな会議の中で「リケジョを作れ」、「IT人口が足りない」とか言っていますが、私たちはそのようなことを少しも心配していません。例えば情報の教科書に出ているようなことは今の中学1年生の子供たちはほとんどできます。教育課程が遅れているだけです。日本の少子高齢化の社会的資本とも言える生徒たちはみんな頑張って、グローバル人材になっていると思っています。

是非、それを今一度、1校1校、建学の精神の違う学校がこのように集まり、日本の教育のために努力をしていく、そのような姿をこの大会で表せればよいと思っています。2日間の大会がよい研修となりますようお願い申し上げます。

そして、古田県知事、柴橋市長には岐阜県私学へのさらなる補助金の増額をお願い申し上げます。



## 【実行委員長挨拶】

日本私立中学高等学校連合会中部支部

支部長 下屋 浩 実



ようこそ岐阜へお越し下さいました。有り難うございます。山紫水明の地である岐阜の秋は豊富な農産物、そして川の恵みがございます。2日目のお弁当にも岐阜の

秋の産物がふんだんに使われていると思います。是非とも本日、明日の夜にも多くのおいしい岐阜の産物を食べて頂きたいと思います。

コロナ・ウイルス感染症の拡大で一昨年の秋田大会、昨年の京都大会と規模を縮小してこの大会を開催して参りましたが、今回はコロナ前とほぼ同等の規模で行うことができました。これも県内、あるいは中部地区の各先生方のご尽力でしっかりと準備ができた賜物と理解しています。まだまだコロナ・ウイルス感染症は、岐阜県においても出ていますし、全国的にも第8波の懸念がされています。先生方には普段と同様に感染対策をしっかりと行って頂き、元気にそれぞれの学校へ帰って生徒たちと接して欲しいと願っています。

現在、公私問わず、IT教育や部活動改革、あるいは教職員の働き方改革などの課題が私たちの目の前には山積しています。今回、部活動のあり方、そしてそこに教員がどのように関わっていくかについて、部会の中で1つ独立させて考えていこうということで、法人管理事務運営部会の中に部活動分科会を設けさせて頂きました。当初はそれだけで多くの先生方にご参加頂けるかどうかを非常に心配しておりましたが、思わぬ反響で116名の先生方に参加頂くことになりました。やはり全国の先生方はIT教育への取り組み、最新の入試対策、その他多くの問題がある中で、日々生徒と接する中で必要不可欠な部活動のあり方にいろいろと問題を抱えていることが推察されました。中部地区の先進的な取り組みをしておられる先生方にすべての部会で発表して頂きます。是非ともその発表を経て、あるいは質疑応答の中で先生方の学校は一步二歩先に進んでおられるかもしれませんが、意見交換などを通して、私立学校に通う子供たちが少しでも良い環境で勉学に励み、そして卒業を迎えられるよ

うにご尽力をお願いしたいと思います。

結びに、本日、公務ご多用中にもかかわらず、古田肇・岐阜県知事、柴橋正直・岐阜市長にご出席を賜りました。大変有り難うございます。改めてお礼申し上げます。

参加された先生方にはこの岐阜大会で鋭気を養って頂き、各都道府県にお帰りになって、ますます私学が日本の先頭を走って、引っ張っていただけるようにご尽力をお願いしまして挨拶といたします。2日間、よろしく願いいたします。

## 【来賓祝辞】

岐阜県知事 古田 肇 様

この大会は昭和27年に始まって、今回70回目を数えると伺っています。まさに戦後の日本の歴史とともに発展・活躍してこられた由緒ある大会だと思います。



この大会を初めて岐阜県で開催頂くということは大変光栄に思っております。ようこそ岐阜へお越し頂きました。心から歓迎申し上げます。

お二人の先生方から様々な課題についてお話がございました。特に吉田理事長からは強烈に補助金の増額という具体的な話もございました。岐阜県も「世界的な視野をもち、『清流の国ぎふ』の未来を担う人材の育成」というスローガンを掲げて、最近では特にふるさと教育、そしてICT教育の環境整備と利用促進というようなことに力を入れているのですが、そのような中で私学の皆様に大いにご活躍頂こうということで、精一杯応援をさせて頂いていますし、今後とも応援をさせて頂きたいと思っております。課題山積ではありますが、なんと言っても、ウイズ・コロナからポスト・コロナへと、教育の立場からどのように未来を展望していくかということが大事だと思います。今大会のテーマも次の時代をにらんで、これからの時代をにらんで私学はどうあるべきかという大変骨太なスローガンを掲げておられますが、まさにウイズ・コロナの中で学びの確保と感染防止をどのように両立させていくかということで大変ご苦勞をされたの

ではないかと思っています。第一波から始まりまして、各大波が来るごとに必ず様々な対策を一つの大きな柱として、教育の世界でこの波にどう立ち向かうのかということをおう岐阜の教育の関係者の方々、幼稚園、保育園から大学に至るまで、私立も公立も含めて議論をしてコンセンサスを作り、できる限り分かりやすいルールを作って、各教育現場でやって頂こうということで取り組んできました。第七波も収まりつつあるかに見えますが、まだまだ油断できない状態が続いております。その中で教育現場もずいぶん変わってこられたのではないかと思います。そのようなことについて私学の立場からいろいろ議論頂くことは有り難く思っています。もう1つはこのところ毎日のように円安、物価高の問題がいわれておりますが、私は円安と言うよりは円弱と言った方がよいのかと思っています。「弱い円」、「弱い日本」。日本の国力のいろいろな面での停滞、衰えを感じています。その象徴がまさに円弱です。そうした中で1人1人の人間力をどのように再構築していくか。教育の根本に立ち返って、かつ私学の先生方の特色ある、魅力ある教育というものを改めて正面から考えてみる必要があるのではないかと思います。

岐阜県は再来年に全国高等学校総合文化祭を開催します。まさに高等学校の文化部の国体、インターハイで全国からご参加頂きます。そして来年は全国国民文化祭、全国障害者芸術文化祭ということで立て続けに文化の集いがあります。是非、教育と文化という観点から私学の皆様方にも積極的にいろいろなテーマで、いろいろな形でご参加頂ければ有り難いと思います。

最後に岐阜について一言申しますと、この後、梶田先生の記念講演がございますが、梶田先生のご業績のニュートリノの研究については岐阜市の隣の各務原市で全国唯一の本格的な航空宇宙博物館があり展示をさせて頂いております。この博物館は子供たちにイノベーションを実感してもらおうと充実させています。このところ武将観光ということで全国各地盛り上がっていますが、関ヶ原をフィールドミュージアムとして再構築しようと岐阜関ヶ原古戦場記念館を作りまし

た。来年の大河ドラマは「どうする家康」となりました。家康ゆかりの地と連携しながら、さらに広域的な武将観光を行っていきたくて考えています。関ヶ原は皆さんご存知ですが、訪れることが少ない地ですので、是非お時間がございましたら訪れて頂ければと思います。そしてここは何と言っても「信長」でございます。11月下旬になると「天下富舞」という信長に因んだ新しい柿の品種がマーケットに出てきます。昨年の初競りでは一個43万円の値段がつけました。普通の大きさですが、糖度が25%で、甘くてジューシーであり、年々値段が上がっています。この柿は別として、岐阜は富有柿の発祥の地ですので、お楽しみ頂ければと思います。信長といえば、「ぎふ信長まつり」が秋にございます。今年は木村拓哉さんが信長のいでたちで行列を行うため全国的な話題になっていて、すでに50万人を超える方々から行列見学の申込を頂いております。このような岐阜の食や空気、伝統、文化を折角の機会ですので、大いにお楽しみ頂ければと思います。

大会のご成功と私学のますますのご発展、皆様方のご健勝を心からご祈念申し上げて挨拶とさせていただきます。

#### 【来賓祝辞】

岐阜市長 柴橋 正直 様

本日は全国私立中学高等学校の全国私学教育研究集会在岐阜市で開催されますことを心からお祝い申し上げます。



自然、歴史、文化、そして県庁所在地としての都市機能のすべてが40万人都市の中に集まった市が岐阜市でございます。来月の「ぎふ信長まつり」は全国区ニュースになり、Yahoo!トピックスや各ニュースを賑わせています。そのくらい岐阜市における信長公の存在と歴史は大変重要な役割となっています。信長公の騎馬武者行列に木村拓哉さんと伊藤英明さんが参加されますが、参列の申込は今日までです。もしご関心がある方は、50万人の方々が応募されていて競争倍率は50倍を超えていますが、お申し込み頂ければと思います。岐阜市は公教育を担う立場ではございますが、2019年7



月 3 日に市内の中学校の男子生徒が命を失うといういじめ重大事態が発生しました。市長に就任して 2 年目の時でした。それ以来、岐阜市の教育を一度立ち止まって、様々見直しをし、これまでもこのことを原点に取り組んできました。例えば、このいじめ重大事態の中では学校の現場の先生方が多忙であるという指摘を頂きました。ですからもっと子供たちと向き合う時間を確保するために学校業務改革を行わなければいけない。ご指摘の中で、例えば、朝、ご家庭から連絡が来る電話をなくしてすべてアプリで行うということの本年度からスタートしました。それぞれの現場で、今回タブレットが 1 人 1 台導入されましたので、ICT をふんだんに活用して、先生方の多忙を解消していこうということにも 1 つ 1 つ取り組ませて頂いています。因みに岐阜県では小学校の先生の採用倍率は 2 倍を切っています。このことは岐阜市民の皆様は 2 倍近くあると思われていますが、私は大変な危機感を持っています。2 倍ということはほぼ選べないことです。今、先生方の採用は非常に厳しいし、市民、県民の皆様の学校に対する要求は非常に高いものがあります。一緒になって先生を支え、働く環境を良くしていかなければ、この 2 倍を切る流れは留まるどころがない。これはひいては私たちの問題に直結するということをお伝えしたい。岐阜市の場合、教育の見直しをする中で、管理型集団教育が岐阜の教育の良さであると言われてきたのですが、そのような中でうまくびったりくる生徒もいれば、不登校の子供たちも出現率の高い市であり、そこにうまくはまらない子供たちも一定数いる中で、不登校の特例校を昨年から開校し、各学校の中でも子供たちがある程度自由に自分の学び方を選ぶような環境作りもしていこうと創意工夫をしているところです。すべては子供たちが安心して学べる環境を公教育の中でも作るということです。それはもちろん私学の皆様の教育なくしてはできませんので、岐阜市におきましても私学の皆さんとしっかり連携しながら一緒に子供たちの成長を支えていきたいと思っています。

最後になりますが、今、少子化が進んでいます。岐阜市でも 1 年間で 2600 人くらいの出生数です。私が市長に就任した時は 3000 人を切るくら

いでしたので、いかに少子化が加速度的に進んでいるかということが実感されます。こういった数少ない子供たちを育てるのが私たち公教育であり、皆様方の私学教育でありますので、この大会を通じて、いっそう皆様方が力を付けられ、すべての子供たちのために、私たち大人が力を合わせることができることを願いましてお祝いの挨拶とさせていただきます。

#### 【次期開催地区代表挨拶】

中国・四国地区私立中学高等学校連合会  
会長 中 村 道 郎

令和 5 年度全国私学教育研究集会香川大会についてご案内いたします。日程は 11 月 9 日・10 日の 2 日間で、会場は JR ホテルクレメント高松で実施いたします。研究目標は持続可能な社会を実現する私学教育の創造です。5 つの部会に分かれて開催予定です。



高松市は香川県の県庁所在地で人口はおよそ 41 万 5000 人で、四国の玄関と呼ばれています。また香川県はうどん県としても有名であることは皆様ご存知の通りです。現在、香川県私立中学高等学校連合会会長、高松中央高等学校校長の香川泰造先生が中心となって企画が進められています。来年、皆様の越をお待ちしております。

#### 【閉式の辞】

副運営総括委員長 和 田 尚

我々私学には教育目標を超越した建学の精神がございます。その建学の精神に基づいて、それを絶対的なものとしつつ、これからの時代に即応した私学教育の再構築をしていくということが大変重要なことでございます。是非この大会を通じて、それぞれの私学が協力、協調しつつ、そして各校独自の私学教育が展開できることを信じております。そのための有意義な 2 日間になることを期待しております。



以上をもちまして全国私学教育研究集会岐阜大会開会式を閉式します。皆様、ご協力有り難うございました。

# 岐阜県私立学校活動紹介

## 「ハンドベル演奏」

### 聖マリア女学院高等学校聖歌隊・ハンドベル・ダンス部

私たちは日々祈りの心を持って、練習に励んでいます。主に福祉施設でボランティア活動を行っています。

毎年夏には3部合同の定期公演、また、冬には私たち聖マリア女学院の伝統行事であるクリスマスの集いに向けて頑張っています。今年は12月24日にクリスマスの集い、12月28日には夏に延期になった第7回定期公演があります。

本日演奏させて頂く1曲目はG.F.ヘンデル作曲オラトリオ「メサイヤ」よりハレルヤです。この曲は私たち聖マリア女学院の卒業式に全校生徒で歌う曲です。今回はこの大切な曲を聖歌隊の晴れやかな声、ハンドベルのきれいな音色と華麗なダンスでお楽しみ下さい。

2曲目は、「神の御子は今宵しも」です。この曲はクリスマスの集いの最後に歌われる聖歌です。日本でもクリスマスの時期に歌われる定番の聖歌として、有名な曲になっています。最後に相応しく豪華に3部で演奏します。

(聖マリア女学院聖歌隊・ハンドベル部・ダンス部)



## 「ギター・マンドリン演奏」

### 学校法人富田学園ギター・マンドリン部 (富田高等学校・岐阜東高等学校合同)



私たちの3学年上の先輩の代からコロナ禍により多くの演奏の機会が中止となってしまいました。

そのため、今回、このような舞台上で演奏させてもらえることは本当に貴重な機会であり、この喜びをかみしめ、練習不足などもあります。歓迎と感謝の思いを込めて一生懸命演奏いたします。

これから演奏する曲は岐阜県出身の作曲家の藤掛廣幸が作曲されたマンドリン界では大変有名な曲で自然の風景の移り変わりが表現されている、

「パストラル・ファンタジー」です。どうぞお聴き下さい。

(富田学園ギター・マンドリン部)

# 報 告

## 「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会 長 吉 田 晋

Elon Reeve Musk氏は出生率が死亡率を超えるような変化がない限り、日本はいずれ消滅するだろうと言う。日本の出生率表では2021年に811,604人で過去最少。2022年上期で384,942人とさらに減少傾向だ。15から49歳までの年齢別出生率を合計した合計特殊出生率において人口維持を考えると2.07が必要だが、日本は10年以上前から2.05を割っている。



円安やロシアのウクライナ侵攻などで物流が悪くなっているが、日本は自分たちで作ったものだけで生活できない。日本において、唯一の資産は人だ。人口減少の対策として外国人労働者の雇入れやロボットが解決するのかもしれないが、出生率低下の中では貴重な子供を教育して、それを使う人をつくらなくてはならない。そのために教育が最も大事だと今一度政府が理解しなければならない。私立学校は少し問題があるとマスコミ取材がきて、理由を問わずお詫びをしなければ許されない。保護者から「厳しくして下さい」とお願いされても合わなくなると急にパワハラと言われる。それに振り回されるのが学校だ。そこで強く出られるのは私立学校だけだ。ほとんどの私立学校は入学時に誓約書を取る。だから、たとえ義務教育の中学校でも、学校のルールを破った場合は退学にすることも認められる。ところが公立学校では自分たちの思い通りにならないと「辞める」と大騒ぎする。高校であれば、やりたい未来があると言って通信制の高校に行く。最近では中学校までもが今の義務教育を全否定して、学校に籍を置いてプログレッシブスクールに何万人と通うようになった。

学校数、生徒数の推移では、公立高校は数を若干減らしているが、私立学校は維持し、生徒数も少しずつ伸びている。これには就学支援金の動きもあるかもしれないが、やはり私立学校の良さがあるからだ。私立学校は中高一貫校が多く、中等教育学校以上の中等教育をやっている。ただ、中学高校ともに入学金や施設費がなければやっていけない。

経常費補助（国庫）は平成24年に52,000円だったが、毎年伸びて57,000円になった。わずか5,000円だが比率ではずいぶん伸びた。地方交付税も毎年順調に上がっている。高等学校では財源措置額の349,910円を割っている県が11県、財源措置通りが3県だ。中学校では、45都道府県のうちの25校が財源措置を割り、5校が同額だ。つまり、財源措置をしてもらっても3分の2は出さない。なぜ教育がこれほどひどい目に遭わなければいけないのか。たとえば、トップの鳥取県と一番下の埼玉県を比べると17から18万円違う。同じ子供でも東京にいる子供と埼玉にいる子供では教育費負担が違う。東京では就学支援金だけでなく、東京在住なら神奈川や埼玉の学校に行っても授業料軽減補助を出す。その意味で、都道府県間で格差があるのはおかしい。中央で地方交付税も入れて予算を取っているのだから、それをぜひ私学にいただきたい。各県でこれからの予算要望活動を頑張ってください。

令和5年度の概算要求だが、私立高等学校の経常費補助の一般補助はプラス17億円、特別補助がプラス13億円と大学よりも内容的には増えた。そして生徒1人当たり単価は高等学校で1.3%プラス、746円プラスの58,156円だ。これも、文部科学省としては頑張ってくれた。これがどこまで下がるかだ。何が

あってもこの 1.3%を死守してほしい、さらに総務省の地方交付税は文部科学省の伸び率プラス 0.3 なので、なんとか 1.6%アップにしてほしいと活動している。

教育改革推進特別経費も ICT 教育環境の整備推進などで「拡充」と記されているが、金額が定まっておらず、要望額が対前年度比 7 億円増の 25 億円と書いてある。ICT 教育環境整備のための支援員の配置で、各学校に年間 30 万円が出ているが、年間 30 万円でのどのような人が雇えるのか。そして今回、新規で部活動指導員の配置促進が入った。東京のある中学校は地域にある工場のスポーツ部の選手たちが交代で遊びがてらに来てくれるから無料、あるいは時給 1,200 円で 1 日 3 時間。それで学校に適切な人が来てくれるのか。私立学校は必要な部活はコーチを雇うだから、特別経費の 25 億円が出ても、「お使い下さい」と私が自慢げに話すことはできない。授業料減免等は今まで通り。そして私立学校の耐震化の件が入っているが、もともと高等学校以下の耐震は平成 23 年の東日本大震災が発生するまでは私立学校のほうが高かった。公立学校はそれぞれの都道府県で地方交付税まで全部配置してもらって行うので 99.6%である。私立学校はいまだに 3 分の 1 だ。Is 値 0.3 未満がようやく大学と同じ 2 分の 1 になった。しかし 2 分の 1 でも生徒募集の状況などを考えると怖くてできない学校もある。人の命に関わるのだから少なくとも 5 分の 4 は必要だ。1 日も早くこの耐震問題を解決しなければいけない。

ICT 関連については毎年増えているが、文部科学省の予算の最大の欠点は 2 分の 1 補助だ。多くの学校から希望がきても予算額は増額されず、2 分の 1 が 4 分の 1 や 3 分の 1 に減る場合がある。そうすると予算を立てている学校は非常に困る。特に Wi-Fi 網などは大きくしないと厳しい。現実には、今、オンライン学習で動画を使う学校があると、1 教室で 30 から 40 人が動画を使うとパンクしてしまう。解消するためには Wi-Fi だけで 1 校 2,000~3,000 万円が必要だ。文部科学省に費用がないのなら、総務省が学校に共同アンテナを立ててほしいと言っているがうまく動いていない。私立学校施設高度化推進の利子助成や就学支援も結局は変わっていない。感染症対策等では抗原検査キットを各学校に常備するなども含めてやってほしい。

GIGA スクールの運営支援センターの機能強化だが、これは公立学校のためのもので必要なら私立学校も利用してよいということだ。しかし、私たちがこれを使っても間に合わない。ほとんどの学校は先生たちがボランティアで努力して生徒たちに 1 人 1 台の端末を持たせ、故障すると修理に出すなどの努力をしている。そういう目に見えないところを補助することが国の仕事ではないか。

新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金における電力・ガス・食料品等価格高騰重点支援地方交付金の創設だが、昨冬、私たちの学校でも電力費が前年比で月 30 万円や 50 万円の単位で上昇した。コロナ禍で、窓を開けてエアコンを回しており、さらに光熱水費はどんどん上がる。それを文部科学省に言うと、地方臨時交付金の中から各私立学校にもお金が出るようになった。県によっては何千万円ももらう学校もあるが、私学には出せないと言う県もある。各県の私学担当部署に要望してほしい。

令和の日本型学校教育を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて、昨年、審議がまとめられた。この話の中で最も大きいことが、教員免許状の 10 年更新の廃止だ。新たな教師の学びの姿の実現に向けて早急に講ずべき方策として、公立学校教師に対する学びの契機と機会の確実な提供、履歴の記録管理、受講奨励がある。10 年更新はないが、講習は受けさせないといけない。講習受講の有無は国の機構で一括管理する。しかし、講習会に行けば本当によくなるのか。そのために委員会をつくり、文部科学省がデジタル教科書の推進を行い、最近、結論が出た。児童生徒に応じて適切に多様な学びの手段を組み合わせることを掲げている。心配しているのは学びの手段としてハイブリッドな教育環境の整備とよく言われるが、オンライン双方向での授業は教員の負担以外の何ものでもない。全日制、通学型の学校は学校に来ることが本来の意義であり、要件だ。入院し、授業を録画して見せることはよい。しかし、不登校気味の子供がそれを当たり前のように思い、「コロナ禍にはできたのだから同じように対応しろ」と言われると先生方の負担が大きくなる。その活用のあり方も考えなければいけない。デジタル教科書は結果として、小学校・中学校で英語から入る。英語から入るメリットは発音だ。2 番目に数学・算数を始める。ただ、私は反対だ。これまで算数ではまず棒グラフ・折れ線グラフを定規と鉛筆で苦労して作った。器用、不器用はある



が、自分の手で書くから意味がある。それがパソコンへの数入力だけでグラフの作成も計算もできてしまう。それは本当によいことなのか。それよりも国語や社会で調べ学習などに使うほうが活きるのではないか。徐々に始まっていくが、英語は教科書とデジタルの両方が配付される時代が来るかもしれない。

新しい時代の高等学校教育の実現に向けた制度改正等で大きいことが高等学校通信教育の質保証だ。これは今までもあったが、通信教育実施計画の作成の明示など本来なかった。1年間の計画を科目ごとに記載して計画を出し、通信教育実施指導計画の策定をするという発想は全くなく、また、同時に面接指導をする生徒数も1人の先生が何百人も相手にしていた。それを今回は少し厳しくするというのだ。

18歳で成人になるので、社会性をしっかりと身につけ、自らで良いことと悪いことを判断し、責任をとれる子供をつくる。そのために必要なことが中等教育なのできちんとやっていきたい。

「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会だが、一番大きな問題は7月1日から変わった教育公務員特例法、それから教職免許法の一部改正によって教員免許状の更新制度がなくなったことだ。今、教員免許状を持つ先生方は全員、教員免許状が有効だ。ただし、新免許状ができたために新免許状ができる前に旧免許状で10年更新を受けていた人も10年ごとの期限があり、そこで期限が失効するようになっていて終わりのように見える。新免許状で満了日が令和4年の6月30日以前のもの、期限日前や旧免許状でも講習を受ける必要があった人は失効になるが、この方たちも各都道府県の免許状を発行先に申請すると更新講習などを受けることなく再授与される。それ以外の人たちは有効なのでそのままよい。何か疑問があれば問い合わせしてほしい。

次に、学校の働き方改革を踏まえた部活動改革である。この取り組みでの最大の疑問は子供たちの意見が何も入っていないことだ。サッカーであれば、毎日学校で練習しているが、週末は教師ではない人がコーチをする。そうすると選手選びは誰が行うのか。さらに、教師ではない人の引率で事故が起きたときは誰が責任を取るのか。「部活スポーツ産業に」と新聞に載った。教員の負担が大変だから外部登用をすると言うが資金はどうするのか。できないところも出てくる。地方で外部に指導ができる人たちが全くないところもある。いろいろな問題が出てくる。

新しい高等学校教育の実現に向けて、もう1つの大きいポイントはスクールミッションを4月からつくれということだ。これは、子供が学校選びをする上で、各高校が育成を目指す質能力を明確化することが重要であり、学校教育目標等が抽象的で分かりにくい、校内外への共有浸透が不十分といった指摘があったということだ。しかし、私立学校はこれを表にしっかり出しておかないと募集などできない。スクールミッションをしっかりとした上と言うが、高等学校の設置者が各学校や地元自治体等との関係者と連携しながら再定義となっている。つまり、これも公立学校のためだけだ。公立学校のスクールミッションなど決まっている。戦後、日本の教育水準が低くならないように高等学校を増やし、地域の教育力を上げた。第一次、第二次ベビーブームのときは、学校が足りず、私立学校がカバーした。慌てて学校をつくらうとしても間に合わない。だから、公立学校の数は戦後増えたが、私立学校は意外と増えていない。私立学校はそのように定員を増やしたりしながら協力してきた。それが今、公立学校は高等学校格差をはっきりとさせて、学区を外し、より良き生徒を自分の学校に入れようとしている。2017年、大学が3つのポリシーをつくった関係で私立高校の全ての学校に学校教育法施行規則の改正に伴い、3つのポリシーをつくるように言われている。これに対して東京私立中学高等学校協会会長は、私学のスクールポリシーは3つどころではない、8つも9つもあると発言された。3つのポリシーは大学のアドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを写しただけだが、私立学校はアドミッションポリシーの上に、入ってくる子供たちに対するポリシーも持つ。カリキュラムポリシーも教育課程をやっていく中で、さらにポリシーがある。2017年に大学が強制的に3つのポリシーをつくらされたときに文部科学省がその比較をつくらなかったことを私は怒った。なぜかと言うと、大学全体で十何学部あるところでもアドミッションポリシーは1つで、本学の教育に合ったなどの何行かの文章の大学もあれば、学校によっては学部ごとのアドミッションポリシーで英語の力は幾つでと、そこまで書いているところもある。そのようなばら

ばらのことやっても何にもならない。形式だけだ。今回も同様だ。ホームページに挙げておかないといけない時代が来たということであえて3つのポリシーを取り上げた。

最後に今、私立学校が唯一差をつけられることは英語教育だ。現在、小学校の5、6年生で英語教科が義務化され、3年生から英語活動が始まった。しかし、公立学校の教育は全然、英語が伸びていない。2019年、大学入試の英語4技能の外部試験導入が中止になった。公立学校と大学の反対で終わった。前の教育課程から中学校卒業時にCEFR A1レベル相当以上を5割、高校卒業時にA2レベル、英検準2級以上相当を5割という目標をつくった。これは十何年やっている。理解できないのは「相当」という言葉を使うことだ。「相当」を判断しているのは先生であり、その意味では半分なんて絶対がない。なぜかというとうそういう教育ができないからだ。海外で働きたいと思わない新入社員の推移では2015年くらいから海外で働きたいと思わなくなっている。一流企業に入って、日本で平和に給料をもらえばよいという人がどんどん増えている。だから、国は今、留学者を増やそうと頑張っている。その意味では大学の入試のあり方に関する検討会議や教育未来創造会議の一次提言、そして経済財政運営と改革の基本方針2022でみんな英語教育について述べている。大学入試のあり方に関する検討会議の提言の令和3年7月の段階でも4技能試験が駄目だと言っているのに、大学入学後に英語力について3つのポリシーへの位置付けが不十分な実態で、社会が必要とする英語力の水準の可視化が必要だと今さら言っている。そのようなことを言っていると、大学が遅れていく。現実にも、上智大学が5年以内にAO入試的な要素だけを90%にするとやっているし、早稲田大学も推薦やAOを60%くらいまで持ってくると言っている。英語4技能を見るためにはそちらのほうが良いということだ。

教育未来創造会議の一次提言で「知識と知恵を得る初等中等教育の充実、英語教育を強化する」と言っている。教育未来創造会議でも英語教育についてアドバランが多くあがったが、どれ1つ取っても資金がつかない。だから、今度こそきちんと資金をつければ無理だと言っている。学校英語教育の底上げのところでは授業時間数だけで必要な学習量を補うことは現実的ではない。しかし、「これまで教育課程外、校外での学習の促進方策は十分に意識されつつ」とあるが、働き方改革でやってはいけないというわけだろう。ここで初めて、ALT（外国語指導助手）の活用が出てくる。ALTは、国が半分お金を出し、半分は総務省の地方交付税で負担される。地方交付税のない東京都でも今、全額の2分の1を総務省が出している。海外大学卒業直後の若者たちが日本に来て、日本のことを学ぶとともに学校でALTをやりながら、楽しんで日本を好きになってもらうことが最高の目的だ。だから、本校のALTは当然ながら、専任の教員について一緒に英語の授業をやっている。それ以外に、昼食を一緒に食べたり、放課後にフリートーキングをする場をつくったり、生徒たちのよい友達として英語を話す機会を広げさせる。そういうツールとして便利に使える。また、大学に対しては教員採用研修の改善のところで、「英語のスコアを保持している者を先生にしる」と言うが、大学ではTOEICを進級要件にしているところもあるものの、それだけでスピーキングなどすべてをきちんとできるわけではない。その上、「特別免許状でALTの経験者や民間英会話教室の経験者などを先生に登用して」と言っている。つまり、ネイティブを置くことの大事さをやっと言い出した。そして、大学入試、社会との接続という中で国立大学法人運営費交付金によるインセンティブの付与がある。4技能の総合的な英語力の育成評価を普及していくため、各大学のモチベーションアップを図ることが必要である。その要件として私立大学と改革総合支援事業における調査項目を見直し、4技能の総合的な英語力を評価した入試を行っている大学に対し加点する。国立大学法人運営費交付金において4技能の総合的な英語力の育成評価に関する優れた取り組み等を進める組織整備に対して支援することを令和5年度概算要求にかかる事務連絡状で明確化する。最も4技能試験に反対したのは東京大学の教養学部で、高校以下にもっとお金を出して英語を伸ばしてほしいと訴えた。変な話だが、私は公立学校との格差はもっとつくれると思う。公立学校の先生は本来であれば5、6年で変わる。英語4技能を教えていた先生たちが、次の学校ではABCも書けない子供の指導もする。その繰り返しをしている間に、私立学校は指導を続けていける。これが、これからのわれわれのチャンスだ。

## 「教育政策と私学情勢について」

一般財団法人日本私学教育研究所 所 長 平 方 邦 行

日本私学教育研究所の研修参加者からの反応について、昨年までと違うことは積極的に参加しようという学校、教職員が増えたことだ。本大会も多くの方が参加している。6月の私学経営研修会には募集人員の120名を超える参加があった。私は15年前から20世紀型の教育から脱却して21世紀型の教育に変わらないと日本の教育は衰退し、世界から水をあけられると訴えてきた。20世紀後半に世界は大きく変わり、教育（社会）に求めることも変わった。ハーバード大学のRobert Keganは大人の3つの知性の第一に自己変容型知性を挙げている。変化していく社会のなかでは柔軟に対応できる力を養わないと変容する社会にはついていけない。つまり論理的思考のみならず、創造的思考力を身につけないと未来のさまざまな問題を解決するような考えは生まれず、協働して挑戦することができない。アメリカでは社会状況とその特質を分析して、世代をX、Y、Zそして $\alpha$ まで細分化している。1995年以降に生まれたZ世代は今20代後半でトップランナーだ。 $\alpha$ 世代は来年の4月に中学校に入学するくらいの子供たちだ。世代間の一番大きい差はICTの素養である。情報の教科は中学生でも理解でき、マニュアルを必要としない子供が育っている。そのなかでこれからの教育をどうするのか。未来社会を創造する、可能性を持った若者を養成することが重要だ。



私立学校の建学の精神は時代の究極の魂で、公立学校にない大切なものだ。在野の精神と先進性、先見性、そして独自性も持つべきだ。大きく成長するためにはファーストクラスではなくクリエイティブクラスの若者を養成する教育が必要である。果たして教員は生徒自身が未来をデザインできるようなプロジェクトベースの授業ができるだろうか。その授業ができれば生徒たちは実現力を持って考えを形にして進んでいくことができるようになる。時代は完全にその方向に動き、大学入試も変化している。早稲田大学と東北大学では統計的に見るとAO入試で入学した学生が成績が良いそうだ。上智大学は最終的にほとんどペーパー試験を止めるところまできている。大学によって幅はあるが、どんどん総合選抜型に移行している。プロジェクトベースの授業でなければ対応できない。時代が求める若者、いろいろな意味で21世紀型の学力を持った若者を養成していく必要がある。

では、日本私学教育研究所としてはどういう研修をするべきか。全国大会は5つの研修に分かれ、さまざまな協議がなされる。初任者から管理職まで、それぞれのキャリアステージに合わせて研修会を選ぶこと、そしてその成果をそれぞれの学校にどのように広めていくかも大切だ。日本私学教育研究所は今後もこのような研修会をレベルをあげて実施していきたい。年内には次世代リーダー育成部会、イノベーション教育（グローバル・ICT活用）研究部会の研修会がある。私学経営研修会開会式で吉田理事長は私学が未来を担う子どもを育てているという思いを持ってもらいたいと話した。旭山動物園園長の基調講演には私学の経営と動物園の経営には共通することがある等の感想が多く寄せられた。2日目には酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校と北嶺中学高等学校の視察を行い、私学の多様性を実感できたのではないかと話した。長塚篤夫・私学経営専門委員長は、研修会運営の方針として、社会の変化を乗り越える私学経営のあり方を模索し、私学の躍進、多様な視点と経験、知見、喫緊の課題を共有する研修会にしたいと話した。新型

コロナウイルス流行前に文部科学省は生徒 3 人にタブレット 1 台でよいと言っていた。ところがコロナ禍になると、GIGA スクール構想で経済産業省が 1 人 1 台と言い始めた。実際に 3 月から 6 月まで休校になった。一気に 1 人 1 台にして、タブレットや PC を使い、みんなオンラインの授業ができただろうか。いやできない。機器はあっても全員が接続したら回線がパンクしてしまう。つまり、ICT 環境が整っていなかった。それは今でも続いている。その辺りは行政だけでなく、学校も努力すべきだ。光熱費は地方や国が保障すべきだ。教育未来創造会議の一次提言、リカレント推進、出生数の問題もある。私立大学の英語教育と ICT 教育に多くの努力がなされた結果、私立中学校の受験生が非常に増えた。

ガバナンス改革が佳境に入る時期でもあったため多くの議論がなされたが、実際には私立学校の経営者にほとんど知識がないことがわかった。知らなかった、「そんなことがあるの」と言う人が多くいたことを覚えている。その他、経営の問題は多くあるが、みんな一つひとつ協力しながら解決していかないと私立学校の未来はない。ガバナンス改革はまだ終わっていない。最終的にどのような形になるかはわからないが、私立学校の独自性は薄くなっていくのではないか。

未来創造会議では 3 点の問題が挙げられた。人口減少を今後どのように考えるか、難しい問題だ。当然、生産労働人口も減るわけだが、それもどうするのか。さまざまな予測、考え方があって一概には言えないが、私たちが思っている以上に AI は進化しており、今まで 100 人でやっていた仕事をたった一人でできてしまうかもしれない。そうすると意外に解決が早いかもしれないが、人口が少なくなってよいわけではない。大きな問題がまだ山積みになっている。現在、世界的に見ても、クリエイティブクラスの若者を育てていく方向に動いている。ファーストクラスはピラミッドの頂点を目指させて、頂点に立った人たちをリーダーとする教育だ。そうではなく、生徒自身が得意なこと、つまりクリエイティブなことをそれぞれ育てて、社会のなかで競争あるいは協働して、みんなが活躍できるような教育を目指していこうというのがクリエイティブクラスの教育だ。

4 月から高等学校の新学指導要領が実施された。学習指導要領が違うから、今年の高校 1 年生は去年の 1 年生と異なる授業をしなければならないが、先生方はそれを深く意識しているだろうか。学習指導要領は万能ではないが、主体的、対話的で深い学びをすることで創造性を養うことができると書いてある。各教科をよく見ると、ほとんどの教科に創造性という言葉が入っている。以前は創造性という言葉は出ていない。学力の三要素のなかにも創造性はない。学習指導要領にはやり方は書いてない。言うのは簡単だが、養成するのは難しい。初めての教師はとても不安になり、どのように創造性を育てるかという研修会に参加したかもしれない。例えば、プロジェクトベースの授業は当然ブルーム型のタキソノミーを勉強しないと到達できず、それを基にした思考行動ができるかどうかが必要になる。

また、大阪府で教育課程部会を行った。参加者は創造性というものに疑問と不安を抱いていた。視察校の常翔学園中学高等学校は以前からプロジェクトベースの授業をしており、多くの授業を視察した。翌日はフューチャーインスティテュート株式会社代表取締役の為田裕行氏と私が講演を行った。今の中学生、高校生は卒業してもすぐに社会には出ない。大学や専門学校に行き、その後、大学院に行く者もいる。いろいろな生徒がいるが、早くても 10 年、あるいは 20 年、30 年後の社会で活躍していくのだから、そのときに困らない教育をしなければならない。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、世の中がニューノーマルになった今、オンライン授業は必要ないといって対面授業だけをしているわけにもいかない。さまざまな問題があるが、対面とオンラインを組み合わせて授業をすることに意味がある。また、教科のなかでも情報 I がにわかにはクローズアップされている。4 月から教科書が新しくなった。大学入学共通テストの企画委員も困っている。本来であれば、受験生が 1 万人に満たなければ旧課程で学んだ受験生と新課程の受験生の点数の差を調整する必要はな

い。しかし今回は調整しなければならないのではないかという議論が盛んに行われている。旧課程で学んだ今の高校2年生以上の受験生は新課程での試験を受けてもよいが、新課程、今の高校1年生以下は旧課程の試験を受けてはいけないというルールは決定している。しかしこれからも変更はあるだろう。じっくりと行く末を見守ってほしい。教育課程部会ではさまざまな話題、多くの疑問が出された。私は1989年のことを取りあげて話をした。文部科学省の学力の三要素の2番目は思考力、判断力、表現力であり、創造性、創造力はない。この3つを合わせて創造力というのであれば、屁理屈であるが、半分は納得せざるを得ないだろう。深い学びは評価とは別に授業デザインで興味関心を考慮することが重要だとある。教師がテーマや課題を決めても深い学びはできるが、感性、思いやり、好奇心、興味関心は育ちにくい。カリキュラムアレンジメントは教務が担うのではなく、専門部署を作って、学校のなかで推進していくことが必要だ。私立学校であるからには先進性、先見性、独自性を守らないと意味がない。これからは創造性を育むために自由を尊重した校風が必要だ。かんじがらめに縛られたなかで創造性は生まれにくい。同時に多様性を受け入れる受容力、寛容性も必要だ。これらを踏まえて今後どのように創造性を育てていくかを考えなくてはならない。自由と寛容性は双方向の学びと社会課題を解決するアイデアやイノベーション、それから最も大切な実行力を生み出す生徒を養成することが、学校に必要な精神だ。

教育課程部会では少人数での分散会も行った。多くの参加者からさまざまな意見が出された。為田氏からはデジタル機器は目的ではなく手段だということとさまざまな例の紹介があった。

新型コロナウイルスの流行によって、学校の教育活動はさまざまな変化があった反面、働き方改革や、学校のガバナンス、コンプライアンスの問題も先送りできない状況にある。法人管理事務運営部会では、今まで事務の関係者の参加が圧倒的に多かったが、理事長、校長、教頭や現場の運営に関わる先生方も多く参加したことが一番変わったことだと閉会式で工藤誠一・法人管理事務運営専門委員長が話した。

今回の大会にはクラブ活動に関する部会に特に人が集まった。部活動はどのくらいすればよいのか、何が問題なのかということは各学校の理事長、校長をはじめ一般の教職員も悩んでいる。解決のヒントをみつけようとしているのだろう。法人管理事務運営部会に参加する方はぜひさまざまな角度から発言してほしい。今までもさまざまな話をするによって、共通の思いを分かち合えたという参加者の声が多くあり、私たちもそう考えている。

修道中学高等学校で英語5技能教育特別部会を実施し、多数の先生方が参加した。来年も期待しているという声も多くあった。

全国の地区別初任者研修会は定員を越えたところも多くあった。吉田晋・日本私立中学高等学校連合会会長の資料に令和の日本型教育はすべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現をするのが一番の目的とある。しかし、果たして令和の日本型教育という扱いでよいのか。日本の教育はこれからどう変わっていくのか、人口動静とともにさまざまなことを考えなければならない。例えば1889年から100年後の1989年、それから100年後の2089年と日本はどう変わるのか。1889年は大日本帝国憲法が公布され、官学と私学が誕生した。1989年はベルリンの壁が崩壊したと同時に昭和が終わり平成に向かおうとした年だ。昭和の最後に生まれた人は2089年には100歳になる。現在の10代の子供たちは2089年には日本に限らず地球上で活躍しているだろう。この200年間をどのように考え、2089年の世界、社会をどう創造していくのかぜひ考えてほしい。それをバックキャストして考えることにより、2022年、2023年から2030年までの教育をどのようにしなければならないかがわかるだろう。

# 記念講演

## 「神岡でのニュートリノ研究を通して考える理科教育」

東京大学宇宙線研究所 教授 梶田 隆 章

私は高校で物理に興味を持ち、埼玉大学理学部でますますその魅力に惹かれて、大学院進学を決断し、素粒子や宇宙線のような分野の実験に関心があったことから、東京大学の小柴研究室に入ることとなり、それがニュートリノの研究へとつながっていった。

ニュートリノというものを簡単に説明すると、素粒子の一種であり、電子から電荷と質量を除いたようなものだ。原子の構造は中心に原子核があり、その周りを電子が飛んでいる。これは、原子核がプラスの電荷を持ち、電子がマイナスの電荷を持っているため、電氣的に引き合っている状態だ。その電子から電荷を取るとどうなるかということ、原子核のそばに粒子がきても、電氣的に引き合ったり、反発したりもせずに素通りしてしまう。これは、地球も簡単に突き抜けていくということだ。しかし、極まれに物質とぶつかることがある。ニュートリノは、いくら科学が進化しても、それ自体を目で見ることはできないが、この極まれに物質とぶつかることがあるという性質を利用すれば、ニュートリノを研究することができる。ある原子核とニュートリノがぶつかると、別の素粒子が飛び出す。電荷を持った素粒子を観測することはできる。仮に、このぶつかった原子核が水の原子核だった場合、飛び出した素粒子は水中を走り、そのとき、光を発する。この光を検出することができるので、それを解析すれば、それがニュートリノ反応だったということが分かる。



そもそも、なぜカミオカンデという実験装置を作ったのか。今から 50 年近く前、1970 年代の半ばごろに、新しい素粒子の理論が提案された。その理論では、原子核のなかにある陽子は、大体 10 の 30 乗年で崩壊する。つまり、10 の 30 乗年の寿命だということが予言されていた。10 の 30 乗年というのは、あまりピンとこないが、今の宇宙が 138 億歳、10 の 10 乗年だから、今の宇宙の年齢の 100 億倍の 100 億倍くらいの寿命だということだ。この寿命は非常に長い、観測可能だということ、世界中で陽子の崩壊を探そうという実験が始まった。その 1 つがカミオカンデ実験である。

カミオカンデは直径、高さとも 16m くらいの水タンクで、なかに 3,000 トンの水を入れ、地下に設置された。3,000 トンの水のなかにはたくさんの陽子があるので、ある日突然、陽子のうちのどれかが壊れるだろう。その瞬間には粒子が飛び出して光を発するはずなので、その光を捉えようという実験だった。この巨大な実験装置は、当然ながらどこにも売っていないため、1983 年の春、私たちは岐阜県の神岡に集まり、数カ月間かけて装置の建設をするところから始めた。このカミオカンデの実験グループのリーダーが小柴昌俊先生であったことから、院生だった私も参加することができた。

1983 年 7 月、ついに実験が開始された。陽子の崩壊を探するという目的だったが、あらゆる実験には信号もあればノイズもある。この実験の場合、信号は陽子の崩壊であり、ノイズはニュートリノだった。ニュートリノはいろいろな場面で作られるが、このノイズとなるニュートリノは地球の大気のなかで作られている。地球には常に宇宙から宇宙線という高エネルギーの粒子が降ってきている。その宇宙線が大気に入り、大気分子の原子核にぶつかると、パイオンという粒子が飛び出す。このパイオンは不安定で、すぐに壊れて別の粒子になるが、その過程でニュートリノが作られる。これらのニュートリノのほとんどは地球を通り抜けてどこかへ行ってしまいが、極まれに、カミオカンデのなかで、水の原子核とぶつかった。



そのときに出る光が陽子崩壊を探す際の、一番気を付けなければいけないノイズだった。

実験が始まって3年、1986年の時点でも、陽子の崩壊は見つかっていなかった。しかし、ノイズのニュートリノの数は増えてきており、ノイズのなかに陽子崩壊の信号が埋もれているのではないかという疑問が生まれた。そのため、ノイズをきちんと理解し、陽子崩壊の信号をしっかりと見分ける必要性が高まった。より高度な解析プログラムを用いて、いろいろなテストをし、今までカミオカンデで取られたニュートリノのデータを詳しく調べていくうちに、ミューニュートリノの数が予想よりもかなり少ないということが分かった。初めは解析プログラムに何か間違いがあるのだろうと考え、いろいろな角度から調べたが、大きな間違いは見つからなかった。そこで、これはもう、実際にミューニュートリノの数が少ないのではないかということで、論文にまとめることになった。この論文は非常に簡単で「予想値は140を超えているが、実際に観測されたミューニュートリノは85例であり、明らかに少ない。一方、電子ニュートリノは、観測データと予想値がよく合っている」という内容だった。この論文が発表されると、世界的には評判が悪く、カミオカンデは間違っていると議論された。しかし私たちは1年もかけて検証したのだから、単純な間違いであるわけがないと確信しており、私はこの謎の解明に専念することを決めた。長年、研究者をやっているが、今振り返ると、この頃が一番楽しくて、俗な言葉で言えば、謎を解き明かすような、ワクワクを感じながら研究をしていた。残念ながら、そのデータでは何が起きているかまでは分からなかったが、可能性の1つとして、ニュートリノ振動の存在は頭にあった。それまでの物理の理論ではニュートリノには質量がないとされていたが、もし、ニュートリノが質量を持つならば、飛んでいる間に、そのタイプを変えるということが理論的に予言されていたからだ。たとえば、左端でミューニュートリノというニュートリノが生まれ、右に向かって飛んでいくと、途中でタウニュートリノというものになり、さらに飛んでいくと、ミューニュートリノに戻る。さらに飛んでいくと、また、タウニュートリノになる。というように、種類を変えることを繰り返しながら飛んでいるというのがニュートリノ振動だ。仮に、このようなことが起きているならば、ミューニュートリノの観測が少なかったことの説明が自然にできるなど思っていた。ただし、これはあくまでも可能性の1つだったので、ニュートリノ振動なのか、他の違う理由なのかをはっきりさせたいと思っていた。

ニュートリノは地球の大気で作られるから、観測されたニュートリノの一部はカミオカンデの上の大気で作られたものだと考えられる。つまり、約10km、20kmの上空で作られたニュートリノは、カミオカンデに入るまでには、飛行距離が短いので、ニュートリノ振動をする暇がないと考えられる。一方、地球の反対側の大気で作られたニュートリノがカミオカンデに入るためには地球を通過して、1万kmもの長い距離を飛んでくることになる。そうすると、飛行距離が長いので、その間に振動しながら飛んでくるだろう。つまり、下向きのニュートリノはそのままの数が観測され、上向きのニュートリノは減っているというように見える。ニュートリノ振動と言えるのではないかと考えながら研究をしていた。ただし、カミオカンデの3,000トンの測定器では小さすぎて、明確なことは分からなかった。そこで、スーパーカミオカンデの実験に移ることになった。スーパーカミオカンデはカミオカンデを大きくしたようなもので、直径40m、高さ40mの水槽のなかに5万トンの水を蓄えた装置である。1992年にスーパーカミオカンデの実験を日米の研究者が協力して実施すると決まり、1995年に水槽中に光検出器を取り付ける作業を開始、翌96年の4月から実験が始まった。

実験が始まるとすぐに非常に質のよいデータが取れ始めた。ミューニュートリノの反応が毎日10回ほど観測され、国際共同グループの研究者が手分けをして解析作業をした。昔は、アインシュタインなど1人の名前で論文を書くことが多かったが、今は多くの人が共同で進め、知恵を出し合い、分担しながら研究をするというスタイルが主流だ。皆で懸命に解析を進めた結果、2年後の1998年、岐阜県の高山市で行われたニュートリノ国際会議で、最初の大きな成果を報告することができた。そのなかの1つ、ミューニュートリノがどの方向からどのくらいの数がきているかを少し説明する。

上向きというのは、地球の反対側からきているということだが、下向きのニュートリノはデータと予想値が非常によく合っていて、上向きのニュートリノのデータは予想値の半分になっている。これはまさに、

ニュートリノ振動で予想されていたことであり、長い距離を走ってくるニュートリノは途中でニュートリノ振動が起こって、タウニュートリノになったり、ミューニュートリノに戻ったりしながら移動するためにミューニュートリノの数が半分になっていることを示している。つまり、ニュートリノに小さい質量があるということが発見した。この報告により、世界の研究者は納得した。そして、この研究結果について、当時、米国の大統領であったクリントン氏がマサチューセッツ工科大学の卒業式の演説のなかで言及し、とてもありがたいと感じた。今でも YouTube に載っているが、その部分を訳してみる。「ちょうど昨日、日本で物理学者がニュートリノに小さい質量があると報告した。ところで、このことはほとんどのアメリカ人には大して意味もないだろう。しかしこのことは最も小さな素粒子や宇宙がどのように成り立っているか、そして宇宙がどのように膨張するかというようなことに関する最も基本的な理論を変えるかもしれない」。もちろん「スーパーカミオカンデにはアメリカも大きく貢献しています」ということも言っているが、「もっと大きな点ではこのような発見の影響は実験室に限らないということだ。それは社会全体、経済だけでなく、生活に対する考え方、他者との関係、そして私たちの歴史上での位置などに影響を及ぼすだろう」ということも言っていた。このようにして、ニュートリノ振動を発見したわけだが、この問題に遭遇してから、これがニュートリノ振動だという結論に至るまでには 10 年以上の歳月がかかった。10 年と聞くと長いと思われるかもしれないが、ニュートリノの世界で、もう 1 つ、長らく問題となっていた、太陽ニュートリノ問題などは問題発覚からニュートリノ振動だと分かるまでに 30 年以上かかったので、10 年で結論が得られたことは本当に運が良かったのだ。

中学高等学校の生徒には、世の中にはこのように時間がかかる仕事がある、一刻を争って素早く回答を見つけることだけが大事なことではないということを知っていただきたい。

また、今の日本は経済成長が止まり、国はどうか科学技術をベースに経済成長を達成しようと、役に立つ研究ばかりに力を入れているが、純粹に、自然を理解するための研究も大切だ。人や社会の役に立つためにするのが研究だと考えている人は多いと思うが、それだけではなく、人類の知の地平線を広げるような研究もあるということも知っていただきたい。

ここで、なぜ、アメリカの大統領がニュートリノの質量について演説で言及するほど、このことが重要なのかを少し説明する。素粒子にはいろいろな種類があり、電子の仲間は 3 種類、クォークの仲間は 6 種類ある。ニュートリノに質量があることが分かってから、ほぼ、4 分の 1 世紀が経つが、その間に研究がだいぶ進み、ニュートリノの質量は他の電子やクォークの仲間と比べて、100 億倍以上軽いということも分かった。この小さなニュートリノの質量が素粒子の世界や宇宙についてより深く理解するための鍵だと言われており、世界中で研究がなされている。なぜ、ニュートリノの質量だけがこんなにも小さいのかが解明できれば、それは、素粒子の世界のことをより深く理解することにつながるだろう。スバル望遠鏡で撮った遠方の宇宙の写真を見ると、たくさんの銀河が写っている。私たちはこれらの銀河はすべて物質でできていることやこの宇宙が 138 億年前のビッグバンで始まったということを知っている。ビッグバンの宇宙というのはものすごく熱い宇宙だ。その熱い宇宙では、簡単に言えば、そのエネルギーから物質と反物質が常に一緒に生まれていた。つまり、物質と反物質は同じ数だけあった。それがだんだん冷えていくとき、今度は、物質と反物質がぶつかり合って消えていった。その結果、普通に考えれば、宇宙には何も残らないと思われるが、実際は物質が宇宙を形づくっている。一体これはどういうことだろう。今、分かっていることは、ビッグバンのころに生まれた、10 億 1 個の物質粒子と、10 億個の反物質の粒子が、宇宙が冷えていくなかでぶつかり合って消えたとき、物質粒子 10 億 1 個のうちの 1 個が残って、この銀河宇宙を形づくったということだ。では、なぜ、そこに余計な 1 個があったのか。残念ながら、今はまだ、それを説明することができていない。ただし、理論的には、小さい質量を持ったニュートリノによって、この宇宙の物質の起源、つまり、残った 1 個についての説明ができるだろうと予言されている。今、この予言を確かめようと、新たな研究が始まっている。スーパーカミオカンデの 10 倍ぐらいの大きさのハイパーカミオカンデという装置を作り、世界の仲間とともにニュートリノのニュートリノ振動と、反ニュートリノのニュートリノ振動の違いがあるかどうかを調べ、宇宙の物質の起源の問題に挑もうとしている。



私はニュートリノ研究を 20 年以上続けてきたが、ニュートリノに小さな質量があるとわかり、研究は一段落したと感じた。そこで、次にまた、何か新しいことをしたいと思い、2008 年に宇宙線研究所の所長になった当時、研究所として重力波の研究を進めることになっていたのも、KAGRA プロジェクトに参加することにした。これは 2010 年に建設が開始され、19 年に完成して、来年春からの本格的な観測開始を目指して、現在、調整中だ。今が一番楽しく、大変なときかなと感じている。

最後に、今、私が少し気になっているデータを 2 つ示す。1 つ目は日本財団の 18 歳意識調査の数字だ。日本を含む 6 か国の 18 歳に対して意識調査をした今年の結果である。たとえば「将来の夢を持っている」という質問に対し、インドの若者の回答は 93.3%が YES だが、日本の若者は 59.6%。「自分の将来が楽しみである」についてはインドが 1 位で、日本は突出して低く、YES が 57.8%。また「多少リスクが伴っても、新しいことにたくさん挑戦したい」についても、インドが 1 位で、日本は突出して最下位の 49%という結果が出ている。私はこの結果から現在の日本の教育は根本的な問題を抱えているのではないかと感じた。ぜひ、若者が将来の夢を持ち、挑戦する気持ちを持てる教育をしていただければと思う。

2 つ目は、日本のいわゆる旧帝国大学の学生数に占める女子学生の比率だ。東京大学は最下位の 19%。京都大学は下から 2 番目の 22%。そのあと、幾つかの大学が続き、だいたい 30%となっている。世界の大学を見るとプリンストン大学は 48%、ハーバード大学は 47%、メルボルン大学は 55%、北京大学は 53%となっており、ほぼ人口比と同じだ。なぜ日本は女子学生比率がこんなに低いのか。さらに、大学生と大学院生の女子学生比率を専門分野ごとに示したデータでは工学分野は十数パーセント、理学分野は二十数パーセントであり、この 2 つの分野が圧倒的に低い。本当にこれでいいのだろうか。これが教育の問題なのかどうかは分からないが、日本社会の何かの間違っているのではないかと感じる。ぜひ、日本も他の国のように女性が理工系で活躍できる国になるよう、これからの教育をしていただきたい。

最後にまとめると、神岡で私が長年携わってきた研究スタイルは自分にとっても合っていた。自分に合ったスタイルに出会えるということは本当に幸運なことだ。当時は、研究が本当に楽しくて、カミオカンデから出たデータが物理学の発展への貢献になると思うとやりがいも強く感じていた。そしてこのとき、私は研究の世界にさらに強く惹かれ、本気で研究者になろうと考えるようになった。ちなみに、ご存じのとおり、小柴先生は 2002 年、このカミオカンデのニュートリノ研究でノーベル物理学賞を受賞された。そもそも、理科というものは自然の不思議を学ぶ教科だと思うが、私たちの研究はその延長線上にある。だから、私たちの研究活動が、これからの理科教育を考える際に何らかの形で有用なのではないかと考えている。また、研究の世界では多くの場合、納得いくまで調べた結果、初めて論文としてまとめることができる。しかし、中学生高校生にとって納得がいくまで調べるということは難しいことだろう。それでも、時間を気にせず何かを調べるような経験を一度はしてほしいと願っている。そのための具体的な学習方法については分からないが、自分の思うことをやり抜く力や大切なものに出会ったときにそれを大切だと見抜く力などを身に付けてほしい。さらに、現在の科学研究では国際共同研究が当たり前だが、このようなグローバル化は研究に限ったことではない。日本は地理的な条件から国際化のハードルは少し高いが、私自身はアメリカの研究グループが共同研究者として身近にいたことは非常に良かったと実感している。もちろん英語の練習にもなった。これからは文系、理系を問わず、英語が必須だという意識を中学生高校生にしっかり持ってもらうことも大切だと思う。また、チームワークで何かを成し遂げるという経験をもっともっと積んでほしいとも思っている。私たちが行ってきた研究は人類の知の地平線を拡大するようなものだ。これからも多くの中学生高校生が研究者となって、知の地平線を拡大し続けてくれることを期待している。また、すべての学生が自分の将来の夢を思い描きながら、学生生活を送ってほしいと願っている。



# 私学経営部会

Society5.0、少子高齢化等により私学教育を取り巻く環境が大きく変化する中、コロナ禍による社会構造の变革や新しい価値観のもと、私学には今まで以上に予測困難な状況を乗り越えることのできる柔軟な経営が求められる。

私学は社会が大きく変化する度に新しい挑戦を続け、常に独自の特色ある教育を行い、次の世代を担う多くの人材を輩出し続けてきた。そして、常にその根幹にあったのは、建学の精神や創設者の理念である。

これからも私学の使命として、多様性に満ちた人間の育成を行うために各校が培ってきた歴史や伝統、理念を堅持しつつ私学の新たな存在意義や社会的役割の再構築を行い、持続可能な社会への貢献や未来を見据えた教育を実践していかねばならない。

当部会において広石英記・東京電機大学副学長と大橋博行・有限会社大橋量器代表取締役による講演やパネル・ディスカッションを通して「私学が担い、私学にしかできない」私学独自の経営について探っていききたい。

- 1 研究目標 未来を見据えた私学経営
- 2 会 場 都ホテル岐阜長良川 2階 ボールルーム 2/3
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、事務局長、事務長またはこれらに準ずる管理職
- 4 参加人員 147名
- 5 日 程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16
月日	15	45					30	
10月21日 (金)	開 会 式	講 演 I	講 演 II	昼 食		パ ネ ル ・ デ ィ ス カ ッ シ ョ ン		閉 会 式

## 6 内容・日程細目

8:30	受 付 (平井 学・高橋 由美子)	機材担当：河原林 博史 記録(写真)担当：加藤 憲一 集録担当：加藤 憲一
9:00	開 会 式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員・専門委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：高橋 由美子／記録：加藤 憲一 私学経営部会運営委員長 松 本 文 夫
9:15	講 演 I 演 題 「『建学の精神』の再創造と教育イノベーション ～私学にしかできない教育構想のデザイン～」	司会：平井 学／記録：加藤 憲一 講師紹介：平井 学
10:45	講 師 広 石 英 記 東京電機大学 副学長	

10:45	講演Ⅱ 演題 「伝統の地場産業の挑戦」 講師 大橋博行 有限会社大橋量器 代表取締役	司会：高橋 由美子／記録：加藤 憲一 講師紹介：高橋 由美子
12:00	昼食	
13:00	パネル・ディスカッション テーマ 「未来を見据えた私学経営を考える」 パネリスト 下屋 浩 実 (岐阜県) 高山西高等学校 理事長・統括校長 萩原 昭 人 (福井県) 啓新高等学校 理事長・校長 大多和 聡 宏 (島根県) 学校法人大多和学園 理事長 コーディネーター 長塚 篤 夫 (東京都) 順天中学高等学校 校長	司会：平井 学／記録：加藤 憲一
15:30	閉会式 1. 開式の辞 2. 総括 3. 専門委員長挨拶 4. 閉会の辞	司会：高橋 由美子／記録：加藤 憲一 私学経営部会運営委員長 松本文夫 私学経営専門委員長 長塚篤夫
16:00	解散	

7 講師・パネリスト・コーディネーター (順不同)

広石 英 記	東 京 電 機 大 学	副学長
大橋 博 行	有 限 会 社 大 橋 量 器	代表取締役
下屋 浩 実	高 山 西 高 等 学 校	理事長・統括校長
萩原 昭 人	啓 新 高 等 学 校	理事長・校長
大多和 聡 宏	学 校 法 人 大 多 和 学 園	理事長
長塚 篤 夫	順 天 中 学 高 等 学 校	校長

8 運営委員・指導員 (順不同)

委員長 松本文夫	岐 阜 女 子 高 等 学 校	校長
副委員長 鈴木康博	多 治 見 西 高 等 学 校	校長
委員 高橋由美子	岐 阜 女 子 高 等 学 校	副校長
平井 学	多 治 見 西 高 等 学 校	副校長
河原林 博史	岐 阜 女 子 高 等 学 校	教頭
加藤 憲一	多 治 見 西 高 等 学 校	事務職員

9 専門委員・指導員 (順不同)

委員長 長塚篤夫	順 天 中 学 高 等 学 校	校長
副委員長 鈴木康之	水 戸 女 子 高 等 学 校	理事長・校長
委員 西岡憲廣	札 幌 山 の 手 高 等 学 校	理事長・校長
山本与志春	学 校 法 人 青 山 学 院	院長
大多和 聡 宏	学 校 法 人 大 多 和 学 園	理事長
菅沼 宏比古	学 校 法 人 西 海 学 園	理事長

私学経営部会 講演 I

## 『建学の精神』の再創造と教育イノベーション ～私学にしかできない教育構想のデザイン～

東京電機大学 副学長  
広石 英 記

本日は、「建学の精神の再創造と教育イノベーション～私学にしかできない教育構想のデザイン～」というテーマで話をさせて頂く。私は、現在、日本私学教育研究所の特別招聘研究員という立場で、様々な私学教員研修のお手伝いをさせて頂いている。また、本務校では、副学長兼教育改善推進室長として、建学の精神を活かした私立大学のカリキュラム改革を構想、立案、実施してきた。このような経験を踏まえて、私学経営に携わられている先生方に、少しでも今後の参考になるよう話をさせて頂く。



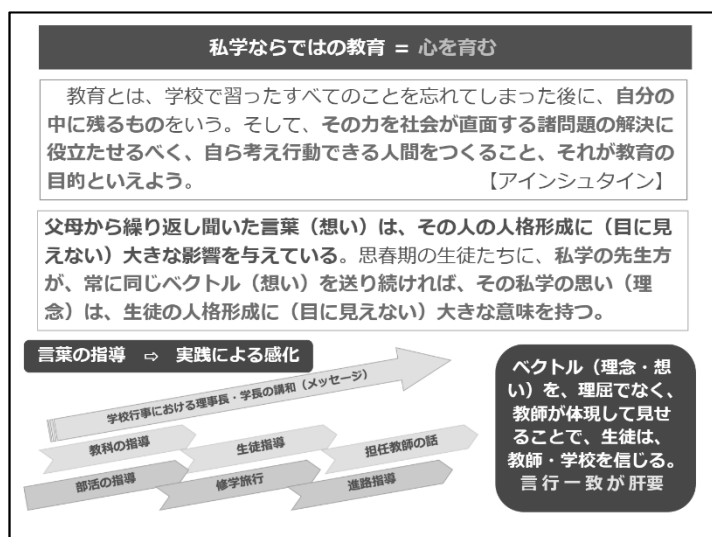
二宮尊徳の言葉に「道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は寝言である」というものがある。これは、渋沢栄一の『論語と算盤（そろばん）』と同趣旨の言葉であり、「何事も立派な目的と、それと合致した立派な方法がなければ、求める本当の成果は期待できない」という趣旨だと解される。これを私学経営に当てはめた場合に、私は「私学において、理念（建学の精神）なき改革は、無定見な迷走であり、最適な教育を追求しない理念（建学の精神）は、意味なき装飾である」と言い換えることができると考えている。逆に言えば、「目指すべき理念（建学の精神）を共有し、それを具現化する個性的教育を展開して初めて私学教育は輝く」ということである。

このような考えは、私の過去5年間にわたる私立大学の教育改革の経験から導いたことである。大学のカリキュラム改革を学長から任される立場になった時に、私が考えたことは、『建学の精神』を活かし、時代に求められる個性ある教育を、関係者全員で、全ての教育活動で一貫して実現したい」ということだった。この建学の精神の具現化のため、私はその手順を戦略的に考えて、教育改革に着手した。具体的には、第一に、本学卒業生が就職している企業アンケートなどから本学卒業生の強みや弱みを分析し、教育改革の方向性、つまり卒業生に求める資質・能力の内実を定めること、第二に抽象的で分かりづらい「建学の精神」を大学関係者にとって「分かりやすく、教育可能で、魅力ある」資質・能力（コンピテンシー）に読み換えて3つのポリシーを作成すること、第三に改正されたポリシーを関係者全員（まずは教職員）が共有するためにFDを実施すること、第四に共有されたポリシーを具体化するために、全学カリキュラム改編（初年次科目、アセスメント科目、技術者教養科目の設置）を実施し、そして最後の仕上げで、全ての授業でポリシーを意識化する施策（マイクロインサージョン）を取り入れること、と時系列で整理することができる。この一連のカリキュラム改革により、私の勤める私立大学では、建学の精神を鮮明化し、新しい時代に求められる個性的なエンジニア教育を実現できた。

この経験から言えることは、「私学らしい質の高い教育」を実現する要件は、二つあるということである。一つは、私学らしい教育の必要条件として「建学の精神を反映した個性的教育」を行うということ

である。創立者の建学の精神（哲学・理念）と歴史的伝統を掲げ、私学らしい個性的な教育を推進することが私学の第一の使命だからである。それに加え十分条件として「時代に応える質の高い教育」を行うことが必須と考える。少子化・都市集中など私学の経営環境は厳しさを増している。この時代に輝き続ける私学であるためには、私学の良さを活かして時代の要請（アクティブラーニング、SDGs、ICT、個別最適、探究など）に応える質の高い教育が求められているからである。

この「私学らしい質の高い教育」を、中高において推進するためには、あらゆる教科の授業も、総合的な探究も、学校行事も含め、全ての教育活動において建学の精神（理念）の具現化を目指すということに尽きる。すなわち、**建学の精神の具現化の視点から、新しい社会的要請（AL・SDGs・探究学習）の実現を構想する**ということである。常に上位には、「建学の精神」という志（こころざし）がなければならない。この私学の魂ともいえるべき建学の精神という哲学（志）を見失うと、時々々の国の教育施策に振り回されて右往左往し、教育改革の後追いに終始してしまい、私学らしいドンと構えた個性的教育は到底実現できない。



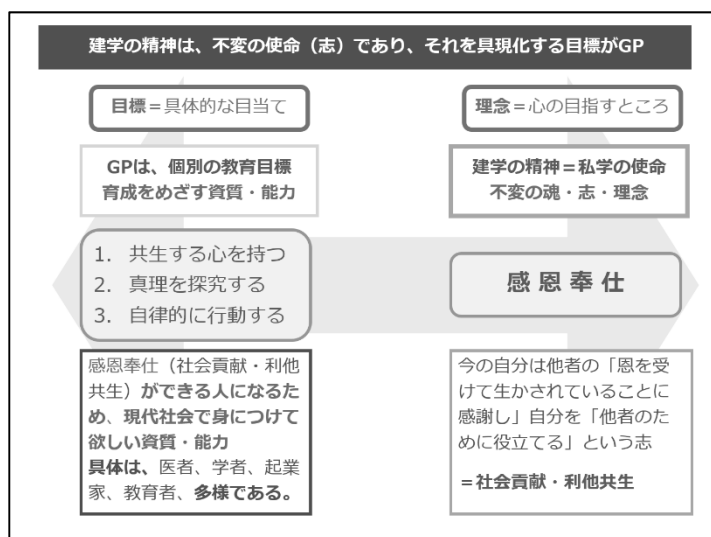
それでは「建学の精神」の再創造と教育イノベーションに向けて私が取った具体的施策を簡潔に説明する。まずは、教育目標を明確化し、新しいカリキュラムを構想するために、抽象的な表現に留まっている「建学の精神」を、時代に求められる教育可能な資質・能力として3つのポリシーに読み替える「再創造」を行った。教育改革を行う上で、大切なことは、学校関係者（教職員、生徒、保護者、地域）が、自らの学校の教育目標（ビジョン）を深く理解し、共有し、実践に活か

すことである。これができること、様々な教育活動のベクトルを揃えることができ、ベクトルの和である組織の力は大きくなり、生徒の学びを力強くサポートできる。教職員の教育目標の理解が浅く、そのビジョンが示す理念や志が共有されていないと、個々の授業や学校行事の方針は、先生ごとに解釈が異なり、その指導指針であるベクトルが、迷走、衝突することによって生徒は、混乱してしまい、被害者になってしまう。

図に描いたが、学校教育の使命も父母の役割も基本的に同じである。子供たちに「こんな人間になって欲しい」という強い想いを伝えることだと考える。様々な学校の教育活動の中で、先生方の想いのこもった言葉のベクトルが揃っていれば、生徒には大きな力となってその成長を促す。ただし、これは単なる言葉（理屈）による指導では不十分であり、先生方自身の生き様として体現して見せることがなにより大切である。教育活動において、教師の言行一致が最も大きなメッセージとなることを、私たちは肝に銘ずべきである。その意味では、建学の精神を時代の要請を踏まえた新しいスクールポリシー（以下：SP）として再創造するという事は、その学校の先生方全員が、自らの生き方を今一度振り返る覚

悟のいる取り組みであると言える。

私学にとって不易（不変）の使命である建学の精神を今の時代に合わせて再創造する SP の作成にあたって留意すべきは、私学はそれぞれ個性的な建学の精神を持っており、この独自性を手放し、教育用語を散りばめた総花的なものを作ってしまうと、自らの「私学のよさ」を手放してしまうということである。総花的なポリシーは、一見よさそうに思えるが、実は没個性につながり、生徒への訴求力は弱くなる。私たち私学人には、自らの私学の建学の精神を読み込み、それを今の時代に合わせて磨き研ぎ澄ますことが求められる。



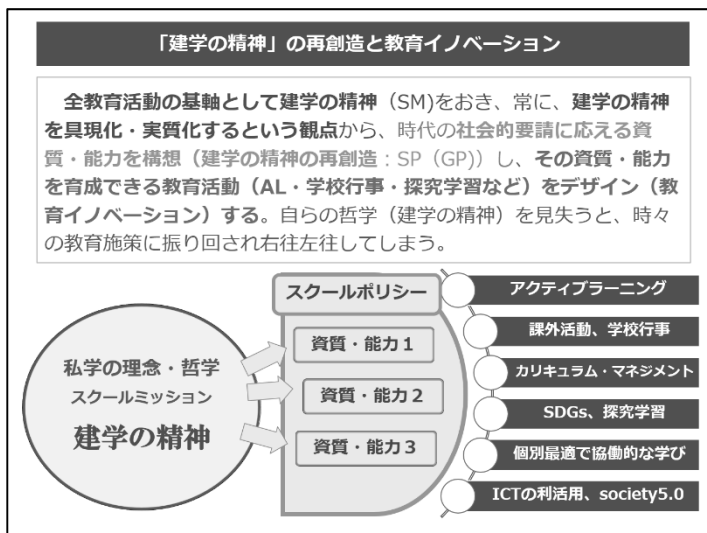
また、スクールミッション（以下 SM）である建学の精神を、教育可能で、検証（評価）可能な SP、中でもグラジュエーションポリシー（以下 GP：育成をめざす資質・能力）へと変換する際は、世界の能力観が学力（知識・技能）概念から資質・能力（コンピテンシー）概念へと転換したことを意識して、学校内だけで通じる学力ではなく、成人後も社会で使える汎用的能力をイメージし、具体的教育活動が構想できるコンピテンシーベースの資質・能力（例えば、21 世紀スキルや

キーコンピテンシーなど）を検討することも重要な観点である。

具体的に説明すると、例えば仏教系の私学の多くには建学の精神に「感恩奉仕」（恩を受け生かされていることに感謝し、他者に尽くす精神）があるが、これは私学の教育理念（志）であり普遍的使命である。そのような人物を育成するために、具体的な目当てとなる個別の教育目標が SP となります。図では、それを「共生する心を持つ」「真理を探究する」「自律的に行動する」と表現してみた。SP を作成する場合は、創立者の言葉や精神に内在する普遍的な価値を見極め、その普遍的価値を現代的な言葉で表現する必要がある。その際には、創設当時の社会状況と現代の社会状況の違いに着目し、今、創立者が生きていたら、なんと表現されるか想像し、難解なものを避けて、シンプルで語感の強いものが訴求力（インパクト）が高くなる。

建学の精神を再創造する SP の作成は、創立者を神格化することでも、無批判に絶対視することでもない。創立者の言葉や生き方に内在する人間的価値を教職員が見極め、それを現代に置き換えて批判的に判断し、日々の行動に反映するための繰り返されるべき「学びの共同体である学校」の当然の営みである。

学校も含めたあらゆる共同体・組織には、共通の物語（哲学・志）が必要である。共有された志（こころざし）である組織の使命の達成のためには、人は痛みを伴う改革にも取り組むことができる。実効性のある学校改革のためには、教育改革の旗印にできる建学の精神を再創造した明快な GP を定めることがとても大切である。



教育改革の次の段階が、図に示したような個別の具体的教育計画の策定になる。全教育活動の基軸として建学の精神 (SM)をおき、常に、建学の精神を具現化・実質化するという観点から、時代の要請に応える資質・能力を構想 (SP (GP)) し、その資質・能力を育成できる教育活動 (AL・学校行事・探究学習など) をデザインするという基本構造である。社会で生きる力・コンピテンシーへ読み直した教育目標 (GP) を、全ての教育活動を貫徹するコア (基軸) として、具体的なカリキュラム・マネジメントを検討する段階である。

この具体的カリキュラム構想の段階で重要なことは、先生も生徒も建学の精神を具体化した GP を意識できるように、特色ある科目や、特色ある学校行事、様々なツールやルーブリックを用いて GP を日々の教育実践において「見える化」する工夫 をすることである。

特に、学習指導要領の制約が少ない探究学習は、各私立校の個性的な教育目標を具現化できるユニークな学びが自由に構想できる分野である。私学の GP を鮮明化する探究学習をデザインすることは、生徒も先生も意識改革を行う上で、非常に有効な手段となる。これに関しては、次年度の日本私学教育研究所の主催する若手教員研修や中堅教員研修で、取り上げる予定となっているので、興味のある先生は、是非、中堅や若手の先生方に参加を促して頂きたい。

いずれにしても、私学の場合は、あらゆる教育目標の最上位に「建学の精神」(SM)があり、それをより具体化した「教育目標」SP (GP) があるという、この構造を見失わないことが大切である。私学のカリキュラムの核心が、この教育目標の実現であり、この GP で掲げた資質・能力を育成するために、その育成の手段としてアクティブラーニングや課外活動、学校行事や探究学習、個別最適な学びや ICT を利活用するという構造である。あくまでも教育目的は、建学の精神の具現化、そのための個別の目標が GP の育成、そのための適切な手段として最適な教育方法を選択するということであり、その逆では決してないということである。

「建学の精神の深い理解 → 建学の精神の再創造 (GP の作成) → GP の理解と共有 → 具体的カリキュラム改革」という私学の使命から逆向きにデザインすることによって、私学のあらゆる教育活動は、「常に共通する理念を意識した意味ある活動」に転換することが可能になる。それは、学校行事を構想する時、総合的な探究の時間を検討する時だけではなく、部活動の指導においても、個々の授業構想においても、可能なのである。

具体的に、「GP を意識した教育デザイン」とその意識のない授業構想を比較した表を作ってみたので、参考にして頂ければと思う。この表にあるように、一つ一つの授業において、建学の精神や、それを具体化した GP を意識することができれば、その私学で育つ子供たちの人格形成に大きな影響を与えるこ

授業デザイン（構想）のカリマネ・ポイント実践事例	
カリキュラム・マネジメント（デザイン思考）なしの授業	カリキュラム・マネジメント（デザイン思考）ありの授業
教科書に沿って授業を進めるので、学校の教育目標は意識していない。	教科書の授業においても、学校の教育目標(GP)を意識した活動を入れている。
学習指導要領を聞かず、教科特有の見方・考え方を確認していない。	学習の中期的目的として、教科特有の見方・考え方を意識している。
担当クラス他教科の状況や総合学習の進捗は、確認していない。	生徒の「学び」を総合的に捉えるため、他教科、総合との関連性を意識する。
個別の学習単元の教育目標は、教師用教科書で確認している。	既習単元の確認と、次の学習単元への関連性（学びの流れ）を意識している。
生徒の習熟度、単元に対する興味関心の度合いを確認していない。	生徒の習熟度を調査し、学習単元への興味関心を喚起する手立てを構想する。
教科書に沿って授業を進めるので、一斉授業形式になりがち。	育みたい資質・能力(GP)を意識した、能動的学習を意識する。

とができる。学校のあらゆる教育活動の隅々まで、建学の精神という魂（スピリッツ）が行き渡れば、それは単なる教育改善というより、私学として新しく生まれ変わる教育刷新（カリキュラムイノベーション）と言っても過言ではない。

多くの私学で見られる、兄や姉が卒業生である保護者が、弟や妹もその私学に入れたがるという現象、これは、「この私学で、確かに（兄や姉は）人として成長した」という実感を親御さんが持たれているから起きる

ことであり、偏差値などの問題ではない。この「人としての成長」を支える「個性ある教育を腰を据えてできる」ために、私学には公立校にない教育活動の基軸としての建学の精神と、中長期的に安定した人間関係という素晴らしい強みがある。

建学の精神を深く理解し、それを再創造して GP で掲げた教育目標（育みたい資質・能力）を教育活動で一貫して追求する価値として、全てのカリキュラム（教科学習、教科外活動）を編み直すことが重要である。

最後に繰り返しになるが、私学において、理念（建学の精神）なき改革は、無定見な迷走であり、最適な教育を追求しない理念（建学の精神）は、意味なき装飾である。「目指すべき理念（建学の精神）を共有し、それを具現化する個性的教育を展開して初めて私学教育は輝く」ということを、私たち私学人は、忘れてはならないと考える。

「毎日が楽しかった」「この学校での経験（学び）は、忘れない」「この学校で、自分の夢が見えてきた」「この学校に来て、本当に良かった」「また、悩んだ時は帰ってきます」こんな生徒や卒業生たちの声がいつも聞こえる「私学らしい」教育を追求してほしい。



「伝統の地場産業の挑戦」

有限会社大橋量器 代表取締役  
大橋 博行



枡とは何かといえ、思い浮かべるのは日本酒を飲むというイメージがあるかもしれないが、本来、量り、計量器である。量る単位は一合が 180 ミリリットル、一合が 10 倍になれば一升だ。主にお米やお酒の単位として現代でも使われている。18 ミリリットルは「勺」とか「せき」とか言うが、お米を二合五勺炊く、などのほかは、現在あまり使われていない。一斗缶の「一斗」は 18 リットルで、30 センチ四方くらいの枡になる。江戸時代には年貢米を量るためによく使われていた。さらにその上の単位として 180 リットルの「石」がある。加賀百万石の「石」である。この大きさの枡はないが、江戸時代まで大変重要な単位だった。大垣での枡づくりが始まったのは明治時代である。後ほど詳述するが、枡の長い歴史の中ではとても新しい部類に入る。これは大垣の枡職人が偶然始めた枡づくりがヒットしたということから始まるのだが、その背景として、枡の素材であるヒノキの産地が近いことや水運が発達しているということがある。大垣市のお堀は水門川と言って、水路も多く張り巡らされており、それらを使って大きなヒノキを運んだと言われている。江戸時代の枡の決まりとして枡にはヒノキの柾目を使うことになっていた。なぜヒノキの柾目かという、これは加工しやすく狂いが少ない。量りに適した材料である。そして、耐久性と耐水性がある。ヒノキは伐採してから 200 年後に最も強度が強くなるとも言われ、世界最古の木造建築である法隆寺の柱はヒノキでできている。さらに、現在は薬事法などの関係であまり言えないが、抗菌効果、それから香りによるリラックス効果などもある。ここ岐阜県の東部には東濃ヒノキというヒノキの産地があるし、お隣の長野県の木曽ヒノキなども有名だ。木曽ヒノキは天然でとれるもので最も高価なヒノキだが、正確には天然で生えているヒノキと尾張の殿様が江戸時代までに植えたものだけが木曽ヒノキと呼べるものである。大垣ではこれらの贅沢な木材をふんだんに使うことができた。建築物や障子やふすまなど和室の建具、鴨居や敷居、柱などの端材を使うことで高価な材料を安く手に入れることができていたが、最近はやや手に入らなくなっている。最近では和室を作る人が減ったりしているので、それらの端材も出てこない。ちなみに、ヒノキというのはほぼ日本産しかない。台湾ヒノキといわれるものはあるが、色も黒く、香りも違う。ただ、強度はあるらしいので、沖縄の首里城の修復に用いられると聞いている。しかし、一般にヒノキと言われるものは日本産のヒノキである。ヒノキに関連して、ここで日本の林業について述べたい。まず、日本の森林率は約 7 割である。アメリカや中国が 2 割から 3 割であることを考えると、日本は圧倒的に森林資源に恵まれている。我々、岐阜県の森林率は 81% であり、日本で第 2 位である。1 位は高知県になる。高知には四万十ヒノキがあり、林業が盛んだ。そして、林業問題で重要なものに人工林の問題がある。人工林は人間が植林したもので日本の 41% を占めている。これがなぜ問題かと言え、植える際にわざと間隔を詰めてまっすぐ育つようにしている。当然、肥立ちが悪くなるので、間伐する必要がある。必要はあるが、林業従事者が高齢化し、さらに林業は儲からないので、多くの森林が放置されているという現状がある。放置された森林

は、雨が降れば土砂災害の元になるなど、せっかくの資源が台無しになってしまう。しっかり手入れをすれば、明るい森になり、大きくなったヒノキはたくさん二酸化炭素を吸うし、動物も森で暮らせるので人に下りてくる必要がなくなる。大きなヒノキの根っこは太くなるので土砂災害の危険性も減り、良いことづくめである。したがって、林業活性化について、もっと社会全体で検討する必要があるのではないかと考えている。話は変わり、枡というものがいつからあるかという、現在発見されている最も古い枡は 1200 年ほど前のものと言われている。形としては方形の四角い枡である。一升枡だが、現在の単位で六合くらいの大きさもものが奈良の平城京跡付近で見つっている。701 年の大宝律令によって度量法が作られたので、量りの部分においてはその頃から枡が担っていたと考えられる。つまり、枡には 1300 年の歴史があると考えている。しかし、やはり古い時代には情報も発達していないので、地域や年代によって枡の大きさが異なることはあったと思う。それらを統一しようとしたのが織田信長であると言われている。楽市楽座で世の活性化を促すために、商取引において枡の統一をする必要があったわけだ。それを引き継いで、京都で制定された京枡として枡を統一したのが豊臣秀吉である。太閤検地を行って大名の力を正確に量るために使われたのだろう。この京枡は今日使われているものとはほぼ同じ寸法になっている。その後、江戸時代にはいかがわしい枡やおかしな枡が流通したため、枡座という役所で調べて、おかしな場合には取り壊されていた。よくあった事例としては、商売上で、品物を仕入れるときには少し背の高い枡を使い、お客さんに売るときには少し小さめの枡で売るなどのことが横行していたようだ。不正な枡も資料的には貴重なものなので、調べられて壊された枡が多いということは学問的に残念ではある。この 1300 年の間、枡はお米から粟や稗、醤油や酒などの液体まで量りとして使われてきた。それが昭和 41 年の法改正で、それまで県の計量検定官が基準値を用いて一つ一つ検定器を使って量っていたものが、廃止になった。すると、あるメーカーが枡に会社名を入れて販売し始めた。例えばお祝いの席で飲む酒をメーカー名が入った枡で飲む。それがテレビで放映されるなどして、だんだん枡が酒器として認知されるようになった。こうして量りとしての需要が減った代わりに酒器として用いられるようになり、なんとか今日まで生き延びてきた。大橋量器は枡を作る会社で 1950 年に創業し、私は 3 代目になる。私は東京の大学を出て、IT 企業に就職した。その頃はバブル景気でコンピュータ業界も明るく、大変な勢いがあり、仕事もとても楽しいものだった。しかし、結婚を機に父に家業への入社を勧められ、迷ったが、やはり 4 人兄弟の一番上ということで家業を継ぐ決心をした。実は、入社当初はあまりやる気が起きなかった。冬の暗い朝、枡につける焼き印を温めるための釜の火で暖をとる社員のおじいさんを見たときに、なんというローテクな世界に入ってしまったものかと思った。これまでのコンピュータを扱うハイテク世界との落差があまりに大きかった。前の会社での仕事が充実していただけに、なかなか自分の状況や仕事に集中できず、精神的にかなりつらい思いをした。しかし、その間にも業績は出るわけで、その頃は、私が中学生のころに聞いていた売り上げの半分ほどになっていた。これはいけないと思い、酒器としての需要に賭けて酒造メーカーに営業に行ったのだが、いったんは売り上げを伸ばしてもまた落ち込むことの繰り返しだった。これは何かというと、需要の変化である。お祝いや飲酒の多様化、さらに飲酒運転の罰則が厳しくなったこともあり、スーパーでの祝い酒などの振る舞いがなくなった。「乾杯もシャンパン」などと嗜好も変化してきていた。これが入社時の売上が半減していたことに次ぐ第二の危機となった。そこで、酒器としての需要だけではこの先危ないのではないかという思いから、生活雑貨というものの中に新し

い杣の姿があるのではないかといろいろ試した。その中の手痛い失敗として、顧客のニーズに答えようとするあまり、自社の能力を超えた受注を受け、結局良い製品ができなかったことがあった。これは、自社の強みを生かした事業展開など、新しいものを創り出すという意識が弱かったことが原因ではないかと思い、反省を生かし、その後の指針としている。最近の顧客のニーズとしてはオリジナルというか、通り一遍ではないものが求められているようだ。そこで、それらの中で自分たちができそうだと感じたものに関しては断らないことにした。例えば、八角形の杣を作ってほしいと言われたとき、これまでなら受けなかったと思うが、自分の中でできそうと思えたことで、何とか作り上げることができた。そうして少しずつできることを増やしてきたというのが今の流れだ。入社時、あまりのローテクであることに衝撃を受け、さらに自社の能力を超えて顧客のニーズに寄り添いすぎて失敗をしたことで、自社の価値というものを考え直すことになった。自分たちが何を作っているかといえば、やはり杣しかない。もう誰も杣で計量しない、日本酒離れも激しいし、日常に必要なから売れないという後ろ向きなところから 180 度転換した。1300 年の歴史があり、ローテクである杣を作っていることが最大の強みであると考えを改めた。今でも日本人にとって、杣はお祝いを連想させる縁起物という感覚がある。そこで、新しい試みとして、杣で幸せを量りとり、幸せを売る、といったコンセプトで、工場内に店をつくった。この店のおかげで世間と杣工場との扉が開かれたといたら大げさだが、ヒノキの香りのする、うるさい木工工場が、こんなものを作っていたということが地域の方にも知ってもらえたと思う。地域への情報発信と受信の場として貴重なものになった。さらに 2005 年には web ショップを立ち上げ、日本全国、そして世界への発信を始めた。すると、地域の人が大垣の名物として杣を認知してくれるようになり、私たちもさらに「大垣の杣」を PR したいと思うようになった。そこで「ます」生産者実行委員会を立ち上げ、業界全体で PR を始めた。これは大きな転機だったと思う。

さらに今後、杣をどのように展開させていくかについてだが、杣をエンターテイナーとして位置付けるというか、これまでの使われ方とは違い、杣を楽しんでもらうということを目指している。例えば「ます」祭りの開催や杣酒列車の運行、アートとしての杣のアピールなど、直接的に金銭につながる話ではないが、今後の業界にとって重要なことだと思い、実行している。大橋量器の商品としては縁起物としての杣、海外で売れるようなカラー杣、実用としての加湿器やバスグッズ、デザイナーと協働して作った商品などを創作しており、売り上げも好調だ。新しい試みとして、内装材として杣を使ったり、大垣駅前に masu café をオープンしたりもしている。コロナ禍となってからも、売り上げが減って困っている職人を守るためのクラウドファンディングや、杣屋が作る森の香りのするマスクなど、豊かな発想で新しい価値を創出している。さらには、モノからコトへ、といったツーリズム事業などにも力を入れている。これらには社内、地域、有償・無償を含めた外部の人たちが一体となって協働し、なかなかすべてはご紹介しきれないほど多くの事業が進んでいる。

私どもは今後も、長い歴史と伝統を持つ杣づくり、という自分たちの強みを最大限生かし、杣のあるシーンを通じて人々に幸せや彩りを与えられるように、日々事業を続けていきたい。

## 私学経営部会 パネル・ディスカッション

### 「未来を見据えた私学経営を考える」

(パネリスト) 高山西高等学校 理事長・統括校長

下 屋 浩 実

(パネリスト) 啓新高等学校 理事長・校長

荻 原 昭 人

(パネリスト) 学校法人大多和学園 理事長

大多和 聡 宏

(コーディネーター) 順天中学高等学校 校長

長 塚 篤 夫

(本報告は全私学新聞に掲載された内容を転載しています。)

#### ■私学を取り巻く状況一少子化における入学定員の課題

【長塚】 「未来を見据えた私学経営を考える」をテーマに私学を取り巻く環境の変化、建学の精神を継承した学校の発展などについてディスカッションをしていきたい。まず、各先生方の県の私学の状況について伺いたい。



【下屋】 岐阜県の中学校卒業予定者数は約 18,000 人、今の小学 1 年生では 16,000 人になる。私の学校のある飛騨地区では中学 3 年生は 1,230 人、これが今の小学校 1 年生になると、ほぼ 1,000 人になり、将来的に 800 人くらいと見込まれている。

岐阜県には中高を含めて全日制の私立学校が 14 校あり、岐阜市内や、愛知県に隣接した地域に集中している。岐阜県北部の飛騨地区は山間部にあり、南部に位置する美濃地区の学校と比べると、保護者の年収は高くない。保護者の収入と子供の学力は比例すると言われていたが、飛騨地区の模擬試験の成績は、岐阜市などと比べると少し低くなっている。

【荻原】 6 校ある私立高校のうち、福井市の中心部から半径 1 キロ圏内に大きな全日制の私学が 4 校ある。学校を市外に出したいのだが、通学の利便性を考えると難しい。定員が非常に多く、一番多い学校は 1 学年 560 人で、本校は 300 人である。

県内の中学生の 3 割が私立高校に通う。今 7,000 人の中学生がいるが、少子化で 10~15 年後には 5,000 人を切るのではないかという見通しだ。

令和 2 年度から授業料の実質無償化がスタートした。福井県では知事と交渉し、県独自で年収目安 910 万円未満の世帯まで無償となった。私立高校に通学する生徒は約 25%だったが、この流れを受け 30%を超えた。

【大多和】 島根県の人口は約 67 万人、全国 46 番目。高齢化率は全国 3 位。人口が少なく高齢化も進んでいる。

私学は中学 3 校、高校 10 校。私学の小学校と大学はない。高校生の約 20%が私学に通っている。全国平均は約 30%。私立中学の通学率は 2.3%、全国平均は 7.6%。私学に通う中学生高校生は少ない。

【長塚】 各県とも少子化が進み、私学の未来をどのように描くのかは難しい問題だが、各県の私学協会長をなされてきた立場から、入学定員の確保、公私間の生徒募集の課題について伺いたい。

【下屋】 今から 13 年前、私が岐阜県私立中学高等学校協会の会長になってすぐに県教育長と話し合い、中学校の卒業生の減少具合により高校の定員を勘案するが、当面の間、毎年 1 クラス分だけ公立校の定員を削り、私学に渡すという約束をいただいた。それは約 10 年続き、その間に公私比率は改善されたが、まだ十分ではない。

岐阜県は、昔から原則として元々の学則定員の比率に合わせ、一律に全ての私学で定員を減らしている。

1,000人が800人になったとすると、学則定員の大きさに合わせて、20%分を考慮することなく、全部削るやり方だ。会長になった頃に、学則定員比率でいくと、募集定員が100人を割る学校が出そうになった。それで学則定員比率で削るのは不可能で100人をデッドラインとし、それ以下にはしない。大規模校の定員を少し余分に削り、地区ごとで子供の数の増減がかなり違うので、地区ごとの中学卒業生数の増減などを総合的に考慮した上で協会案を作るという方式に改めた。

【荻原】 福井県の公立進学校受験状況は私学を併願し、落ちたら私学に行くパターンが多い。私学の併願は、特進コースと進学コースの2つであったが、無償化に伴い、私学は公立の下請けというイメージを払拭するため、福井県私学全体で、まずは進学コースの併願を廃止した。将来は特進コースの併願も廃止の方向で議論を進めている。



【長塚】 次に各県の私学協会としての取り組みや、地域での私学間の連携などについて、伺いたい。

【下屋】 岐阜県の私学助成は、十数年前は全国レベルで20番目くらいだったが、私学協会の交渉によって徐々に上がり、今は全国16位である。

岐阜県私立中学高等学校協会として、公立中学校校長会の校長と年に何回か話し合いの場を持っている。公立入試制度が突然変わることがあるので、私学に入学する生徒が不利にならないように話し合っている。さらに、岐阜県はすぐ隣に愛知県という大都市圏があり、東濃地区や岐阜地区の私立学校は愛知県の学校と競合する。入試制度が変わる場合には愛知県の公立の校長会とも話し合いを行う。

【荻原】 福井県では私立の定員は1,960名から動かしていない。私学では限界なのであとは公立で減らしてくださいとお願いして、ここ5、6年続けている。

先ほど下屋先生も話されたが、毎年2、3回は中学校校長会と我々の代表で話し合いの場を持ち、現場の問題点を挙げてもらい、改善できることはしている。

【大多和】 島根県では、少子化の中、このままの公私比率でいくとゼロに近づいていく。私学の定員確保の運動が不可欠だ。

私学協会では私学の存在価値を行政にアピールすることが必要だ。一例として、令和3年度国の補正予算で、新規事業としてGIGAスクール構想の関連整備事業があった。文科省の説明では、私学も対象という話だった。県の私学部局に確認すると、県教委が県立学校を対象に行うとの回答だったので、国の説明と違うと訴え、県の教育委員会と直接交渉を行い結果的には、令和4年度予算の政策経費の中で、事業を実施すれば1校あたり100万円、別途84万円が確保できた。

## ■建学の精神とその継承

【長塚】 次に各校の建学の精神と、その継承について伺いたい。

【下屋】 以前は全ての公立高校に不合格だった生徒だけがうちの高校に来る状況だったが、今では飛騨地区の中学校の成績上位の半分以上の生徒が来てくれることになっている。



生徒の中には東京大学、京都大学レベルの大学を目指す生徒もいるし、勉強が苦手な生徒もいるので、全ての学力層に合わせて、教員が教科書や教材に工夫をしている。教員は平均すると週に約20コマ、多い教員は25、26コマの授業を担当している。その合間に生徒が毎日提出する、日記や課題を書いた大学ノートの全部内容を確認した上で、指導を書き入れている。生徒と接する時間が全国でも有数に長い学校であり、それがわが校のポリシーでもある。ただ教員にかかる負担は大きく、それくらい地方の小さな高校は大変である。

【荻原】 本校には建学の精神と校訓がある。学校を立ち上げた私の祖父は「真・善・美」「行学一路」という建学の精神を掲げた。その建学の精神をワンフレーズで伝えるために掲げたスローガンが、「可能性への挑戦」である。「真・善・美」の意味は、自分の中には無限の可能性（真）があることを信じ、それを探す挑戦をしよう。その探した力で、自分だけではなく、周りを幸せ（善）にしよう。そのような最高の生き方（美）を目指そう。「行学一路」の意味は、真の学びは実践の中にあり、何事も知識は実践によって実力に変わる。行動し実力ある人間を目指そう。校訓は「誠実・協和・礼儀・健康」。その位置づけを一言で言えば、「挑戦する人間の心構え」である。そのように入学説明会で話をしている。

【大多和】 本校の建学の精神は「品性の向上を図り、社会の発展に役立つ有望な人材を育成する」。これを二本柱、「道徳教育（モラロジー教育）」と「先見教育・先行教育」で説明し、実践している。

本校は、大正 13 年にまだ和裁主流の時代に洋裁学校として創立した。戦後、昭和 27 年に島根県の私学では最も早く普通科を設置、昭和 41 年には食物科を設置し、県下初の調理師養成施設の認可を得た。平成 6 年には県内私学初の男女共学の中学を開校した。このように、創立時から道徳教育を中心に先進的な教育に取り組んでいる。

## ■学校改革

【長塚】 今、進められている教育改革、働き方改革について紹介いただきたい。

【大多和】 平成 30 年度、職員会議で Society5.0 に向けた学校改革案を発表した。内容は働き方、カリキュラム、部活動など幅広く、職員への浸透は不十分であったので、軌道修正を行い、できることから実施している。

本校は平成 25 年度から 6 年間、文科省のスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定を受けた。その際、全校で探究型授業をするように指導があり取り組んだ。高校の新学習指導要領では探究型学習がいろいろな部分で入ったが、本校では 10 年前から試行錯誤しながら推進している。

働き方改革に向けて、令和 4 年度から変形労働時間制を導入した。人心一新のために人事改革にも着手し、校長も事務局長も外部から招いた。

【荻原】 本校では平成 24 年に組織改革をし、3 学科 4 コースという形になった。改革するとき外部から、普通科には特進、進学、アスリートなどがあり、生徒のゴールはそれぞれのコースで違っているのに、なぜ教員は横の組織のままなのかと指摘された。目から鱗だった。それで組織を横から転換して、縦の組織に変えた。

校長、教頭の下に特進コース長、進学コース長などを置き、中間管理職的な役割で、その学科やコースを運営している。就業規則が非常に古かったので徹底的に見直して、今の時代の趨勢に合う形にすることで、部活動もスムーズにできている。

【下屋】 本校は近隣に競合校がないので、長年働いていると教員の中に慣れが出てくる。それで若さのパワーで変えていこうという結論に達し、現在の校長を、当時 41 歳で教頭にした。進路指導部長、その他の部長クラスは 35 歳前後、学年主任は 20 代後半という形の組織に塗り替えた。若いので体力もあり、教員によっては遅くまで補習をしていた。

若い組織であっても月日が立つと、動脈硬化を起こす。次の方策を考えなければならない。そこで ISO14001 国際環境基準の認証認可を目指し、学内に新しい組織を作った。環境教育で日本のトップを走る早稲田大学理工学部と芝浦工業大学の協力を得ることができた。ISO の申請書類の作成のイロハから両大学の先生に徹底して教えていただき、基準をクリアした。

次に取り組んだのが、先進的な英語教育を行う SELHi（スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール）の指定だ。3年間の SELHi を終えて、高校生英語ディベートの全国大会を岐阜で行うという目標を立て取り組んだ。今年は第 17 回全国大会を開くまでになった。

【大多和】 私は魅力ある教育を考える時、プロダクトアウト（自校の強みや学校方針を基準として教育内容を開発する）とマーケットイン（顧客ニーズを把握し、顧客が求めるものを優先して教育内容を開発する）の両面を見ている。私はプロダクトアウトに軸足を置いている。理由は、私学は建学の精神を大切にしなければいけないからだ。現在の校長はマーケットインの発想が強いので、役割分担しながら進めている。



【長塚】 最後に下屋先生から部活動の改革の話伺いたい。

【下屋】 働き方改革の一環で、公立の中学校から部活動が地域スポーツクラブに委ねられることになった。地域のスポーツクラブでは生徒が望む部活は難しいので、この改革を利用して、中学校高等学校がある学校ならば、中高 6 年間、徹底して学校で部活ができるというアピールができる。ただ、部活指導をする先生方の勤務時間については留意する必要がある。部活指導の先生は朝の出校でなく、毎日午後 1 時から出校とし、部活が終わる時間までの勤務時間と見なすという方法もあるかと思う。

私の学校のある飛騨地区には、他から人が流入してこないのので、学校のダウンサイジングが経営者としては必要だと感じている。200 人前後の生徒が 160 人になった場合、出生数が減少し、120 人の定員になった場合では学校のあり方は変わってくる。変わる直前に慌てて対策を考えるのではなく、今の 200 人体制の時点で将来 160 人、120 人になった時に、この部活とこの部活を残そう、この部分に力を入れた教育を行おうと考えておくことが大切で、最低でも 10~15 年先の将来を見通しておきたい。

【長塚】 今回は、特に少子化の中で未来を見据えた私学経営をどう進めるかを先生方から伺った。部活動などを含めた、ダウンサイジングといった課題も今後さらに議論が必要だと感じた。



## 私学経営部会

### 「総括」

岐阜女子高等学校 校長  
松本文夫

まず、講演とパネル・ディスカッションでご教授頂きました先生方に改めてお礼を申し上げます。

また、ご多用の中、全国各地よりこの大会にご参加頂きました全ての先生方、そして、的確なご指導ご助言を頂きました専門委員の先生方に厚くお礼申し上げます。お陰様で私学経営部会が大変意義深いものになったことを心から感謝申し上げます。



僭越ながら、総括をさせて頂きたいと思います。まず、東京電機大学副学長の広石英記先生より「見学の精神の再創造と教育イノベーション～私学にしかできない教育構想のデザイン～」と題してご講演を頂きました。建学の精神という普遍的でもっとも根幹で重要なものをもとに、それを現在に具現化していくプロセスやサイクルについて、具体的な事例のもとご教授を頂きました。未来を見据え、10年後、20年後を生きていく生徒たちにとって、本当の意味で必要な教育を私立学校がどのように創造し、実践をしていくのか、そのヒントを得ることができました。早速、私自身も学校に戻り、建学の精神のもと「本校にしかできない」「本校だからこそできる」教育を全教職員で再創造していきたいと思っています。そして、改めて日本や世界を支えていく教育を行えるのは私学であるということを再認識しました。

講演Ⅱでは有限会社大橋量器代表取締役の大橋博行様より「伝統の地場産業の挑戦」として企業経営者の視点でご講演を頂きました。企業という利益を追求していく業界でありながら、消費者のニーズや要望に応えつつ、枅というものにこだわりながら、枅を広め、枅を通して幸せな生活に彩りを与えることをモットーに、檜を使い伝統の手法でより商品をとという基本的な部分をしっかりと堅持しつつ、常に枅の新しい可能性や価値の創造に取り組んでおられました。建学の精神のもと、生徒たちが身につけていく力や知識を現在に具現化し、その力の修得を目指し、常に挑戦を継続していくことの重要性を改めて認識することができました。

パネル・ディスカッションでは、長塚篤夫先生の見事なコーディネートにより、パネリストの先生方による非常に内容の濃い議論や各校の特色ある取り組みをお聞きすることができました。またパネリストの下屋浩実先生、荻原昭人先生、大多和聡宏先生の学校の特色ある取り組みをご紹介頂き、「これからの未来を見据えた私学経営」を考えていく上で、非常に参考となる内容であったことと同時に、各県の取り組みや各先生方の先進的な取り組みや考え方を知ることができた機会となりました。「これぞ私学」という独自性を示して頂き、私学の持つ大きな可能性に触れることができたのではないかと思います。いろいろな課題が山積している中で、まだまだ検討していかなければならないこと、やらなければならないことが多くありますが、このパネル・ディスカッションで得た情報、学んだことは今後の各校の学校経営の一助になると確信しています。

今回の部会では本大会の全体テーマと部会の研究目標に沿うものになったと考えています。今回の部会で得た情報を是非各学校に持ち帰り、ご活用頂くとともに、本大会で得ることのできた各私学同士の繋がりを活かして頂いて、さらなる飛躍に繋げて頂ければと存じます。結びと致しまして、ご参加頂きました皆様方の栄えある学校のさらなる発展とご活躍を祈念致しまして総括に代えさせていただきます。



# 教育課程部会

社会のあり方が大きく変わる「Society5.0時代」において、予期しなかったコロナ禍に見舞われ、教育界は混沌の渦中に放り出された。

その中で、中学校は令和3年度から、高等学校は令和4年度から新学習指導要領が実施され、新しい時代の教育として「主体的・対話的で深い学び」が求められている。「総合的な探究の時間」や「探究」を付した科目が新設され、生徒自身が主体的に学んでいくことが必要とされることになる。

当部会では、講演や実践発表を通して「主体的・対話的で深い学び」をICTの活用も含めながら学び、各私立学校独自の教育課程編成を考えていきたい。

- 1 研究目標 新しい時代の私学の教育課程
- 2 会 場 ホテルグランヴェール岐山 3階 鳳凰
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、教務主任、教育課程編成等担当教員
- 4 参加人員 115名
- 5 日 程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16
	15	45				30	30	
10月21日 (金)	開 会 式	講演 I	実践発表 I	昼食	講演 II	実践発表 II	閉 会 式	

## 6 内容・日程細目

8:30	受 付 (赤崎 耕二／船戸 宙治)	機材担当：平松 伸仁 記録(写真)担当：岸 竹史 集録担当：平松 伸仁
9:00	開 会 式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員・専門委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：山本 俊樹／記録：平松 伸仁 教育課程部会運営委員長 鹿 野 孝 紀
9:15	講 演 I	司会：山本 俊樹／記録：平松 伸仁 講師紹介：船戸 宙治
10:45	演 題 「子どもの『探究爆発サイクル』を促進し、 自己肯定感を高めるカリキュラム実践」 講 師 炭 谷 俊 樹	ラーネット・グローバルスクール 代表 神戸情報大学院大学 学長

11:00	実践発表 I テーマ 「総合的な探究の時間を中心とした体験活動が非認知能力に及ぼす影響に関して～主体的・対話的で深い学びを前提とした体験活動の可視化・言語化における実践研究～」 発表者 森 永 武 人 神戸学院大学附属中学高等学校 教諭	司会：山本 俊樹／記録：平松 伸仁
12:00	昼 食	
13:00	講演 II 演 題 「探究学習からアカデミック・スキルへ～ICT 活用教育の高大接続」 講 師 遠 山 和 大 富山大学総合情報基盤センター 講師 ICT 教育推進研究開発部門	司会：山本 俊樹／記録：平松 伸仁 講師紹介：船戸 宙治
14:30	実践発表 II テーマ 「生徒の自己ベスト更新を促す教育課程」 発表者 松 本 兼太朗 麗澤瑞浪中学高等学校 教頭	司会：山本 俊樹／記録：平松 伸仁
15:30	閉 会 式 1. 開式の辞 2. 総 括 3. 専門委員長挨拶 4. 閉会の辞	司会：山本 俊樹／記録：平松 伸仁 教育課程部会運営委員長 鹿 野 孝 紀 教育課程専門委員長 森 涼
16:00	解 散	

7 講師・発表者（順不同）

炭 谷 俊 樹	ラーンネット・グローバルスクール 神戸情報大学院大学	代表 学長
遠 山 和 大	富山大学総合情報基盤センター ICT教育推進研究開発部門	講師
森 永 武 人	神戸学院大学附属中学高等学校	教諭
松 本 兼太朗	麗澤瑞浪中学高等学校	教頭

8 運営委員・指導員（順不同）

委員長 鹿 野 孝 紀	済 美 高 等 学 校	校長
副委員長 赤 崎 耕 二	美 濃 加 茂 中 学 高 等 学 校	校長
委 員 山 本 俊 樹	済 美 高 等 学 校	副校長
船 戸 宙 治	美 濃 加 茂 中 学 高 等 学 校	副校長
平 松 伸 仁	済 美 高 等 学 校	教頭
岸 竹 史	美 濃 加 茂 中 学 高 等 学 校	教諭

9 専門委員・指導員（順不同）

委員長 森 涼	学校法人石川高等学校・石川義塾中学校	理事長・校長
委 員 松 谷 茂	文化学園大学杉並中学高等学校	校長
鈴 木 弘	香 蘭 女 学 校 中 高 等 科	校長
北 村 聡	京 都 外 大 西 高 等 学 校	前校長
須 藤 勉	東 京 私 学 教 育 研 究 所	参与

教育課程部会 講演Ⅰ

## 「子どもの『探究爆発サイクル』を促進し、 自己肯定感を高めるカリキュラム実践」

ラーネット・グローバルスクール 代表／神戸情報大学院大学 学長  
**炭谷俊樹**



小学生の頃の私はいわゆる科学少年で、学研の月刊誌「科学」が届くのを毎月楽しみにしていた。アインシュタインの相対性理論に強く引かれ、彼のような物理学者になりたいという夢を抱いていた。大学院まで進み、論文も書いたが、この頃になるとアインシュタインには到底及ばないという事実を思い知らされた。アメリカの大学に留学の願書を提出するも見事落選。憧れだった物理学者の夢を断念したという経緯がある。幸い当時は好景気で、その恩恵にあやかり、同級生達は次々と名の知れた企業に就職を決めていた。私も視野を広げてみようかなという気持ちで色々と会社を訪問し、最終的に「マッキンゼー」という

コンサルティング会社に落ち着いた。無名ではあったが、グローバルに展開しているという点と何よりも面白い方がたくさんいらしたという点が決め手となった。

その一人が当時、支社長だった大前研一氏だ。私が入社した86年頃からベストセラーを連発した。その影響力は凄まじいものがあり、当初100名だった入社希望者が、10年後には1000人に膨らみ、現在では万単位で殺到する。私にとって恩師のような存在で、彼の下で10年間仕事をし、デンマークにも2年間いかせていただいた。そこでの経験が後に大きな影響を与えることになる。幼少期を振り返ると、無口で、友達もほとんどいないような消極的な子供もであった。「もっと遊びなさい」、「もっと話しなさい」といわれればいわれるほど内にこもり、苦痛を感じた。

デンマークに行ってみると驚いたことは子供に一切無理強いをしないこと。消極的なら、「あなたは観察から入るタイプですね」とそのスタイルを尊重する。走り回り、けんかばかりしている子に対しては行動から入るタイプとして認める。一人一人の学びのスタイルを尊重し、変えようとしなない。競争をさせなければ、偏差値もテストもないので、日本の教育にどっぷりと浸かっていた私は面を食らった。しかし慣れてくるとそれが心地良く、学校や教育に限らず、社会全体が一人一人を人間として尊重している空気に強い感銘を受けた。肌の色等による差別も当然ない。この時に感じたことが、後々の私の活動に生きてきた。

私は26年間「探究」の教育に携わっている。簡単に言うと、一人一人の子どもの好奇心や探究心、創造性を尊重する教育だ。2005年から大前研一氏がビジネスマンの教育を目的としたビジネススクールを始め、私は教授という立場で事業を手伝った。私学の経営者を対象とした講演会を催した際に、講演する機会があった。そこで「探究」の話をしたところ、講演会終了後にある経営者が私のもとへやってきて、「探究」を是非大学院でやって欲しいといった。それを受けて、2010年から神戸情報大学院大学で学長を務めながら探究型のカリキュラムを開始した。そこで行われている探究の課題、社会課題を見つけて解決する、技術を使って解決する等は留学生にも受け、これまでに80カ国以上の留学生を教えている。

学校教育は今、伝統的な知識中心の教育から、主体的で対話的な探究型の学びに重きを置く向きに変わっているように思われる。それに伴い、学校のカリキュラムも必然的に変えていかなければならないだろう。私が代表を務めるラーネット・グローバルスクール（以下ラーネット）は、子供向けの探究型スクールの運営と探究型カリキュラムを導入する手伝いをしている。先生方をはじめ多くの方々が見学に訪れる。主体は小学生で、学

年ごとにクラス分けをしており、1 クラス の人数は 16 名と比較的少人数だ。見学した方から一様に言われるのは、「どうしてこんなに動くのですか」ということだ。先生からの指示がほとんどない状態で、子供たちが勝手に学び、学習している。

開校にあたり、私が最も重視した点は、デンマークに倣って「一人一人の個性やスタイルを尊重する」ということだった。これはラーネットの理念にも掲げている。子供たちの興味の対象は様々で、物理学者になりたい子、お菓子屋さんになりたい子、恐竜が大好きな子、とまさに千差万別である。そういった一人一人の中にある、好きなもの、得意なもの、やりたいことを尊重し、互いを認め合うことを基本理念にしている。競争させ、偏差値で数値化して優劣を付けるようなことはしない。戦うという意味の「競争」ではなく、お互いに協力して何かを作り合う「共創」を目指す。それには子供たちが学校で何をしたいのかイメージをつかんでおく必要がある。

まず、子供は興味のあることを学びたいと思っている。子供の興味をいかに生かすかが重要なポイントだ。例えば、かつての私のように、相対性理論やトポロジーを学びたいと思う子供がいても、文部科学省の学習指導要領に従った授業の中でカバーするのは困難だろう。また子供は自分のことを見て欲しい、聞いて欲しい、友達や先生と仲良くなりたい、という欲望を自然に持っている。もしトポロジーを学びたいという子供に、漢字を 100 回書いてきなさいという宿題ばかりを出していたらどうなるだろうか。その子供本来の学びたい欲望を満たすことはできない。更に往々にしてテストがあり、点数を付けられ、友達と比較して悪かったりすると、劣等感や苦手意識が蓄積されていく。子供が自分の興味を活かせる部分をできるだけ用意する、このことを優先するために、無許可の学校、ラーネットをスタートした。

もちろんカリキュラムや時間割は作るが、デンマークに倣ってテストの類はない。結果的として、テストをしない方が子供たちの学習意欲を高められると解釈している。例えば算数のできない子供。そのことを責めるのではなく、なぜできないのか、どうすればできるようになるのか考えようと声をかけ、必要なら手伝いをする。できなかったことができるようになると、「やった！」という気持ちになるし、できないと思っていたことができるようになると、自信を持てるようになり、劣等感や苦手意識が植え付けられることもない。

また、自分のことを見て欲しい、聞いて欲しいという欲望を満たすために発言の時間をたくさん取り、意見を言う機会を作るようにしている。そこでは決して否定しないことだ。子供がどんなことを言っても、よく話を聞いて返答する。何か問題が起こった場合は子供同士で解決させるようにする。何が起こったのか、どうして起こったのかを一番よく分かっているのは子供たちだ。必要なときにだけ少々手助けをする。基礎学力はもちろん大切だが、重要なのは自ら学ぶ習慣だ。自分の主体的な意思で基礎学力を身に付けるといことを 6 年間じっくりかけて取り組む。基本はインプットとアウトプット。言葉の学習なら、読む・聞くというインプットと、話す・書くというアウトプットを繰り返す。特に言葉（日本語）は探究を含めた全ての学びのベースになるので、読む・聞く・話す・書く時間を毎日十分に取りようにしている。

また算数は好き嫌いが分かれやすい教科だが、なるべく嫌いにならないように、お菓子作り、実験、買い物、といったその子の興味の対象を持ち出すようにしている。

どんな場面でも必ず数字が出てくる。それを算数と結びつけることで、算数は役に立つし、面白いと思ってもらえるように工夫をする。掛け算、割り算、分数等は途中で分からなくなるとついていかれなくなる。分からない子は前まで戻って、理解できるようにしてから先に進めるようにしている。ペースはそれぞれだが、最終的に皆ができるようになることと、各自の主体的な意思で行うことを重視している。

探究力を養うために取り組んでいるのがテーマ学習とプロジェクト学習だ。テーマ学習では 6 年間で学んで欲しいテーマを 30 個程用意し、子供たちは 1 年で大体 5 つのテーマに取り組む。テーマは水やゴミ、天気と多岐に渡り、水であれば、科学的な性質を実験で調べてみたり、社会においてどのように扱われているのかを探究し

たりする。理科的にも社会的にも、また科目を横断しても扱えるのが特徴だ。

対してプロジェクト学習は、一人一人が自分のやりたいことを選び、探究していく。恐竜が好きとか、ブラックホールのことを調べたいという自分の興味に従って取り組む。学習の後半に、調べたり、体験したり、実験したりしたことを皆や保護者の方に発表するというアウトプットの機会を設けるようにしている。事例だが、ある子が電磁石で何かを作り、工夫した点について説明をしていた。それに対し、「面白いね」とか、「ここはどうするの」といった質問やコメントが飛び交った。発表者は一つ一つそれに応じていく。実はこのやりとりこそが重要で、対話を持つことによって、探究は更に深まる。

プロジェクト学習には主体的、対話的、深い学びといった要素が詰まっているといえる。探究学習に対し、親からよく「楽しそうなのは良いが、基礎学力は身に付いているのか」、「漢字は書けるのか」「算数はできているのか」というような質問を受ける。私は探究に26年間関わってきたが、結論から言うと、探究力の高い子は基礎学力も身につく。またラーネットでは、基礎学習と探究が連動するよう工夫し、算数や国語の基礎学習が、自分の探究に役立つことを実感してもらうよう努めている。これを行うには教員の役目と連携が不可欠だ。ラーネットでは教員のことを「ナビゲーター」と呼ぶ。先生は解答を示すのではなく、子供が主体的に学ぶのを促進する役割を求められるからだ。教育以外の経験者も積極的に採用し、得意分野を探究型の学習に活かしていただくようにしている。更に、子供一人一人の特徴をしっかりと見ることができ、人間的にも尊敬できる人、探究心や好奇心に溢れていることも重要なポイントとなる。

子供たちはナビゲーターの姿に影響される。ナビゲーターがやりたいことや好きなことを表に出し、積極的に意見を言うようにすると、子供たちも動き出し、意見を出すようになる。学校に探究型の学習を導入する際の重要なポイントは探究サイクルとナビゲーター、探究型の学びの授業作り、学習評価、教員同士の協働の4つに分けられる。これらを、順を追ってみたい。

まずは、探究サイクルとナビゲーター。探究サイクルとは自由選択・集中・達成感でこのサイクルがうまく回っていることが重要だ。まず自由選択という部分だが、子供が自分の意思で選べるかどうか。全くの自由とまでいなくても、何か選べる要素があることが大切だ。「好きなものを自由に選択」できれば、「集中」して取り組むことができる。根気良く続けた結果「達成感」を得られるだろう。この「自由選択」「集中」「達成感」のサイクルを「探究サイクル」という。学校のカリキュラムを見てみるとやりたいことを自分で選択するというよりも選んでもらっているという感じがする。また、カリキュラムが忙しく、集中できる時間が十分に取れていないような印象を受ける。更に、子供が自分の意思で何かをやり遂げた時、頑張ったことを認めてあげるようなポジティブなフィードバックをしてあげているだろうか。日本の教育ではここはできていない。ここはもっと努力した方がいいというようなネガティブなフィードバックに傾きがちなのがする。そうすると、自分の頑張った部分を見てくれないという気持ちになり、達成感が得られないままに終わってしまう。

何度も言うが、大事なことは自由選択・集中・達成感というサイクルをポジティブに回すことだ。巡回するよう接し方を工夫するうちに、グルグルと回り出す瞬間がある。いったん子供たちに火が付くと、勉強しなさいといわなくても勝手に動き始める。そうなればしめたものだ。自分の好きなものを選んで集中し出すと、小さな子どもでも、10分、20分、30分と集中が持続する。子供の探究サイクルを促進するような接し方をする人を「ナビゲーター」、その行為を「ナビゲーション」と呼んでいる。ナビゲーションに欠かせないことは一人一人の子供の特徴、好きなことや得意なこと、人との関わり方を知ることである。全然しゃべらない子供もいれば、臆することなく発言し、関係のない冗談までいう子供もいる。全てその子供の個性として受け止め、良い悪いで評価してはいけない。また、生徒が授業に乗っているかどうか、今日はこの子供は元気がない等、生徒の気持ちを把握することも重要だ。一人一人のことを分かっていると、乗ってくるようなカリキュラムを与えられないし、ど

ういう見せ方をすれば乗ってくるのかが分からない。後は、どういう態度で授業に取り組んでいるのか、よく「態度」を見るようにする。

端的にいうと、授業に消極的か積極的かということだ。消極的な態度とは一応先生の言っていることを聞いており、無視はしない状態をいう。先生からこれをしなさいといわれる前に勝手にやり出すのが積極的な態度である。いわれなくても、自発的に書いたり、実験したりする。100%積極的にするのは難しいかもしれないが、なるべく子供が主体となって、積極的に動いている時間を増やすのが理想的だ。

では、積極的にするにはどのような工夫が必要だろうか。例えば、先生や学校側が子供にこういうことを学んで欲しい、こうなってもらいたいと望んでいても、子供もが望んでいなければ、そのようにはならない。逆に子供が、そうになりたい、真似したいという気持ちになれば、動き始める。字の汚い子供が多いクラスがあった。ナビゲーターはきれいな字で書いて欲しいという思いを伝えたかったのだが、なかなかうまく伝わらない。悪いことに、ナビゲーター自身の字もあまりきれいでないので、全く説得力がない。そこで、きれいな字を書く練習を始めた。ちょうど彼にはガールフレンドがいて、ラブレターを書くのに字が汚いと格好が悪いと思っていたのも後押ししたのだろう。子供たちにはこのように伝えた。「みんなも好きな人に何か書くとき、汚い字で読めなかったら嫌だよ。やっぱりきれいだっ方がうれしいよね」と。次の瞬間から、子供たちはきれいな字で書くようになった。子供は自分もそうになりたい、何か真似したいというふうに思えば、必ずやり始める。「こうなって欲しい」という思いが伝わり、子供たちも「そうになりたい」と思うことを「ゴールイメージの共有」と呼んでいる。

子供たちの積極性を引き出すために、ゴールイメージの共有は欠かせない。22年前に出版した『第3の教育』という本で触れたのだが、ナビゲーションの仕方には3つの考え方がある。「第1の教育」は伝統的な管理教育である。上からの指示に従うという考え方であり、上が責任を持って指導する。続いて「第2の教育」。これは権威に従わなくて良いという考え方である。もしくは過干渉し、本人ができる機会を奪ってしまっている状況であり、誰も責任を取れない状態になってしまっている。最後の「第3の教育」は自分のために自分で努力し、大人はそれを手伝うという考え方だ。基本的に子供自身が努力をするというもので、デンマークや北欧での考え方はこれに当たる。今、学校で求められる教育は「第3の教育」の要素が増えてきているように感じる。探究型は「第3の教育」を意識するのが良いだろう。しかし、「第1の教育」を全面的に否定するつもりはない。例えば、子供たちが木に登っていて危ないと感じたとき、それぞれの立場からどうするのか。「第1の教育」では怪我をしたら責任者の責任になるから止めさせる。「第2の教育」は「もうどうでもいいや」と考える。「第3の教育」は安全に木に登れるようになって欲しいというイメージを持って、見本を示したり、アドバイスを与えたり、落ちそうな子を受け止めたりする。「第3の教育」は「第1の教育」に比べてずっと手間がかかる。一人一人が違うので、どんな時でも「第3の教育」をしようとするとう困難が生じる。「第3の教育」の要素をなるべくカリキュラムや授業に盛り込むようにし、場合によっては「第1の教育」、「第2の教育」をうまく組み合わせることがポイントになってくる。探究的な学びの授業作りについて、テーマ学習を例に取ってみたい。

ラーンネットのテーマ学習は10回10週間で行う。学習目標（ゴールイメージ）を設定し、一連の流れの中でどういった知識や態度を身に付けて欲しいのかを明確にする。前半は知識のインプット、後半は子供たちが探究したことをアウトプットすることがメインになる。生徒が興味を持ち、探究サイクルに入るきっかけを作れるかどうか勝負所だ。特に最初の授業の入り方は肝心で、どういうところから入れば乗ってきってくれるのか、火が付くのかを考える。それから全体の流れの中で、生徒一人一人が選べる部分を作り、最後にアウトプットしたくなるような機会を設定する。

ラーンネットで政治を扱ったテーマ学習をどのように行っているのか、体験を交えて話したい。興味を持ってもらうために工夫していることは、実際に議員さんにきていただいて話をしてもらうことだ。地元選出の衆議院



議員の井坂信彦氏はとても話が上手だ。政治とは何か、どうして大事なのかに加え、子供たちが興味を持ちそうなテーマを交えながら話を進めていく。人間的な魅力にもあふれ、子供たちはグングンと引き付けられる。これは一例だが、子供の興味に火を付けるために、教科書や先生の話だけではなく、その分野で活躍している人との接点を持つことを重視している。また知識のインプットの部分では議員制度や民主主義、憲法についてまとめ、更に自分の興味のあることをもっと調べてみよう、探究的な要素を取り入れるようにしている。

そして後半だが、一人またはグループでアウトプットの準備をする。この時も選択できる余地を残すようにする。例えばアウトプットしたいトピックは独裁政治だったり原発だったり子供によって違う。発表の仕方においても、パワーポイントを使いたい、模造紙がいい、ものを使って見せたい等、要望は様々だ。絶対こうしなさいと決めてしまうのではなく、選べる要素を作るようにする。発表の形式は一方向的にせず、対話が成り立つようにする。最後に皆でテーマを決めて討論するが、保護者にも入っていただき一緒に討論する。

以上が探究的な授業を作る一例である。政治という、子供にとって分かりにくいテーマだが、興味を持つためのきっかけ作りや選択の要素、アウトプットしやすい機会を設け、子供が探究したいと思えるような工夫をするようにしている。

探究型の授業作りをした後の学習評価の仕方は重要だ。従来の知識型のイメージで競争させ、こちらの探究の方が優れていると点数を付けたりすることによって「ああ、自分の点数が悪かった」と、せっかく回り始めた探究サイクルが止まってしまう可能性がある。そうならないためにも基本的には自己肯定感ややる気が伸びる評価にする。あくまでも本人がやる気を持って成長してくれることが目的だ。フィードバックや評価では一人一人が出したアウトプットを「きちんと見てあげる」ことが重要である。子供は他の子供がやることをよく見ている。

「何々さんのここがすごい」というような、できるだけポジティブなフィードバックをし合う時間を取ることで、探究は自分が頑張ったことが認められる時間なのだと感じてもらえる。自分が工夫したことを人に伝えて、喜んでもらったり、褒めてもらえる機会があるとやる気が出る。また、人に伝えたり、聞いてもらえたりすることによって、自分が何をすれば良いのか気付くことがある。何ができて、何ができないのか、次に何を工夫すれば良いのか。次のステップが見えると、やる気が起きる。

成績表には点数や ABC は一切書かない。基本的には文章だけで「何々くんはこの科目でこんなことに取り組み、こんな工夫をしました」というようなことを書いている。「一部、この辺がまだ少しできていませんね」というような課題を書いたりもする。イメージとしては7対3、もしくは8対2くらいの割合でポジティブなフィードバックを心掛けている。

探究的な学習も基礎的な学習も振り返りの時間を取っている。できたこと、できなかったこと、次のステップを本人に考えてもらうようにしている。今までにいくつも学校を見せていただいたが、探究の浸透度合いはさまざまだ。学校全体で積極的に取り組んでいる学校、一人の先生が孤軍奮闘している学校、複数の先生が熱心に取り組む、それを校長先生がサポートしている学校、いずれにせよ、教員同士の協業は重要だ。どういったところで協業が成り立つのか、大きく4つに分けることができるが、一番重要なのは「生徒の観察」である。一生懸命授業をしていると、生徒の反応をつぶさに観察するのは難しいものだ。そこで、もう一人の先生が授業を見ながら、学習者を観察するという方法がある。授業が終わったら、「何々君は乗っていたね」、「あの部分はこうした方が良かった」等、話し合っただけでフィードバックをし、情報共有をすることが大切である。

また、「カリキュラムづくりと改善」も当然重要だ。カリキュラムを作る際、科目の中に探究を導入するのか、総合学習でコラボレーションする形にするのか、学年の中で行うのか、学年を超えて行うのか、色々なレベルで考えることがある。いずれにせよ協力しながらカリキュラムを作っていく「協業」が求められる。そして、「外部との協業」である。外部とは保護者の方や地域の方だ。そういった方々と協業することも大事なことである。探

究的なカリキュラムを作っていく時に外部の方を呼んだり、保護者の方に手伝っていただくことも可能だろう。

ラーンネットの組織について少し説明する。大きく、「教室の中」「学校」「コミュニティ」という3つのレベルがあり、それらのうち、「教室の中」レベルは教員と子供で構成される。教員は子供が主体的に学ぶのを手伝うナビゲーターという関係性が望ましく、学びの場や流れをデザインする役割を担う。「学校」レベルでは最終責任者としての代表者が存在しつつも、みんながナビゲーターであり、フラットな組織である。日々、子供たちの様子を共有し、協力して活動している。そして「コミュニティ」レベル、保護者である。こちらも基本的にはこちらから指示等をするのではなく、「ここを協力してもらえませんか」と投げかける程度で、保護者の方が自発的に動いてくださっている。

例として、新型コロナウイルスが出てきた3年半くらい前の話である。安倍首相が学校休校要請をしたことを受けて、休校することに決めた。ナビゲーターやスタッフに伝え、そこから先は任せた。卒業式も近く、どうしようとなったが、あるナビゲーターがオンラインで何かをやってみようかと提案し、Zoomを使って雑談するところから始めた。すると、子供たちもナビゲーターも保護者の方も面白いと乗ってきた。そのうちオンラインでの活動がどんどん広まり、1ヶ月の間に基礎学習、探究シェアリングと、学校でやっていた大体のことができるようになった。そして、6年生は自分達が探究したことを発表し、無事卒業した。私がやったことは「休校にしましょう」と決断を下しただけだ。後は皆が自発的に動き出し、このような結果を生み出した。探究的に動くこと、それは指示しなくても行動し、新たな状況を作り出していくことにつながる。

この探究型カリキュラムを作るなかで、ICTがどのように使われているかを話す。前半のインプットの部分では情報収集として使い、子供たちが自ら検索して収集することもあれば、ナビゲーターから適当な動画などを見せる場合もある。中盤では情報共有、子供同士のグループワークのなかで、自分が調べたことや考えたことを他の人に見てもらった時に活用している。そして後半のアウトプット、発表のために試用する。ICTを学ぶというよりはインプット、情報共有、アウトプットのツールとして活用しており、ラーンネットではタブレットではなく、共有パソコンを使っている。

最後に、私は子供たちが生き生きと主体的に学ぶ場を学校の内外でできるだけ増やしたいと考えている。学校の外としては自然の中や放課後教室、マルシェや博物館等、色々な場所でやってみたい。探究の場を広めていくには探究サイクルが順回転するのを助け、子供たちの学びを手伝うナビゲーター、学校作り・カリキュラム作りでリーダーシップを取り、学校の内外で探究の場を作るクリエイター、社会の中で課題解決に努めるイノベーター、これら3役の存在が欠かせない。ナビゲーター、クリエイター、イノベーターが協力して、子供たちが主体的に参加できる場を作っていくことが大事だと思っている。

私は立場上、大学生と面接する機会がある。そのときに「どんなことをやってきましたか」「過去に自分が一所懸命に取り組んできたことはありますか」というような質問を投げかけると、探究型の学習をしてきた子供はすぐに分かる。自分で考えて行動する習慣が身に付いているので、何をたずねてもよどみなく答えが返ってくる。それに対し、あまり自分で考えず、いわれたことだけをひたすらやってきた子供は、この種の質問に答えるのは難しいようだ。学校の内外に係わらず、生徒には主体的に動いている人と何か接点を持ってもらいたいと思っている。実際に社会で活動しているところに巻き込まれて、やってみる経験、こういう経験を積むことが大事だ。

ラーンネットでゴミをテーマに扱ったときのことである。子供たちは服のリサイクルに取り組んでいる人たちと、短期間だが活動を共にした。実際に服を回収したり、リサイクルの工程に参加したりといった取り組みだ。後になって感心したのは、テーマ学習が終わってからも、子供たちは家庭の協力を得てリサイクル活動を続けていたことだ。学びが主体的な行動と結び付いている好例といえる。

子供たちの探究心と主体性を育む取り組みを今後も続け広めていきたい。

教育課程部会 実践発表Ⅰ

## 「総合的な探究の時間を中心とした体験活動が非認知能力に及ぼす影響に関して～主体的・対話的で深い学びを前提とした体験活動の可視化・言語化における実践研究～」

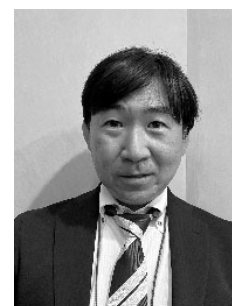
(兵庫県) 神戸学院大学附属中学校・高等学校 教諭  
**森 永 武 人**

実践対象：① 講演会等における体験活動（コロナ前・コロナ渦）

② 『総合的な探究（学習）の時間における体験活動（コロナ前・コロナ渦における比較分析）』

### 1. はじめに

現在の学習指導要領において『(児童) 生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ（以下省略）』に示されているとおり、認知能力の育成はもとより資質・能力の育成に重点がおかれているのと同時に、特別活動が大きく位置づけられている。このような状況を踏まえ、本研究においては、本校で実施している特別活動や総合的な探究（学習）の時間、とりわけ体験活動が生徒の資質・能力をはじめとした非認知能力の育成とどのような関りがあるのか、また具体的にどのような力を育成することができるのかに関して、振り返り（ポートフォリオ）やアンケートを中心に検証を行った。



### 2. 今回の研究に至った目的・背景

前述のとおり、資質・能力をはじめとした非認知能力が具体的にどのような体験活動の中で育成されるかについての知見は多くなく、一方日頃から行われている教育活動は、教科指導に軸足が置かれている現状があり、さらにコロナ禍においては、とりわけ特別活動の時間を十分に捻出することができなかったことにより、不登校をはじめ様々な状況が全国各地で報告されている。この実践研究では、生徒が将来のキャリア形成を考えるために必要とされる力が体験活動の中で育成されるのかについて可視化・言語化することを目的としている。とりわけ、体験活動に着目した前提として、近年、高等教育において体験学習が注目されている背景には、企業や社会が求める資質・能力と、大学卒業までに学生が身につけているものが乖離している。(和栗 2017)を踏まえ、体験活動と非認知能力の関係を可視化することができれば、より社会で活躍することのできる生徒を育成することができると考えたからである。また、今後スクールポリシーを各校で策定する上においても、参考になるものと考えたからである。

### 3. ① 学校全体で実施している講演会『グローバル・ゼミ』（コロナ前）

本校の特別活動のひとつとして『グローバル・ゼミ』を実施している。この活動は、全校生徒を対象とした講演会で、講演会という教育活動はすでに多くの学校において実施されているものではあるが本校では、社会で活躍している社会人や卒業生を講師として招き、『グローバル感・キャリア感・自己効力感』の醸成を主な目的としている。ここでは、コロナ前に実施した講演会『グローバル・ゼミ』の生徒の振り返りを「KH コーダー」で分析した。その結果によれば、【傾聴力】はもとより『感謝』『悔しさ』『失敗』など【内省】を中心とした気持ちの変化がみられるのと同時に、『頑張る』『挑戦』『変える』といった資質・能力を高めようとする【自己効力感】や【発信力】【行動力】の高まりやその後の行動変容の兆しが顕著に表れている。

また、コロナ渦においては、それまでのような集合形式での講演会の代わりに、海外で活躍している方々との『遠隔システムによる講演会』（1）が本校からは希望生徒を募って実施された。参加した生徒の振り返

りから、社会に対する意識の高まりや、その後の行動変容につながる結果を得ることができたこと、そして何より日常の学習活動に対する意識変容の高まりを確認することができた。

最後に、より対面に近い体験型キャリア教育プログラム『カタリバ』(2)を実施した。事前と事後の振り返りの中で、「その後の高校生活を見直したい」と回答した生徒が9割を超えたこと、そして何より受講前には自己肯定感が低かったほとんどの生徒において行動変容のきっかけとなる機会となった。

#### 4. ② 『総合的な探究(学習)の時間における体験活動(コロナ前・コロナ渦における比較分析)』

本校では、総合的な探究(学習)の時間において週2時間の探究活動を行っている。その講座のひとつとして「キャリア教育」を展開している。この講座の目的として、将来のキャリア感の醸成はもとより、生徒の主体的な活動を通じ、とりわけ生徒の資質・能力やその後の行動変容に着目しながらその実践を繰り返してきた。ここでは、コロナ前(インターンシップを中心とした体験活動)および、コロナ渦(座学を中心とした体験活動)を通じ、生徒の振り返りアンケートを行った。

#### 5. (1) コロナ前およびコロナ渦に実施した総合探究(学習)の概略およびアンケート結果

コロナ前においては、学校近くにある施設へ『インターンシップ』を主な活動として実施してきたが、コロナ渦では、主に大学の先生からの講義やNPOなどに関わっておられる方々からお話を伺う『ワークショップ』を実施した。それぞれ授業後のアンケート結果から、【行動力】【協働して物事に取り組む力】においてはコロナ前の生徒が高い値となり、一方【傾聴力】においてはコロナ渦の生徒が高い値となった。

また、いずれの生徒からも【社会への関心】や【自己効力感】の高まりそして何より、将来の見通しがより具体的になったことがその結果から確認することができた。

#### まとめ

体験活動をはじめとした特別活動が学校の教育活動の中で資質・能力をはじめとした非認知能力を育成することが可視化・言語化されたこと、そして何よりその後の行動変容のきっかけになることが検証されたことの意義や意味合いは大きいと考えている。そしてこのことは、今後多くの学校において建学の精神を踏まえ、独自のスクールポリシーを策定するにあたり、それぞれの学校における教育目標や、どのような生徒を育成するのかについて、教職員はもとより生徒・保護者・地域の方々と共有することが大切であることを再認識する機会になったと考えている。

#### 今後の展望

今回、様々な体験活動を通じ、生徒の振り返りやアンケートを実施してきたが、現状の振り返りに関しては、生徒自身が個々に行っているため、どうしても主観的になってしまうことに対し、今後さらに考えてゆく必要があるのは、その振り返りを生徒同士またはグループ同士でしっかりと共有することが必要であると考える。つまり、相互に気持ちの変化や振り返りそのものを共有することにより、他者の気づきを互いに共感することができそして何より、他者の学びを互いに支援するといった『学びの共同体』を学校全体として創り上げていくことができ、より高次の行動変容への足がかりとなるのではと考える。また、生徒一人ひとりの行動変容を中長期的な視点で確認するためにも、2020年度から実施されている「キャリアパスポート」を有効活用することにより、自身の体験活動の軌跡を可視化・言語化することが今後大いに期待される。

参考文献 和栗 百恵, 2017 『Kawaijuku Guideline 2017.4.5』.

溝上 慎一(責任編集), 2015年, 『どんな高校生が大学、社会で成長するか』学事出版.

※ (1) 『Global Relations Challenge』(株) ISA

(2) 『カタリバ』NPO法人 Brain Humanity

教育課程部会 講演Ⅱ

## 「探究学習からアカデミック・スキルへ～ICT 活用教育の高大接続」

富山大学総合情報基盤センターICT 教育推進研究開発部門 講師  
**遠山 和 大**

富山大学、総合情報基盤センターで学内のコンピューターやネットワークのお世話をする部門で働いており、授業としては「情報処理」という科目を担当している。本日のキーワードは「高大連携と ICT、それから実践の話」ということで、大学でどのような情報教育をおこなっているのかを中心に話したい。

ICT とは Information and Communication Technology の略で日本語では情報技術と訳す。この場合の情報とは「そこから何らかの知見を得られるもの」のことであり、また情報の実体はデータと呼び換えてもよいだろう。直接、いろいろなものを観察したり、実験を行って得られるデータのことを「一次データ」と呼ぶ。しかし、実際にはみんながみんな実験をするわけではないし、遠く離れた国のことを直接見に行くのは難しいため、他の人が取ってきた、蓄積された一次データを使って何かを得る場合には「二次データ」と呼ぶ。情報を得る方法は昔なら口伝や伝承、文字が現れると本や新聞、さらにテレビなどから得るといのが伝統的な方法だった。しかし、革命が起こったのが 1980 年代、90 年代だ。まずコンピューターが登場して、一般の人たちに普及し、さらにコンピューター同士をつないでネットワークを作るようになった。今の高校生、中学生はコンピューターを使って情報を得ることが当たり前のことになる。たくさんある情報のなかから必要なものを取り出し、見やすいように加工する手段としてもコンピューターが非常に有用であることが分かってきた。今まで本や口伝でしか伝わらなかったことが大勢の誰もがアクセスでき、しかもそれを容易に蓄積したり、加工することができるというのがこの革命的な進歩だったのだ。このように情報を得たり、加工するための情報技術や情報機器が ICT である。コンピューターやインターネット、ネットワークというものが最初に使われていたところは軍事的な目的はもちろんだが、研究機関だった。だから、これを教育や研究に使えないかと考え始めたのは大学が中心だった。

私が大学に入学した 1995 年には情報処理という科目はあったが、全員の必修ではなかった。20 年前、30 年前はまだ目新しく、一般の人は使い方など知らず、限られた大学の人などしか使い方を知らなかった。そういった背景もあり、とても便利なものなのだが、使い方が分からないので、まずは使い方を勉強しようということが目標になった。その後、20 年くらいは機器の使い方を教えることが目的になった授業が延々と続いてきてしまった。機器を使えるようになることはとても大事なことだが、機器を使えることが最終目的なのではなく、あくまでも手段であって、ICT や情報、データを機器を使ってどのように扱うのか、最終的には情報から「何を作り出すのか」ということが一番重要なポイントになる。これを言語に例えて考えると、中学校では英語を学ぶが、言語を学ぶ目的は話せる、読み書きができるということだけではなく、それを使って対話をしたり、一緒に仕事をしたり、場合によっては何か交渉ごとでより有利な条件を引き出したりというように、それを使って何をするのか、この「何をするか」が言葉を学ぶ目的はずだ。これを情報に重ねてみると、話せる、読み書きができるという最低限のスキルの部分は情報機器の操作ができる、パソコンやスマホが使えるということで、それを使って何をするか、つまり言葉を使って仕事や交渉をすることが、何を作り出すかに相当する部分になる。学問としての語学や外国語文学とは何に相当するのかというと、おそらく、情報科学、情報そのものについての学問やネットワークについての学問などいろいろあるが、そのような情報科学に相当するかもしれない。ただ、一般的にはこの



部分はあまりなくても目標には到達できる。この部分にとらわれ過ぎると最終的な目標になかなか到達できないかもしれない。しかしながら、最近では情報機器を使えるようになり、その最終的な目標に到達するためには、やはりこの理論的な部分も知ったほうが良いという方向になってきている。

情報機器を使って何を作り出すのかを別の言い方にすると、大学の学びで情報機器をどう生かしたらいいのか、ICTの技術をどう生かしたらいいのかと言える。大学の学びとは、「大学では何を学ばなければいけないのか」という問題に突き当たる。そこで学校教育法を見てみると、大学というのは「学術の中心として広く知識を授け、深く専門の学芸を教授研究し」という言葉が出てくる。2番目には「その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供する」と書いてある。これを読むと、大学というのは教育と研究を行うところであり、研究が結構重要な位置を示しているということになる。

研究とは何かというと、おそらくこの3つに集約されるのではないかと。1つ目は、「これまでに誰も解いていない謎を見つけてくる」。2つ目が、「謎を解くこと」。しかし、単に解くだけではなく、誰もが納得する方法、つまり科学的な方法で解かなければならない。3つ目に、「誰もが納得できるように、その過程と結果を説明すること」。この3つがそろったものが研究ということになる。だから、大学での学びは知識を教えることは当然として、もう1つ重要なことは研究の仕方あるいは研究の方法論を教えるということ、このことが1番究極的な目標ではないか。様々な学部があるが、どこの学部でも先ほどの3つの「謎を見つける、謎を解く、それをみんなに説明する」という流れは同じだ。大学を卒業するためには卒業研究が必須で、その成果を卒業論文としてまとめたものを提出し、さらに卒業発表や卒論発表など、みんなの前で言葉で説明することも求められる。だから大学は先ほどの研究を行う流れを身に付けなければ卒業できないようになっている。その大学教育あるいは研究において、ICTをどのように位置づけるのか、それは単にパソコンが使えますということではだめで、研究をよりすばらしいものにするために、どのようにICTを使うのかを考えなければならない。そのような観点から、それまでは単に機器操作中心だった情報処理科目の授業を再編成しなければならないのではないかと議論になった。

情報科目の再編成をするにあたって、高校の情報科の教科書を取り寄せてみた。当時は「社会と情報」と「情報の科学」という教科書で、驚いたのは「社会と情報」の教科書には機器・アプリケーションの操作、どうやって使ったらいいのか、情報そのものについての説明、いわゆる情報学の話、プログラミングなども含んでいる。情報機器や技術を使ったデータ解析やレポート作成の方法、どうやって何を作るのか、さらに言うとそれをどうやってみんなに伝えたらいいのかということが全部書いてある。これは私たちにとっては結構ショックで、これを高校でやっているなら大学で教えなくてもいいのではないかとというくらいの内容だった。さらに探究学習というものも出てきた。これは課題を自ら見つけて設定し、それについて情報を収集して、その情報を整理・分析し、まとめと表現をするという流れで、大学の研究の流れと同じだ。それまで始まれば、大学でどうしたらよいか。

それでは、大学とは何が違うのかというと、1つは「主観と客観」。先ほど言ったように誰もが納得できるように説明する、誰もが納得できるようなデータを使って問題を解く、これは客観的な判断、科学的な判断と言ってもいい。対して、私はこう思うというのは主観的な判断でこの違いが厳密に区別されていないようだとか、また多くの場合はグループによって作業をすることが多いとか、対象が限定的になってしまうということ。機器や予算、時間がないという問題もあるだろう。もう1つは、みんながそれをやっていけば、大学でもっとスムーズに研究ができるのではないと思うが、実際には全ての学校でうまくいっているわけではないという問題もあるようだ。

だから、高校であれほどすばらしい教科書を使っているのだから、さぞかしみんなすごいのだろうと思ったが、実際には必ずしもそうではなかった。学生に最初に行ったアンケートでは、パソコンを持っている人は7割くらいで、結構な人が持っている。キーボード入力は「だいたいできる」も入れると、ほとんどの人はできるように



なっている。このように、初めて触るという人はなくなったが、実際に授業をすると、たとえば情報やデータを得たとすると、それが本当に信用できるデータなのかという吟味ができない、ネットに出ているものをそのまま写して出してくるというようなことはよくあることだ。それから、Word で文章を作ることや、PowerPoint を使ってスライド資料を作ることにはできるという人が多いが、Excel に対する苦手意識を持っている方が多くいる。そういう問題があると、レポートや課題を書いてもらうと、先ほど言った客観的な文章ができない。最初に文章を書かせると、何か問題、課題が起きたとすると、「私たちはこのことに関してもっとよく考えていくようにしなければいけない」、「もっと頑張らなければいけない」というような文章を書いてくる。しかしこれではだめである。なぜなら、1つは主観的な判断であるということ、もう1つは具体的な結論が書かれていないということだ。最終的に問題を解決した結論を書かなければならないのに、私たちは頑張らなければいけないと書いては研究という観点でいうと何も結論していないのと一緒になってしまう。プレゼンテーションについては PowerPoint を使ったプレゼンテーションをやったことのない人というのは1割くらいだが、大人数の前で話をする機会が少ない。卒論の発表は必ずしなければいけなくなる。学部にもよるが、100人くらいの前で話さなければいけない。これは避けて通れない。それから、情報倫理とかセキュリティに関する部分はまだ十分に教育されていないようだといったことがある。そういった状況を踏まえて、情報処理を策定しなければいけないが、目標としては大学で学ぶべき研究の方法、つまり何を作るかを身に付けるうえで必要な素養を学ぶということを中心に考えて教科書や情報処理科目の内容を考えるということを行った。

富山大学には3つのキャンパスに9つの学部があって、約1万人の学生がいる。情報処理は必修なので、入学者の2000人が一遍に受けるが、もちろん1度にはできないので、40クラスほどに分けて50人くらいで行う。情報センターの教員だけでは足りないので、各学部から応援教員を呼んで、十数人で教えるのだが、内容は皆がそれぞれに考えた内容をやっていた。ところが、教養教育改革を行うことになり、内容の一元化と一部の学部を除いて、1つのキャンパスで学部ごとに分けずに混成クラスで授業を行うことになった。内容については、「アカデミック・スキル」、つまり研究を行う上で必要なスキルを身に付ける、どうやって使うかではなく、そこから何を生み出すかということに主眼を置いた方向にしようということになった。アカデミック・スキルというのは探究学習と同じようだが、課題を発見し、その次に調査、実習を通して問題点を明らかにする。この調査、実習というのが大学では結構重要なことで高校ではなかなかやりにくい部分であるかもしれない。データを収集するのも、ネットで収集するのではなく、より信頼性のあるデータを収集できるようにしようというのが1つだ。それから、そのデータを整理、解析するのだが、現代ではほとんどの場合にデータは数字のデータになる。だからデータを見ると、ただ数字がズラッと並んでいるだけで、それを見てもさっぱり分からないため、計算したり、加工したり、さらにはグラフにして可視化することになる。このようにして理解しやすいようにすることによって、謎を解くということになる。それに基づいて説明を行う。次にその問題点を文章で説明する。これがいってみれば論文なのだが、いきなり論文を書くのは難しいので、論文より少し短いレポートという形で書いて提出させる。さらにそれを口頭で説明するというような研究の流れに沿った構成を作ろうということになった。

シラバスの内容についてはコンピューターの基本的な操作、端末室の使い方など大学独自のシステムについての説明、情報セキュリティ教育、基本的な学内のメールの使い方、図書館での情報検索システムの使い方を教えて、やっと、このあと大学で行う研究の流れを練習してみようということで、情報を調べて課題を発見して、さらにその課題に関するデータを集めたり、加工したりする。それを使って説明を文章で書き、プレゼンテーションを行う。それから、インターネットの公開、Webに関する授業が1個入っているが、スキルの部分と使い方の部分とそれを使って何を作ったらいいのかというアカデミック・スキルの部分というのを繋げた内容になってい

る。また、教員によって差が出ないようにするために、教科書を作り、参考資料をインターネットで見られるようにした。

教科書は『ICT 活用で学ぶアカデミック・スキル』という本で、これは毎年書き直している。内容は前半の部分はパソコンの使い方、パソコンの基礎の話を多少してある。ここが鬼門で、クラウドとタブレットの登場により、ドライブとかフォルダとかそれからファイルというものの概念を持っていない人がとても多い。工学部の人などはプログラミングをする際に困ってしまう。そして、インターネット、Excel、Word、PowerPoint を使ってこういったものを作ったらよいかというふうになるように書いてある。具体的な例として、この本のなかでは地球温暖化の問題についてレポートを書くというストーリーで書いてある。第6章の情報収集の部分では図書館や Web サイトを使って情報を検索するときに、Web だったらどういう情報を取ってきたらいいのかについて、一次データを取ってくるようにと書いてある。そうすると必然的にデータを取ってくる場所は決まってくる、ほとんどが官公庁のデータになる。書籍に関しては、一番よいのは最初に名の知れた出版社から出ている新書と呼ばれるものを読んで全体像をつかみ、そのなかから必要なより詳しい文献を探すようにと手順を説明している。実際に教科書のなかでは地球温暖化について調べるので、気象庁のサイトへ行って実際のデータを取得していく。数字の羅列では分からないので、Excel を使ってのデータを加工することによっていろんなものが見えてくるという説明を行い、さらにそれをグラフの形に直せば一目瞭然である。次はそれに基づいて文章で説明する。始めにこういった考えと目的でこの研究を行い、実際にそれについてのデータを集めた結果がこうである、さらに発展的に考えてみるとこうで、以上をまとめると結論が書ける。そして参考文献を示すというように、主観的な文章ではなく客観的に誰が見ても分かるような様式で文章を書くということを教える章を作り、最後にそれをプレゼンテーションするというようになっている。

15回の授業はこういう内容で進むという資料が Moodle というシステムに全部載っていて、そこで資料を見たり課題を提出したりができるようになっている。Moodle というシステムはオープンソースなので結構使っているところは多い。コロナで授業ができないときには Moodle で自習してもらおうというやり方で行った。今回の話の中で、実際どういう効果があったのかということが全然出てこないのは、コロナで授業ができなくなってしまって、途中で内容や、やり方がガラッと変わってしまったからだ。教員側からは何が問題になるかという、採点が難しい。ルーブリックを作ってみたり、可能なものは自動採点をするようにしていた。プレゼンテーションに関しては、これはもう採点するのは大変なので、相互採点のプラグインを開発して学生に採点させるというやり方にした。

今後、おそらく高校では情報ⅠとⅡというのが出てきて、今までよりももっと浸透していくとすると、やはり今、私たちがやっていることも、そのままやっているわけにはいなくなるということは当然考えなくてはならなくなっている。

## 「生徒の自己ベスト更新を促す教育課程」

(岐阜県) 麗澤瑞浪中学高等学校 教頭  
**松本 兼太郎**

### 1. はじめに

本校は岐阜県の瑞浪市にある男女共学の中高一貫校である。全校生徒は中学校高等学校を合わせて約 450 名、うち約半数が寮生活を送っている。

本校の特徴の一つは敷地面積約 88 万坪の広大なキャンパスである。校舎や生徒寮に加え、グラウンド 3 つ、体育館 3 つ、27 ホールを有するゴルフコースと様々な設備を有している。また、施設面だけでなく、北は東北、南は九州から集う生徒による多様性に富んだ人間関係が構築されることも本校ならではの特徴である。

1950 年の開校以来、道徳教育に基づく人間性の涵養を目指し、「知徳一体」の教育理念の下、教育活動を行ってきた。近年では 8 割以上の生徒が四年制大学へ進学し、旧帝大を含む国公立大学の合格者も全校生徒の 1/6 を数える進学校としても認知されつつある。



### 2. 本校の抱えていた課題感

本校では教育理念に基づく「良い教育」をしているという自負はあったし、「良い生徒」が育っているという実感もあった。しかし、その教育や生徒の良さとは何なのか、またその成果は本校の教育活動の結果によるものとして可視化できるのか、という課題感は常にあった。

その折、平成 28 年度に本校の卒業生の協力も得て、大阪大学大学院人間科学研究科教育文化学研究室の学校調査を実施する運びとなった。調査は約半年にわたって行われ、生徒へのアンケート、生徒・教職員への聞き取りなどを経て、150 ページを超える報告書にまとめられた。

その中で明らかになった本校の課題とは、以下の 2 点に集約される。

(1) 知識を外に出して表現する機会が少ない。

本校では「自学のススメ」とでも言うべき学習感が確立されており、「知識を進んで摂取する」機会が多い。一方で「得た知識を用いて自分なりの考えをまとめたり、発表したりする」機会が少ない状態にあった。

(2) エメラルドグリーン一色（似た者同士の集まり）である。

本校の生徒は出身地域こそさまざまであるものの、明確な教育理念に賛同する子弟が集うため、「慣れや甘え」が生まれやすい環境にあった。もちろん似た者同士で仲良くやることは悪いことではないが、異質な他者への潜在的・顕在的な排除に繋がる危険性をはらんでいた。

上記の課題を踏まえつつも、報告書の結言には、「様々な資質や能力を持つ生徒たち一人ひとりの個性が、キラリと輝くような学校づくり。それをさらに推し進めていただきたい」とあった。

### 3. 課題解決の施策

本校が抱えている課題だけでなく、今日的な社会の変化に対応できる生徒を育てる観点からも教育内容の改革は不可避である。その一方で、教育改革が目先のものとならないよう、教育理念に根差した内容で改革の方向性を具現化する必要があった。

本校では外部企業（株式会社ミエタ）の協力を経て、以下の内容で課題解決のための施策を講じていった。

(1) 育てたい資質の策定

教育理念を紐解き、4 つの資質、12 のコンピテンシーに再定義して、生徒に身につけさせたい能力群として項目化した。このコンピテンシー群を設定したことにより、学校として育てたい力が明確になり、特に教職員において日々の授業や行事の目的を意識する姿勢が養われた。また、生徒の形成的評価の一つの指針を

得ることができた。

その中で、特に本校の課題（不足しているコンピテンシー）として挙げられるのが、社会を構想する力や生徒が多面的な探究力を発揮する機会であることも明確となった。

#### （２）外部講師を招聘した新しい学校行事の企画

決して交通の便が良いわけではなく、また全校生徒の約半数が寮生という中で、どうしても学校集団は内側に向きがちになる。そこで、社会の最前線でフロントランナーとして活躍している若手社会人を講師として招聘し、年２回、全校規模でのワークショップを企画した。

ワークショップのテーマは原則的に今日的な社会課題であり、世界や社会の実情に触れる機会となるだけでなく、生徒同士のグループワークやプレゼンテーションを通じて、協働性や表現力、また答えのない問いに向き合う力を養うきっかけを得ることができた。

#### （３）キャリアパスポートを活用して生徒が自身の成長に焦点を当てる機会を確保

独自書式のキャリアパスポートを準備し、生徒が他者との比較ではなく、過去の自分自身との比較における成長を可視化できる状況を準備した。

### ４．生徒の変容

これらの取り組みを経て、以下のような変容が見られた。

#### （１）キャリアパスポートにおける生徒の記載量（文字量）が増えた。

具体的な字数を数えたり、平均値等のデータを取ったりしているわけではないが、明らかに書く量、書ける量が増えるようになった。ワークショップを通じて出力の経験を積んだことも一因ではあろうが、「何を」「どのような観点で」書けば良いのかを生徒が理解し始めたためと考えられる。

#### （２）キャリアパスポートにおける生徒の記載内容が変化した。

キャリアパスポートにおける生徒の記載内容について、従来は事実を振り返るのみの内容、また簡単な感想を書くのみ、という生徒が大半であった。しかし施策実施後は、課題を明確にしようとする記載、課題の解決を目指そうとする記載、また設定したコンピテンシー群に結び付くような記載が見られるようになった。

#### （３）生徒の自発的な活動が増えた。

本校の生徒の特徴は、よく言えば素直で従順、一步間違えば教師の顔色を窺ってしまったり、指示を待ってしまったりする傾向があった。しかし施策実施後は、生徒自ら（教員に却下されることを恐れずに）学校に対して様々な提案を行うことがしばしば見られるようになった。

#### （４）生徒の学校満足度が高まった。

本校では、Benesse コーポレーションが実施している「スタディーサポート」の学習状況調査における学校満足度（10点満点）は、従来、概ね6にもっとも人数が集まる傾向にあった。2021年度の高校1年生の9月の調査においても6が最も多く、次いで5、3、7という順番であった。

半年が経過し、2022年4月に同じ集団で学習状況調査を行ったところ、7が最も多く、次いで6、5と続き、4以下の生徒は一人もいない、という結果となった。

### ５．学校の現状と今後の課題

このように、建学の理念に基づき、資質とコンピテンシーを定め、不足しているコンピテンシーを補うことを目的に外部企業の力を借りることで、生徒にも、また教職員にも様々な変化が見られるようになった。一方でまだまだ課題も残っており、特に探究的な活動が行事や課外活動、一部の先進的な教員の授業に限られていること、また4つの資質と12のコンピテンシーの評価スケールが未整備であることなど、今後、着手していかなければならないことも多い。

しかし、私学の生命線である「建学の理念」を具体化すること、具体化された建学の理念を生徒に照らし合わせ、不足感を補う観点でカリキュラムを見直すこと、何よりも学校外の団体や企業と協働的に取り組みながら探究的なステップでカリキュラムを再編することが、結果として育てたい生徒を輩出することに繋がり、生徒の学校満足度を向上させることにもつながるのではないかと。

## 教育課程部会

### 「総括」

済美高等学校 校長  
鹿野孝紀

当部会はこれからの時代に対応する私学教育の使命、副題として私学独自の教育の構築をテーマにして、新しい時代の私学の教育課程を研究目標として行いました。

お二人の講師の方の講演とお二人の学校現場の先生から実践発表を頂きました。当部会では講演や実践発表を通して、主体的・対話的で深い学びのあり方を ICT の活用を含めながら私学としての独自の教育課程のあり方を追い求めていきたいという考えのもとで行ってまいりました。お陰様で全ての講演、実践発表もその趣旨に沿った素晴らしいものであったと思っています。最初の講演で、炭谷俊樹先生からは子供の探究型サイクルを促進し、自己肯定感を高めるカリキュラム実践を」と題してお話を頂きました。炭谷先生は少年時代は科学少年であり、アインシュタインに興味を持って、物理学者になりたいという夢を持っておられたという話から、記念講演の梶田先生の話が脳裏に蘇ってきて、お二人の教育理念、あるいは考え方には共通点が多くあると感じたのが最初の印象でした。炭谷先生は企業、マッキンゼーで大前研一氏から学ばれたこと、あるいはデンマーク教育に触れたことをきっかけとして、今のラーンネットの運営に携わっていかれたというお話をされましたが、そこで確立されました探究学習について、探究学習を行う際の大切なことをナビゲーションの3つのステップ、あるいは教育の3つの考え方、さらには探究学習を行う際の大切なことを具体的に非常にわかりやすく例を挙げて説明して頂きました。これはこれからの私たちの探究学習のあり方に大きな指針を頂いたものと思っ、大変勉強をさせて頂いた次第でございます。また、午後の後半では森永武人先生から、特別活動や総合学習、探究の時間を活用した様々な学校教育、学校行事がどのように生徒の行動変容につながっていくかという研究の成果と課題について教えて頂いた次第でございます。



午後の部では遠山和大先生からは探究学習アカデミックスキルと題してお話を頂きましたが、遠山先生は専門が雪の研究であったにもかかわらず、今では全く違って、情報教育の研究をすることになった経緯をお話頂いたとともに、日本の情報教育の初期の歴史を非常にわかりやすく教えて頂き、大変勉強になりました。講演の後半では情報教育の今後のあり方を通して、大学の学びについて、大学は何をすることで、さらには大学での学び方や姿勢をわかりやすくお話を頂いたものと思っています。特にこの点は私たちが高校で生徒指導を行っていく上で、極めて役立つことを教えて頂いたと思い、感謝をしております。最後に麗澤瑞浪中学高等学校教頭の松本兼太郎先生からは生徒の自己ベスト更新を促す教育課程と題してお話を頂きました。同校で大阪大学研究チームに学校評価をお願いしたという点は素晴らしい試みであったと思っています。そこから学ばれたことを通して、4つの資質と12のコンピテンシーを作られる等、様々な方法で現在、課題解決に努めておられるという点もまた、私たちが多く学ぶべきところであると思っています。

このようにどのプログラムも大変興味深い講演、研究発表でございました。ご参加頂きました先生方には今回の学びを各学校に持ち帰って頂き、是非、学校の中で共有して各学校の見学の精神のもと、新しい時代の実践、学校改革に役立てて頂きたいと思っています。

最後にまだ収まらないコロナ禍で多くの方々に岐阜にご参集頂き、本当に有り難うございました。岐阜大会での成果が次の香川大会につながることを祈念して総括とさせていただきます。

# 法人管理事務運営部会

様々な教育的課題が叫ばれる中、教職員の勤務現場では、長引くコロナ禍に伴い新たな負荷がかかることとなったが、同時に新しい働き方に向けた改革が確実に進んでおり、教育現場が新しい姿に進化している。全国的な教員志願者数の減少の中、教育に高い志のある人を増やし、教職を生涯の仕事と考え、私立学校を自己成長感の持てる職場として目指してもらえ、魅力ある職場としていくための方策を、様々な視点で検討していきたい。

当分科会では部活動運営分科会と合同で部活動運営や働き方改革に関する講演と実践発表、後半をこれからの私立学校の働き方改革に関する内容の講演と実践発表を行い、私学の魅力ある職場作りを考えていく場としたい。

- 1 研究目標 私立の魅力ある職場づくり
- 2 会場 都ホテル岐阜長良川  
【合同・法人管理事務運営分科会】2階 ボールルーム 1/3  
【部活動運営分科会】2階 連
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、事務局長、事務長またはこれらに準ずる管理職及び事務担当教職員、部活動担当教員
- 4 参加人員 法人管理事務運営分科会 58名  
部活動運営分科会 116名
- 5 日程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16
月日	9 30	10	11	12	13 15	14 30 45	15 45	16
10月21日 (金)	開 会 式	基調講演 (合同)	実践発表 (合同)	昼 食	分科会 委員長 挨拶	(法人管理事務運営分科会)		閉 会 式
				昼 食		講演	実践 発表	
						(部活動運営分科会)		
						講演	パネル・ ディスカッション	閉 会 式

## 6 内容・日程細目

8:30	受付 (近藤 琢爾／深瀬 武彦／ 舟越 章訓／木田 敏行)	機材担当：松野 智弘・木田 敏行 記録(写真)担当：日比野 浩司・舟越 章訓 集録担当：鷺見 益男・木田 敏行
9:00	開 会 式	司会：松野 智弘／記録：鷺見 益男・木田 敏行
9:30	1. 開式の辞 2. 専門委員長挨拶 3. 運営委員・専門委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	法人管理事務運営専門委員長 工 藤 誠 一



9:30	基調講演 司会：松野 智弘／記録：鷺見 益男・木田 敏行 講師紹介：米田 聡  演 題 「変革を迫られる学校運営」 講 師 工 藤 誠 一 聖光学院中学高等学校 理事長・校長 佐々木 陽 平 静岡聖光学院中学高等学校 副教頭 静岡聖光学院中学校ラグビー部 監督・中高統括
11:00	実践発表 司会：大熊 政彦／記録：鷺見 益男・木田 敏行  テーマ 「学校での働き方改革のネックの『部活動』と『滝教育研究所』」 発表者 中 島 政 彦 学 校 法 人 滝 学 園 学 園 長
12:00	
13:00	昼 食

## 7 分科会

### 【法人管理事務運営分科会】

研究目標 ～私学の魅力ある職場づくり～

様々な教育的課題が叫ばれる中、教職員の勤務現場では、長引くコロナ禍に伴い新たな負荷がかかることとなったが、同時に新しい働き方に向けた改革が確実に進んでおり、教育現場が新しい姿に進化している。全国的な教員志願者数の減少の中、教育に高い志のある人を増やし、教職を生涯の仕事と考え、私立学校を自己成長感の持てる職場として目指してもらえ、魅力ある職場としていくための方策を、様々な視点で検討していきたい。

当分科会では部活動運営分科会と合同で部活動運営や働き方改革に関する講演と実践発表、後半をこれからの私立学校の働き方改革に関する内容の講演と実践発表を行い、私学の魅力ある職場作りを考えていく場としたい。

### 内容・日程細目

13:00	分科会開会式 司会：松野 智弘／記録：鷺見 益男
13:15	1. 運営委員長挨拶 法人管理事務運営分科会運営委員長 米 田 聡 講 演 司会：松野 智弘／記録：鷺見 益男 講師紹介：米田 聡  演 題 「データ活用と対話を通じた、持続可能な職場づくり」 講 師 町 支 大 祐 帝 京 大 学 教 職 大 学 院 専 任 講 師
14:45	実践発表 司会：鷺見 益男／記録：鷺見 益男  テーマ 「ICTを活用した浜松学芸の働き方改革～実践と展望～」 発表者 細 谷 賢 行 浜 松 学 芸 中 学 高 等 学 校 教 諭
15:45	閉 会 式 司会：松野 智弘／記録：鷺見 益男  1. 開式の辞 2. 総 括 法人管理事務運営分科会運営委員長 米 田 聡 3. 閉会の辞
16:00	解 散

【部活動運営分科会】

研究目標 ～私学の部活動運営の新たな可能性～

スポーツ庁・文化庁で「部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が策定され、働き方改革を考慮した部活動改革が進められている。公立学校では令和5年度から休日の部活動が地域へ段階的に移行される。

部活動は、学習指導要領で学校教育の一環と位置づけられており、私立学校では文武両道等として特色とすることも多い。しかしながら、私立学校も働き方改革を意識した部活動の現状と問題点を考えていく必要がある。

当会では、まず法人管理事務運営分科会と合同で部活動運営や働き方改革に関する講演と実践発表、後半に部活動全般に関する内容の講演とパネル・ディスカッションを行い、各校の抱える課題や私立学校の部活動の新たな可能性を考えていきたい。

内容・日程細目

13:00	分科会開会式	司会：大熊 政彦／記録：木田 敏行
13:15	1. 運営委員長挨拶	部活動運営分科会運営委員長 古田 健二
	講演	司会：大熊 政彦／記録：木田 敏行 講師紹介：古田 健二
	演題 「働き方改革の時代の『部活動』を考える」	
14:30	講師 吉村 光正 経営・組織・人材マネジメントコンサルタント	
	パネル・ディスカッション	司会：舟越 章訓／記録：木田 敏行
	テーマ 「私学の部活動運営の新たな可能性」	
	パネリスト 田中 信博 中京高等学校 副校長	
	安江 満夫 岐阜女子高等学校 女子バスケットボール部総監督	
	相馬 弘 山梨学院高等学校 高校教頭	
		ハイスクールスポーツセンター長
15:45	コーディネーター 吉村 光正 経営・組織・人材マネジメントコンサルタント	
	閉会式	司会：大熊 政彦／記録：木田 敏行
	1. 開式の辞	
	2. 総括	部活動運営分科会運営委員長 古田 健二
	3. 閉会の辞	
16:00	解散	

8 講師・発表者・パネリスト・コーディネーター（順不同）

【合同】

工藤 誠一	聖光学院中学高等学校	理事長・校長
佐々木 陽平	静岡聖光学院中学高等学校	副教頭
	静岡聖光学院中学校ラグビー部	監督・中高統括
中島 政彦	学校法人滝学園	学園長

【法人管理事務運営分科会】

町支 大祐	帝京大学教職大学院	専任講師
細谷 賢行	浜松学芸中学高等学校	教諭

【部活動運営分科会】

吉村 光正	経営・組織・人材マネジメントコンサルタント	
相馬 弘	山梨学院高等学校	高校教頭・ハイスクールスポーツセンター長
安江 満夫	岐阜女子高等学校	女子バスケットボール部総監督
田中 信博	中京高等学校	副校長

9 運営委員・指導員（順不同）

【法人管理事務運営分科会】

委員長 米田 聡	富田高等学校	校長
副委員長 信条 希望	聖マリア女学院中学高等学校	校長
委員 鷺見 益男	聖マリア女学院中学高等学校	第一教頭
日比野 浩司	聖マリア女学院中学高等学校	第二教頭
松野 智弘	富田高等学校	教頭
近藤 琢爾	富田高等学校	事務職員

【部活動運営分科会】

委員長 古田 健二	大垣日本大学高等学校	校長
副委員長 豊田 陽一郎	岐阜第一高等学校	副校長
委員 大熊 政彦	大垣日本大学高等学校	教頭
舟越 章訓	岐阜第一高等学校	教頭
深瀬 武彦	大垣日本大学高等学校	教諭
木田 敏行	岐阜第一高等学校	教諭

10 専門委員・指導員（順不同）

委員長 工藤 誠一	聖光学院中学高等学校	理事長・校長
委員 服部 泰啓	学校法人信愛学園	理事長
川島 英和	学校法人川島学園	理事長
野尻 富太郎	学校法人東京女学館	常任理事 法人事務局長

法人管理事務運営部会 基調講演

## 「変革を迫られる学校運営」

(神奈川県) 聖光学院中学高等学校 理事長・校長

**工藤 誠一**

(静岡県) 静岡聖光学院中学高等学校 副教頭  
静岡聖光学院中学校ラグビー部 監督・中高統括

**佐々木 陽平**

〔工藤誠一〕

本年4月から静岡聖光学院中学高等学校の理事長、校長と幼稚園の園長を兼任している。神様からいただいた命を多くの人のために尽くすことができる、そのようなチャンスを与えられ、とても幸せだ。毎朝、目が覚めることは奇跡であり、感謝の気持ちを持って1日を過ごしている。なぜ、このようなことを申し上げるかという、私たちは常に子供たちの前に立っているからだ。子供は大人よりも感性が鋭いため、私たちの心が揺れていると子供たちの心も揺れてしまう。子供たちに送るメッセージは彼らの心を安定させるようなものでなければいけないということが私の考え方だ。現在、私たちが思う以上に、世界のなかでの貧困は少なくなり、人々の寿命は伸びている。今やアンテナさえあれば、世界中でインターネットに接続し、どこにいても世界の最先端の知にアクセスすることができる。そのような時代に生きていながら、私たちの脳裏にあるのは、いまだに昭和の人生すごろくであり、少しも変わっていない。昭和の人生すごろくとは、小学校、中学校を義務教育で過ごし、高校や大学を卒業したら、女性は結婚、出産、専業主婦。男性は新卒で正社員に一発採用、終身雇用で、退職金、年金をもらうというような昭和の象徴的な人生のかたちのことだ。そうしたなかで、特に中学校3年間の部活動も大きく関わっていた。当時の学校教育における部活動は、保育園や学童保育と同じで、夜遅くまで子供を預かってくれる場だった。土曜日でも日曜日でも、練習だ、試合だと言っては預かってくれたので、高度成長の真っ只中、親たちは安心して、迷うことなく仕事に邁進できた。部活動がまさに日本の高度経済成長を支える1つの大きな原動力になっていた。教科指導より部活動をしたくて教師になった人は喜んで、自分の家族を放り出してまで部活動の指導をしてくれている。部活大好き教師を **BDK** と呼ぶことを知っているだろうか。部活だけしかできない教師という意味の場合もある。そして **BDK** の先生は声大きいので、若い先生方は嫌でも従うしかない。部活動はほとんど金がかからないので、保護者も **Welcome** だった。中学校はほぼすべての先生を動員し、全校あげて部活動に取り組んできた。そして特徴の1つに生活指導と一体化していることがあった。つまり、子供たちの非行化を防止する役割も担っていたのだ。そのような人生すごろくのなかの一部だった部活動は今も続いている。タイムカードで出勤を管理され、工場労働者、建築現場の労働者と同じように扱われている。一方、大学の先生は知的労働者という括りで年収も高い。日本の将来を考えた場合、これでいいのか。「女性は結婚、出産して添い遂げる」という生き方は1950年代生まれでは81%を占めたが、1980年代生まれでは58%だ。「男性は正社員になり定年まで勤め上げる」という生き方も1950年代生まれでは34%だが、1980年代生まれは27%と減っている。かつての「サラリーマンと専業主婦の夫婦で定年後は年金暮らし」という形は大きく変わった。人生は100年時代、二毛作、三毛作が当たり前になった。しかし、いまだに昭和の標準モデルを前提に作られた制度と、それを当然と思う価値観が絡み合い、変革が進まないのが日本であり、教育現場ではないだろうか。

もしかしたら学校は部活動をやめてもよいと思う。しかし、辞めようと言ったとき、最も反対するのは現場の先生方かもしれない。校長や管理職よりも、現場の先生のほうが、従来の制度にしがみつきがちだ。しかし、同時にそのことが、個人の多様な生き方の選択を歪めている可能性がある。日本人は1つのことをやり遂げることを美徳とし、進学する際は中高6年間を通じて1つの部活動に打ち込んだという実績が評価される。もちろんそ



れを否定するわけではないが、アメリカの大学でそれを主張しても「それ以外には何をやりましたか」と必ず聞かれる。また、日本人はトイレ掃除が大好きで、叩き上げの会社で、社長自らがトイレ掃除をするという話もよく聞く。しかし、アメリカではトイレ掃除はもともと奴隷の仕事であり、彼らの仕事を奪ってはいけないという考えもある。トイレ掃除が悪いという話ではない。世界と日本の考え方の違いをどのように捉えるべきか、という視点を持つべきかを考えてほしい。時代が大きく変化し、ルールも変わっていくなかで、学校や先生はどうあるべきか、時代に合わせたかたちに、しなやかな対応が求められている。何を変え、何を継続するか、その選択を、理事長、校長、管理職の先生方が選び取っていく、そういう時期にあるのではないか。

今、教員養成学部を卒業しても教員になる人は半分程度だ。各都道府県の教員の充足率は特に小学校で下がっており、深刻な問題だ。しかし、将来先生になりたいという子供たちは一定数おり、教師を目指して勉強中の大学生も多くいる。ところが、いざ就職となると、学校の先生ではなく、企業に就職してしまう。学校の先生はブラックだと言われ、なかなか、なり手がいないのだ。では、実際の先生たちは何に負担を感じているのか。アンケートの結果では、教えること以外の仕事が多すぎるという回答が見られた。具体的には週案、月案、年間表の作成や保護者からの理不尽なクレームへの対応などが挙げられている。それは、本当に教員がすべき仕事だろうか。実は、大学の場合、教員1人に対して事務員は2人くらいついており、事務的な仕事は事務員が行う。ところが、小中高はどうか。明治時代からの名残で、たとえ事務であっても、資格もない事務員にはやらせられないと言って、すべて教員が自ら行っている。明治時代は確かにそうだったかもしれないが、今もそうなのだろうか。各学校で事務員が時間割を組む学校はあるだろうか。あっても少ないだろう。現場のことは教員にしかできないと思うかもしれないが、大学や予備校ではそれはすべて事務員の仕事だ。もう1つ言うと、教員の姿は、実は、師範学校の流れを引きずっている。かつて、師範学校は貧乏だが成績が良い子供や、海兵や陸軍士官学校に行けなかった子供が行くイメージがあった。そして、3食飯付きで師範学校へ行ったのだから恩返しをしなさいという考え方が強くあった。恩返しとは給料は安い、減私奉公で働きなさいということだ。先ほどの昭和の人生すぐろくよりも前、明治維新の殖産興業時代の教師の姿、そのイメージがいまだに強く残っている。このように教師というものの捉え方が何も変わっていないのに働き方改革と言って、とにかく無理やり早く帰らせようとしたのでは私たちの仕事を何も分かっていないのではないかと教員が不満を抱いても仕方がない。これからは無駄な業務があれば省き、意見があれば文部科学省と直接交渉してもよい。今までの既成概念に捉われずに進んでいくことが必要だ。文部科学省のやり方を批判する声もあるが、単に批判するだけではなくて、それに対して自分たちはこう対応するという姿を見せていくことも大切だ。

それから、今は授業のコマ数が多すぎる。中学校は公立で約22コマ、高校は15コマ前後だ。コマ数が多いと必然的に会議などは放課後に行うことになり、早く帰ることができない。これは教員の働き方のなかで、非常に大きな負担になる。それを解決するためには会議を減らすのが一番だ。先生方は会議が大好きだが、実は無駄なものも多い。また、非常勤講師を減らし、専任講師を増やして分担する手もあるが、それは財政的負担が大きすぎる。オンライン上の共有フォルダを見てもらうことで済ませるなど、新しい会議の形を工夫することがよい。それだけでも、大きな変革になる。そのような部分を一つ一つ見直していくことが大切だ。また、近年は教員不足であり、授業の質も下がっている。横浜の聖光学院高等学校の東京大学合格者数は全国で毎年10傑のなかに入り、今年も91名が合格した。このような結果を残し続けるためには、授業の質という部分が一番大事だ。私たちの学校では、若い先生方に高校2、3年生を担当させている。先生自身が入試問題をきちんと解けて、分かりやすく説明できるかということが大事であり、そこが、先生として生徒に認められるかどうかという部分とも関係している。だから、なるべく若いうちに高校2、3年生の指導を任せ、経験を活かしてもらえるようにしている。それが質の高い教員の育成にもつながる。教員不足が続くと、ほかの先生の仕事を増やしてしまうという罪悪感から、休みが取りづらいつとを感じる方が増える。また、みんなが忙しすぎて、職員室はいつも空っぽということも起きる。結果、指導力が低い人物を雇わざるを得なくなる。このような問題はどこの学校でも深刻だ。さらに、神奈川県全体で見ると、県立高校では進学重点校として機能している学校が以前より減り、今は翠嵐高等学校しか

ない。難関高校を指導できる教員が育っていないからだ。また、小中学校、1クラス30人から40人くらいのなかにも、集中力を欠く子供、多動症の子供なども増えてきており、一斉指導の限界を超えて、先生方は疲れ切っている。このような業務の負担を軽減するために、何ができるだろうか。部活動の外部人材利用も一つあると思うが、高校レベルになると、これは非常に難しい問題だ。簡単に、近所の人をお願いというわけにもいかない。どこに頼むにしても難しいのは平日の午後で、仮に時間的適任の方がみつかったとしても、生徒とうまくいくかどうかはまた別問題だ。さらに一時的に解決しても、指導者の交代を巡って同じ問題にぶつかる。ほかには業務内容を見極めて、教員が本来やるべき仕事と事務員に任せる仕事を分けることも大事だ。学校行事の運営を外部に委託する方法もある。また、労働に対して、然るべき報酬をとという面もあるが、これは、各学校の財政状態にもより難しいことだ。宿泊を伴う業務や休日出勤などはきちんと合理的に処理することが必要だ。また、部活動の部費の会計処理などは金銭的な事故が起きやすい場面でもあるから、先生たちが手放したほうがよい業務だと思う。

先生方の負担を重くするものにカリキュラムの変更もある。教育現場では、絶えず改革が行われているが、教育内容が増えたり、入試が変化したり、教員に求められる能力も多様化している。それらはすべて、多忙化につながる。教職員は絶えず、変化を求められ続ける。時代を先取りして、若者たちに示さなければならない職業だから、仕方がないことではあるが、負担は重くなるばかりだ。アクティブラーニングや探求的な学び、学校でシラバスを作り、独自の問題集を作るなど、いろいろな取り組みがあるが、一度にいろいろなことはできない。子供たちに対して、座学で、マンツーマンで教えるという基本的な部分を忘れ、新しい手法ばかり取り入れることが本当に正しいのかということをしきりと検証していく必要がある。たとえば今、情報という教科があるが、多くの学校は週に2回の授業をしているだろう。しかし、同じ日に2コマ続けて行えば、専門の方を呼んで、細かく丁寧な授業をすることもできる。そのように創意工夫しながらカリキュラムを作っていくことが大きく学校を変えていくのではないだろうか。そのカリキュラムのなかに部活動も組みこめるかもしれない。総合的に工夫していく必要がある。

また、同時に教科編成は複雑化されている。たとえば、情報という教科について、実は、学習指導要領で示された内容はわれわれが想像した以上の難易度だ。他の教科のついでに取ったというような先生には務まらないような複雑で難しい授業が求められる。きちんと検証し直さないと内容が陳腐化してしまう可能性がある。そういった意味で、学校間の格差はカリキュラムをどうマネジメントするかによってかなり大きく広がる。そのなかに、部活動の外部委託や、ワークショップを開く、講習会に参加するなどの活動が含まれ、外部委託が増えれば、金額的にもかなり増えるだろうと言われている。

だから、国や都道府県はもっとお金を出して欲しい。日本は教育への公的支出が低く、現場の教員に任せきりな部分が多い。現場の教員が滅私奉公で頑張ってきたから今の日本がある。今後、私たちの国が輝きを失わないためには次代を担う子供たちの前に、私たちが微笑みを持って立てるような環境を作ることが大事だ。その第一歩がカリキュラムマネジメントだと考えている。かつてはそれぞれの私学が建学の精神を持ち、1つ1つの学校が独立してやってきた。しかし、今の時代は学校同士がネットワークを組んで進んでいかなければ、創造的な教育はできない。個の独立、群の創造ということで、私学に勤務する私たちのネットワークを全国に広げていくことが大切だ。教育現場は大変な状況にあるが、明日の子供たちのためにもともに手を携え、分かち合いながら共に進んでいきたい。

〔佐々木陽平〕

工藤理事長の話にも出たが、部活大好き教員 **BDK** という言葉があり、SNSなどで叩かれている。しかし、真剣に部活動に取り組んで、学校全体に影響を与えられるような活動ができればそれは悪いことではない。そのためには練習時間や費用の問題もあるが、生徒、保護者、教員など、そこに関わるステークホルダーの方の満足度が上がるのが大事だ。本校は各学年80名から90名程度でスポーツ特待の制度はない。学生は勉強と部活を両立するものという考えのもと、部活動の練習は週3回。練習時間は11月から2月までは60分間、



それ以外は 90 分間と学校のルールがある。また、宿泊を伴う活動は年間 1 回のみで、夏合宿が唯一の宿泊活動だ。高校は年間 100 回程度、中学は 80 回程度の練習回数のなかで満足度も上げながら結果も追求していく。そのためには「なんとなく」を徹底的に排除することと、自主性、主体性を重視するという意識した活動を行う必要がある。これが実現できればステークホルダーの方にも満足していただけるだろうと考えている。「なんとなく」を徹底的に排除するについて説明すると、たとえばアップの時間、練習前のアップだけで 1 時間ということはよくあるが、本校でそれをやると、アップだけで終了してしまう。だから、本校ではダッシュやフィットネスの時間をなくし、グラウンドにダッシュで集合するというで代えている。また、話し合う時間も特別には取らず、給水の時間を使っている。ラグビーはプレー中に 90 秒から 120 秒切れることが多いのでこの給水の 1 分半から 2 分の短い時間でいかに課題を抽出し、改善のための話し合いができるかを大事にしている。また、練習時間も、なんとなくの 60 分間より、しっかりと全員で意思統一してからの 50 分間のほうが効率がよいと考え、練習前に、今日の課題や目標を明確にしてから取り組む。1 個 1 個のパスに 110%で取り組むか、70%で取り組むかでは大きな違いがある。時間の限られたチームとして 1 個 1 個真剣に取り組んで結果につなげていけるようにしている。

自主性、主体性を重視するについて説明すると、自主性は決められたテーマに対して自分から取り組めること、主体性は何もないところから何かプラスアルファできることと考えている。そこに強制、しつけ、仕込みというものが少し加えられる。この仕組みを学校で考えてみると、強制、しつけ、仕込みの部分が授業にあてはまり、自主性は出されたものをパーフェクトにこなすということで、宿題にあてはまる。主体性はたとえば 30 分かかる宿題を 20 分で終わらせ、残りの 10 分で、自分の得意科目を伸ばす、苦手科目に取り組むなど、何かプラスアルファすることと考えている。これをラグビーに照らし合わせると、強制、しつけ、仕込みの部分が鍛錬、自主性は自分たちで決めたことをきちんとやるということで整理整頓やあいさつのルールを決め徹底して実行している。主体性にあてはまるのは主体練やトーク&フィックスという 2 分間の話し合いだ。主体練というのは自分たちの練習や試合の映像を見ながら、課題や目標を自分たちでみつけ、取り組む練習のことだ。たとえば、「10 メートル 3 秒で走りましょう」という課題に対して、練習メニューを考え、3 秒を目指すというように各自がテーマを持って、目標の値を具体的に設定して取り組む。あくまでも主体練なので私はあまり口出しをしないから、効果的な練習ができていないときもある。しかし、うまくいったときにはチーム力がぐんと上がるという実感がある。トーク&フィックスは自分たちで課題をみつけ改善するための話し合いだ。日常的にやっているため、大会のときもハーフタイムにコーチ陣が指示を与えることはない。花園でもこのようなチームは私たちだけであり、選手たちもそこにプライドを持っている。この非常に緊張感のあるハーフタイムは彼らの人生において、とても貴重な経験になると考えている。トーク&フィックスは全国の大学でアクティブラーニングの指導をしている方に指導していただいた。元々、ラグビーをやっていた方なので、円陣にコミットしていただき、課題の抽出の仕方と結論の導き方についてアドバイスをいただいた。IPA メソッドという手法でラグビーとは関係ない様々な課題に対しても、90 秒間で答えを出すというトレーニングをした。これを普段の練習から取り入れているため、試合中も自分たちでリカバリーすることができるようになった。本校の練習はゲームが主体だ。これが正しいというわけではないが、私たちはこれがよいと信じてやっている。たとえば、日本ではストラクチャーといって、ここを走って、ここからパスして、ここからキックしようというようなメニューが提示され、その通りに練習する方法が主流である。しかし、海外では基本的にデシジョンメイクの練習が多く、ゲームに近い要素があり、常に判断を迫られる。海外の選手と一緒に練習すると、日本人はサササッと後ろに並んでほかの選手の様子を見てからやるという姿が多く見られる。これは本当にまずいと思い、普段の練習からなるべく彼らが判断し、現場でどう感じるかを大切にしようと考えようになった。それが、トーク&フィックスを取り入れるきっかけとなった。その後、数々の試合で成果を発揮することができ、生徒たちは本当にクレバーだなと感心している。私はすべての練習に介入しているわけではなく、生徒たちに任せている部分も多いのだが、試合では私が指導して彼らの動きをコントロールしているように見える場面もあるかもしれない。しかし、実際は皆で研究し、一番の形を追求し



た結果なのだ。部活動サミットという企画では、クラウドファンディングで120万円を集め、全国で結果を出しているいろいろな種目のチームを招待し、新しく知識を吸収するという取り組みもした。その結果、チームはさらに成長した。今年度も3年ぶりに部活動サミットを行う。今回は生徒が為末大氏にアポをとって交渉し、スピーカーで来ていただくことが決まった。為末氏は2回銅メダルを獲得しているが、2回目のときは週3回の練習だったそうなので、個人競技でもそれが可能なのだというところではいろいろなお話を伺えればと期待している。このように、多くの経験を通して成長してきた生徒たちの姿を見て、ステークホルダーである保護者も試合の勝ち負けだけではなく、生徒の自主性や主体性などにも満足している。生徒たちがいろいろと研究しながら戦術を練り、成長してきた経験は卒業後もあらゆる場面で役に立つと思う。われわれの部訓は「成し遂げる」であり、チームのスローガンは「円陣が肝であり思考の質で勝つ」だ。「大きなフォワードで前進する」「足の速いバックスで切り裂いていく」などではなく「思考の質で勝つ」というチームはほかにはないので、花園に少し風を吹かせられるかなと思っている。風を吹かすと言えば、実は「くるくるモール」という生徒たちが考えたプレーを花園で実際に使い、注目された。スクラムみたいにかたまって押すものの変則形なのだが、私達スタッフも知らされていなかった。レフリーにだけは事前に相談し、反則でないことを確認したようだが、試合中にトーク&フィックスしながら、いつこの技を出すか相談し、勝負所で使って、格上のチームに勝った。このとき私は彼らの成長を誇らしく、頼もしく思った。また、本校は国際交流が盛んで、各国のエリート校と交流してきた。エリート校というのはだいたい、年間を通して、全員、いくつかのスポーツをやっている。タイのバジラウドカレッジではラグビー、バスケ、サッカー、陸上を3か月スパンで行っていて、ラグビーは全国優勝レベルの強さを持ち、本校は交流戦で負けてしまった。さらに、音楽や絵画、プログラミングの授業も充実しており、美しい4部混声合唱を披露してくれたこともあった。海外と交流すると、必ず、「君は何の楽器ができるの」、「ほかには何のスポーツをやるの」、「この季節は何をやるの」などと聞かれる。日本でも部活動以外のいろいろなことが高いレベルできるような生徒を育てていかなければいけないと感じた。そもそも、海外のエリート校が何のためにラグビーをするかと言うとエリートスポーツだからだ。ジェントルマンとして当たり前だからという返事が返ってくる。大会の優勝を目指すとかではない。静岡聖光学院の生徒がシード校に勝つためにラグビーをしていることも大切なことではあるが、それだけではいけないということを強く感じる。海外との交流を通して、何のためにラグビーをするのかについて、私も子供たちも真剣に考え、ビジョンとミッションを明確に持つようになった。ビジョンとしては試合で勝ちを追求するという、そのなかにも学びは多くあると思う。併せて、彼らの判断と決断を奪わないということを大事にしている。もちろんラグビーの原理原則は指導するが、細かい戦術を指示したりはしない。彼らがどんなチャレンジをするのかいつも楽しみにしている。「なんとかなるさ」ではなく、自分たちの強み弱みを理解し相手とどう戦うか、どうすれば勝てるか、ロジックを作って真剣に向き合うことが重要だ。このような経験はたとえ試合で負けたとしても、彼らの人生のなかで、必ず役に立つだろう。もう1つ大切なことはゴール設定だ。ゴールは具体的な数字があればさらによく、ワクワクする内容かということも大事だ。また、勝利よりモラルビクトリーを目指すことを大事にしており、本校の掲げる「世の地の塩、光となる人材育成」はすべての部活動の根底にある目標である。私は今、部活動改革ということで、中学の部活動のすべてを統括できるようなスポーツ&カルチャークラブを作ろうとしている。ラグビー部、サッカー部、バスケット部、ミニ四駆部、ドローン部などの部活動を統括し、地元のプロチームなどと業務提携したいと考えている。現役の選手から得られるものはたくさんあるし、国際交流にもなる。すでにプロのコーチに来ていただいている部活動もある。それを統括する方に加わってもらい、すべての部活の練習量の調整などに関わってもらい、統括してもらおうと考えている。現在は、費用を集めたり、チームごとのスポンサーを探したりなどを、子供たちと一緒に考えている。本校のビジョン、ミッションに共感してくれる外部の方とそれを理解してくれる教員などと一緒に今年度中にその形を作りたい。一番大切なのは部活動をともに支えるステークホルダーの存在だ。本当にみんなが幸せな状況を作っていかなければ、これからの部活動は難しいと考えている。

## 「学校での働き方改革のネックと滝教育研究所」

学校法人滝学園 学園長  
**中島政彦**

### 1) 初めに

私学の働き方改革の大きな壁となるのが、次の2つである。

- ① 私学は、労働基準法に従わなければならない。
- ② 勤務時間外労働、特に休日のクラブ活動の位置づけの明確化。

- ① については、教育活動そのものは私学であろうと公立であろうと、特に中等教育では学習指導要領があり公私にかかわらずそのカリキュラムは基本的には同じと考えられる。そのとき設置者の違いで、働くものが従わなければならない法律が異なる。しかも、従わなければならない法律が教育労働以外を基準にして作られるため私学の教育活動の実態に合っていないところが大きい問題である。(公立には給特法という公立用の法律が存在していることこそがその証左である。公立でもその給特法の見直しが喫緊の課題となっている。)
- ② については、教育活動における勤務時間外労働は私立公立にかかわらずこれから解決しなければならない問題であり、特に部活動に対する認識を伝統的な考えを残しつつ「どう新しくする」かが問題である。

今回の滝学園の取り組みを通じて世間に一石を投じたかたちになり、学内の教職員の働き方も労働基準法の枠内で一定程度改善されたと思っている。ただ、残念ながら今回の発表がこの2つの問題の完全な根本的解決にはなっていない。

### 2) 本学園の働き方はどうであったか

平成29年3月の労働基準監督署のヒアリングを受けて、働き方=教育のあり様を労働基準法に合うように就業規則等の変更や組合との取り決めの見直しをした。今まで、あいまいになっていた特に給与(調整手当Ⅱ)や休暇等の部分については、かなり明確になり、教職員の権利意識は高まっていった。一方、少なからずの経験年数の多い教職員の中には、特に、勤務時間外の活動には手当や代休の問題がツネに付随するため「金のためにしていると思われたくない」という考えが生徒のためを思った活動を自粛することもおきてきた。その意味では教職員生活が長い世代ほど勤務時間外労働の多くを「調整手当Ⅱの8%」で対応していた時代の方が教育活動に「自由」があったような気がしているとよく言われる。彼らにとっては「働き方改革はできたが、働き甲斐改革は後退した」ということかもしれない。

### 3) 働き方改革をどう導入したか

本学園の組合組織率は90%を超えている。学校の歴史としても「大正リベラリズムの薫りがする」といわれるように教職員も生徒も自由な空気の中で活動を行ってきた。今回の働き方改革の必要性がいわば「外圧」として降りてきたとき、それに抵抗する動きもある程度予想されたが、時の組合執行部の判断で「労働基準法」の学習会を持ち、基本的なことから理解を深めていった。そのうえで法律上、現在の勤務のあり方を変える必要があるという姿勢に組合自身が立った。このことには組合組織に感謝しなければならない。



#### 4) 労働基準局の指摘の改善から

平成 29 年 3 月 28 日の労働基準監督署のヒヤリングで次の 5 点にわたって早急な是正が要求された。

- ① 早期に 36 協定を結ぶ
- ② 労働時間の管理方法の見直し
- ③ 廿日会（組合）費の給料天引きの労使協定締結
- ④ 職員健診結果での医療機関の受診報告
- ⑤ 労働条件の書面での交付

この 5 点で、特に 36 協定についてはただちに締結することを指示された。

③～⑤については事務的な面が強く早急に改善が可能であった。②については、印鑑の時代からパソコンでの管理に移行の時であったのでスムーズに移行ができた。これについては、パソコンでの打ち込みの時間の省略と正確性を考えその後すぐにカードタッチの管理に移行している。

問題の 36 協定については、1 日の勤務時間を、教員・職員・契約職員・用務員等々様々な仕事が存在する中ですべてを同じすることは現実的ではない。教員だけをとっても、行事の時期、入試の時期などは 1 日 8 時間を超える労働になることは少なからずある。そこでとったのが、年間変形時間労働制である。しかも各種の業務ごとの年間勤務表を作ることにした。現在 5 種類の勤務表が存在している。

36 協定が結ばれば、いままで調整手当Ⅱのなかに包括されていた「残業手当」が勤務時間外労働として、労基法の基準で支払われることになる。理屈の上から言えば、わが学園の調整手当Ⅱ（本俸の 8%）は給与から除いてもよいことになる。しかし、どの教職員にも新たに「残業」が生じ、前と相当の給与が払われる保証はない。「急激な給与のダウン」を禁ずる点からも、次のような処置とした。①調整手当Ⅱは一律 6%する。これらは学校行事や入試業務など教職員全員が勤務時間を超えるばあいの手当てと相殺する②減額した調整手当Ⅱの 2%分を、個人の勤務時間外労働の手当ての原資にする。

平成 29 年 3 月の労働基準監督署の指示のすべてに対して対応をし、労基署にも報告し一応この問題は解決したと考えた。ところが、実際に運用を始めるようになると、大きな問題があることが分かった。学校休業日の部活動である。時間制限をしたものの、学校休業日の活動は業務と考えるならば、明らかに勤務時間外のものになる。公式試合などの時間を考えると 1 日で 8 時間を超えることも考えられる。これを労基法の基準に従って手当てを払うことはほとんど不可能に近い。この問題の解決には滝教育研究所の力をかりることになる。

#### 5) 滝教育研究所について

90 周年を迎える 2 年ほど前に、「あと 10 数年後にはエポックである 100 周年が控えている。どう 100 周年を迎えるか」を考える会を作ろうという機運が起こり、若手を中心にして数次にわたる「NEXT10」という会が開かれた。回を重ねる中で、あるベテランの教員が「昔は通う生徒も務める先生も学校に近く、英語や数学は学校が終わってから先生の自宅で勉強を教えてもらった。当時それは名前のごとく「家庭補習」として滝の教育の中で一定の教育効果を（面倒見のよい）をはたしていた」。という報告をされたとき、参加していた若手の教員たちから自分たちもやってみたいという意見が出た。

しばらくして、当時の高校 3 年生の優秀な生徒が集まり教えあうことを学校の自習室を利用して始めるが、当時の下校時間は 18 時で勉強の途中にやめなければならない状況であった。そこで彼らは公共の施設の利用を考えて午後 21 時まで勉強を続けることを続ける。その取り組みの結果だけではないと思われるが、そこに参加した多くの生徒は自分の希望する難関大学に合格していった。その話は当然後輩にも伝わり、後輩たちも同様な取り組みをおこなおうとするが、先輩たちが借りていた公共の施設は使えなかった。彼らは仕方なく平日は下校時間まで、学校休業日は学校を利用してやろうと考え、時の学年の先生たちに相談し、何人かの先生は休日に学校のカギを開けることを了承してくれた。やりたい生徒がいて、面倒を見ていい先生がいて、やれる場所もあるこれだけそろえばこの企画は遂行できるはずだが、学校というところは、あるいは、滝学園はそれ

を認めなかった。理由は「今年がいいが来年面倒を見てくれる先生がいなかったらどうする。」であった。

この2つのことを契機に、教員の勤務時間外かつ生徒の下校時間以降に学校の傘の下でない場所で教員と生徒が、また生徒同士で切磋琢磨できる場所を作る必要を感じた。そうして作ったのが滝教育研究所である。

「滝教育研究所」の設立趣旨として、「滝学園が100周年を迎えるまでの教育環境は大きく変化し、求められる人間像（国際性・教養・多様性・タフネス）が変化する。これらの要請に応えるために学校の枠を越えたフィールドが必要と考えて滝教育研究所（滝学園江南駅前キャンパス）を設立する」と決めた。そして滝教育研究所の活動の活動内容は以下ようになった。

・講座部門

中学3年～高校1年 研究所設定講座（基礎）  
高校生 教員が講座設定（新入試対応など）  
⇐生徒が希望受講

・クラブ活動部門

学校休業日のクラブ活動を担う

・公開講演部門

地域に開かれた講演

働き方改革で最後に残った休日の活動の扱いの解決を滝教育研究所のクラブ部門が担うことになる。具体的な運営の内容の抜粋は次のようである。

- ・業務時間内クラブ活動を A 活動、業務時間外活動を B 活動と明確に分ける
- ・A 活動は業務として顧問を決定
- ・B 活動を行うクラブ顧問は研究所と業務委託
- ・生徒は滝研登録（登録費は学期ごとで 2,000 円）  
＜参考＞PTA 会費年間 9,600 円⇒年間 3,000 円
- ・活動費はそれぞれクラブで徴収
- ・生徒けが対応：スポーツ振興センター
- ・業務災害補償保険に加入

〈その他〉

- ・土・日、長期休暇中等の休日の顧問のクラブ指導は学校の業務とはせず、この任意の活動に同意する顧問が滝教育研究所と業務委託契約して活動する。
- ・土・日、長期休暇中等の休日に活動するクラブの生徒は滝教育研究所に登録して、顧問の手当・交通費や大会参加費等を負担する。（従来 PTA 会費を充当していたが、その PTA 会費は年間 6,600 円を減額）
- ・練習時間の減少（⇒顧問・生徒の工夫⇒試合の結果悪くない）

6) 最後に

部活動には教育的意義が存在することを教職員も保護者も生徒も一種「真理」のように考えている側面がある。この価値観を変えることは容易ではないし、全面的にこの価値観を否定する必要もない。

部活を通じて（しか）人間形成ができると考える教師の存在

部活を通じて子供たちが成長できると考える保護者の存在

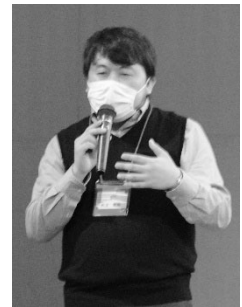
は、いままでも、そしてこれからも確かに存在する。部活動にどうかかわるかを決定するのは生徒保護者であり、部活指導をするかどうかを決定するのは教員である。生徒にも・保護者にも・教員にも選択できる部活動の環境整備が今求められている。

法人管理事務運営部会・法人管理事務運営分科会 講演

## 「データ活用と対話を通じた、持続可能な職場づくり」

帝京大学教職大学院 専任講師  
町 支 大 祐

持続可能な職場づくりを考えたときに、いわゆる働き方改革と言えると思うが、各々の学校はどうだろうか。天気为例えて、うまくいっているのが快晴、うまくいっていないのを大雨だとした場合にどれになるだろうか。快晴、晴れがいくつかあり、くもりと雨と大雨がすごく多いだろう。私がいろいろな自治体や学校で話をしている、大変うまくいっている学校は少数だ。やはりどこも苦労されている。おそらくここ数年の間に変えられるところは少しずつ変えて、今はこれ以上何が変えられるだろうという踊り場の段階になっているところが多かったり、一方で、全然変わっていないところもあれば、コロナ禍で逆行しているようなこともあったりして、なかなか進めることが難しい現状だと思う。最初に、なぜこれがとても難しいのかを考えたい。



3年前の調査結果のデータでは残業を減らすことに罪悪感やためらいを覚える人が4割弱いた。企業ではあまり見られないことだ。企業での残業は臨時物だが、教員は臨時物とは思わず、残業を減らすことに罪悪感を抱く人がいる。これは学校の先生の特徴だろう。子供のために手厚く関わる教師こそ良い教師ではないかという考え方を献身的教師と言うが、生徒のためにできるだけ手厚く関わろうとすることは教師として当然と言えば当然だ。しかし、これを読み替えて、そのためにできるだけ時間をかけるのが良い教師だと思ってしまうと働き方改革が難しくなる。とはいえ、あと少し時間をかければいろいろなことできると思うと、どうしても残りたくなるのが教員の性だ。残業を減らすということは残ればやれることをやらないわけだから、そこで罪悪感やためらいを覚える人は一定数いて、この方々とどうやって向き合うかが非常に難しい。また、やることを削ってよいのかという迷いも見える。特に私学の場合は進学実績や受験生確保のための活動や実績を上げることと結び付けて考えるとやめてしまって大丈夫かという迷いも絶対にあるわけだ。ここがまず難しいところである。

2つ目に全体として働き方改革を進めることや業務を削減することには総論では賛成なのだが、各論で反対が起こる。小学校や中学校で話をすると、合唱コンクールなどが例にあがる。合唱コンクールが学級づくりの根幹だと思っている人もいれば、なくていいのではないかと思う人もいる。後者は、合唱コンクールを削ることは働き方改革につながるし、すごくよいと思っている。その一方で、クラスづくりの肝だと思っている人にとっては、働き方改革はよいし業務を減らすのも全体的には賛成な部分があるが、そこだけは外されると困ると思うわけだ。この話に近いところで、部活動でも同様のことが起きることがある。その先生が思う教育の姿やあるべき学校の姿があるため、そこに関する対話をしなくてはいけなくなると、どうしても罅が明かなくなってしまうがちで、そうなることを見越すとあまり踏み込めないということもある。もう1つは働き方改革もあるから早く帰ろうとなると、やりがいやストレス、学校への愛着など、いろいろな部分が悪くなっていくということがある。早く帰ったほうがいいし、煩雑さはなくしたほうがいい。しかし、それが教員のモチベーションや、辞めたいという気持ちに悪影響を与えるとしたら、どうすればいいのか。それを踏まえて、どうしていくのか。こういうモヤモヤがある中でも間違いなく進めなければいけない。労働基準法には従わなければならない、また、間違えば若い人が入ってこなくなるからだ。

私が働いている教職大学院では半分は経験 10 年程度の現職の先生で、公立の先生も私学の先生もいる。もう半分は学部から卒業してきた生徒が来るが、学部から来た生徒と話をする、どうやったら定時に帰れるかをみんなで考えたいと言う。学部でも授業を持っているが、教育実習から帰ってきて最初に言うのは、ブラックだったということだ。その見方が正しいかどうか、その見方をこちらがどうやって問い掛けほぐしていくかということはもちろんあるが、現状として、少なくとも学生はそう見てしまっている。学生は学校をブラックかどうかで見ているし、ブラック寄りに見てしまうような状態になっている。そのため、教育実習に行っても、教職課程を途中で辞めてしまい、免許を取る人数が減っている。これは公私問わず、この業界として、教員になりたい子供が増えるようなことをしないと厳しいと思う。

今、ICT や探求行動、そして受験もいろいろと変わっている。一方、教員の学びの時間が取れていない現状を踏まえると、やはり働き方改革をやらなければいけないことは間違いない。しかし、結局どうすればいいのか。何をすれば働き方が変わるのだろうか。最初に確認しておかなければならないのは、「これをすれば働き方が変わります」といった魔法の杖はない。何かを変えたら、ずっと時間が減り、何かを変えたら働く職場の雰囲気が変わって、いきなりよくなるといったことはない。覚悟をしなければいけないのは、働き方改革はマラソンだということだ。じわじわと長い時間をかけて、徐々によくなることを前提にしなければならない。継続的に取り組んでいき、じわじわと変わっていくことを目指す。そのため、これは変わりそうだというすごいものを探すことをやめ、もう少し身近にありそうで見えていなかったところに目を向けてみたい。

1 つ目である。働き方改革とは何を改善することなのか。もちろん働き方を変えることが大事だが、働き方を変えるにはたとえばキャップ系、カット系、効率化系の 3 タイプがあると言われている。キャップとは強制的にふたをすること。最初から、水曜日は定時に帰る、この日は部活動はなしにするといったことを無理やりやれば、時間を確保することだけはもしかすると解決できるかもしれない。しかし、これだけをやっていると大変なのは当然だ。カット系は、何かをやめること。アウトソーシングを活用するなど、何かをやめるというパターンである。そして効率化系では業務をどうにかして効率化する、無駄を省いて効率化していくということだ。実は、もう 1 つ考えなければいけないことある。働き方改革は、抜け道探しが始まって、こういうことをやろうと約束したのにだんだんやらなくなるということがある。たとえば第 3 水曜日は定時退勤をすると決めてもどうしても帰れない日が絶対にある。「生徒指導があるので 3 学年は今日、帰れません」ということが起こる。そして、最初は、「どうしても理由があるから帰れません」だったことが、「なんとなく大変だから帰らない」、いつの間にか、「定時退勤って何の話だったっけ」、そもそも定時退勤さえ最近では設定されないとだんだんうやむやになっていく。あとは、これは ICT 関係もそうだが、「こういうものはここに入れときましょう」と約束して会議でも通したが、やらない。システムとしてはよいものが入っているが、使わない。「こういう考えでいきましょう」と号令はかかるが、なかなか動かない、実際の行動が伴わないといったことがある。こういうものを入れる、こういう方法を使う、こういうことを大切にするというのも、もちろん大事だが、その根にある意識や集団的な雰囲気が変わってこないと動かない。働き方の評価モデルにやり方とマインドと書いてある。要はやり方だけ変えてもマインドが変わっていないとだんだん使わなくなるし、元に戻ってしまう。働き方には慣性があると言われていて、どうしても元に戻りたがる傾向があるので、深いところから変えていかないとなかなか変わらない。そのために働き方そのものにアプローチすること、先ほど例に挙げた 3 タイプに加えて、働き方の意識や雰囲気、その集団としての雰囲気にアプローチしていくことを考えていかないと、実質的な変化につながりにくいところがある。大人が大人の意識にアプローチすることは結構難しいと思うが、できること

はある。その前提として、考えなければいけないことは自分の学校で働き方改革をしなければいけない理由を進める側の人で語れるかどうかだ。労働基準法というどうしようもない絶対的な理由はある。しかし、労働基準法があれば他の先生が動くのかということ動かない。自分の学校でどうしてもそれをしたいという理由があるのかどうか。労働基準法があるためにやらなければならないというほうに意識がいき、働き方改革にあまり目がいかないことがある。自分自身の学校で働き方改革を進める理由は何だろうか。自分の学校が働き方改革を進める理由を語るとしたらどうなるのか。たとえば、学校の中核にいるミドル世代で帰りが遅い人に、なぜうちの学校で働き方を改革するのかと聞かれたらどのように答えるかを想定してみたい。もしかすると、こういう理由だと話した人もいれば、あまり考えてみたことがなかったという人もいると思う。

とにかく法律があるから駄目なのではないかというところがあるかと思うが、それだけで動かない人がいるときには別のストーリーが必要になるだろう。何となくやらなければいけない空気はありつつも、なかなか動きが出ない。何かをきっかけに動き出したいが、そのきっかけ作りが難しいというときに、このようなこと考えてみると少し動いていくのではないかというものを3つ紹介したい。

1つは、理想の1日ワークショップをやること。24時間を絵にして、自分の理想の働き方をみんなで集まって書いてもらう。何時に起きて、何時に学校に来て、何時に仕事を終えて、のような理想の1日を考え、互いに共有する。そうすると、このようなことができたらいという希望が出てくる。もう少し映画が見たいとか、野球を見に行きたい、場合によっては仕事をしたいという人も出てくる。その人に気付いてもらいたいのはみんながそのように仕事をしたいと思っているわけではないということだ。あとは、学校にいたことが大変好きで、昔の価値観で進めたい人はこの取り組みをしていると心がすごく苦しい。どこかで、昔のままでいいのではないかと思ったりする。きっかけとなった事例が1つある。この取り組みをしていて、ある学校に教師としても親としても自分が中途半端な気がすると言った先生がいた。その方はこの仕事は帰りが遅くなるものだと言っている。しかし、自分の子供はもっと親と一緒にいたいと思っていることを考えたときに、このままでよいのだろうかと言っていた。それを聞いたときに私も妻も折り返いはつけているが、子供たちは「パパとママともっと一緒にいたい」と絶対に思っていると思うし、私たち親も同じだ。そう考えるとこのままでよいのかと思った。そういうことに他者の言葉で気付けることがあるので、このようなピュアな話をするのも1つのきっかけになる場合があったりする。また、個人の中で「これはよかったな」という仕事術がある。そのようなことを語れる場や見せられるものがあることが大事だ。個人の工夫が個人のままに落ちているのではなく、個人の工夫でどうなったかを語るができる場があるかどうか。つまり、その工夫は個人の中だけにあるのか、組織に共有されるのが大事どころだ。組織の話だけではなく、個人の取り組みも共有できるようになっているほうがよい。たとえば、職員室のホワイトボードなど、みんなが見えるところに個人の工夫や思っていることを共有できるボードを作ると「私もやってみようかな」とか、「私も書いてみようかな」という意識が生まれるかもしれない。こうなればよいという雰囲気を統一するためにできることの1つだ。先ほど、雰囲気や意識にアプローチすることについて、具体的にできることがあると話した。皆さんの学校で、意識・マインドを変えるために、何かやっていることや、やってみる余地がありそうだと感じるものがあれば、話してほしい。具体的に何かすることはすごく難しいが、大事なことは意識や雰囲気に関わっていかないとどんなものを入れてもうまくいかない部分があるということだ。それを前提にいろいろなことを考えるとよい。ポイントの2つ目も意識や雰囲気にすごく着目した取り組みである。単に働き方改革ということだけではなく、職場づくりといったイメージで捉えてほしい。よりよく生きられる職場を考えるヒントになる



話かもしれない。

働き方をよりよくするために何かをする。先ほどの3つのキャップ、カット、効率化などで事例や知見はかなり出てきている。これだけでもし変わるのであればすでに変わっているだろう。しかし、それを聞いてだけで進まないのであれば手前を考えなければいけない。たとえば、留守電を入れることをどうやって進めるか。「こういうふうにしろ」と上から指令が降ってきたとしても教職員の方々にとってはやらされている手法であり、意識やマインドが伴わない。しかし、働き方は変えなければならない。手法を変えたおかげで、要する時間は減ってはいるが、雰囲気が悪くなっている。このような結果になってしまうこともある。理想は多くの教職員が自分事として腹落ちするような働き方改革だ。その分け目となるのは上が決めて指令として下ろすか否かだ。what aboutと言ったりするが、whatの部分の話はよく話題になる。会議をどうするか、システムをどうするか、組織の構造をどうするか、どういう役割を付けるか、どういうルールにするかということがあがるが、それをどのように決めるかに目を向けなければいけない。どのように決めて実行に移すかを考えると、それが自分事になって、やるか、やらされるかに分かれる。そのhowにこだわった取り組みを1つ紹介する。

組織開発の分野におけるサーベイフィードバックを働き方改革について行ってみた。4つのサイクルで進めていく。1つは働き方を進めてくプロジェクトチームを作る。学校でもすでに働き方改革何とか委員会というものがあるかもしれないし、ミドルの企画会などが働き方改革を進める土台になることもあると思う。その学校の事例では働き方改革に関わるキーパーソンを改めて作った。プロジェクトチームを作って、校長、副校長などプロジェクトチームのメンバーと最初にキックオフミーティングをする。これはメンバー選びが肝になる。たいていの場合、何か進めるときには分所の長なども集めてプロジェクトチームを作るが、働き方の場合はそれだとあまりうまくいかない。やり方そのものを変えることが多いのでないものをつくっていくパターンが多い。すると、いわゆる分所の長が集まって考えるよりも、この人がいると何かが動くとか、この人のイメージが変わったら他の人もついてくるというような学校の中で影響力がある人を入れていかないと形だけになってしまってもなかなか動かない。こういうプロジェクトチームを作ったというものがある。学校の中でアンケート調査を行い、その結果をグラフにする。そして全教員の会議などで結果を持ち寄る。そのデータを見て、まず学校の組織や職場がどうなっているのかを考える。在校時間は比較の対象があったほうがよい。この事例の場合は自治体で行ったので、自治体間でその学校の値と他の学校の平均を比べた。職場での意識について質問したものである。たとえば、教育の質を高めるために児童、生徒には時間や労力を惜しみなくかけていることについて、肯定的な回答をした人が何%いたかというデータがある。これも自分の学校のデータと他の学校の平均とで比較する。大事なことはこれを一斉にその場で見るということだ。このようにデータを見て職場の特徴をつかむというのがポイントの1つ目である。2つ目にそれを基にどうしていくかを考える。この対話をできるだけ全教員で行い、どのようにするかを考える。いろいろと案を出してもらいながら、何をやっていくのかはプロジェクトチームで具体的に決めて進めていく。大事なことは参画だ。決定するためのプロセスに一部でも参画していることが大事で、参画しないままにどうするかが決まってしまうと指令が上から降ってくるのと同じになる。これさえすればよくなるというわけではないが、これをやらないよりはやったほうがよい。もう1つの特徴はみんなとの対話が必要であるということ。何もなしに教員が集まって、「うちの学校の職場の特徴は何ですか」、「何をしたいといいと思いますか」という話し合いは空中戦である。みんなが思い思いに勝手なことを言って、誰かのせいにして空中戦になる。それを防ぐのはデータである。対話のスタート地点をそろえるという意味でデータを用いることは大事だ。さらに、同心円状に増やしていくということである。

先ほど、プロジェクトチームをどう作るかという話をしたが、同心円状に増やしていくとはつまり仲間を増やしていくということだ。全員で対話をしているときに各グループから1人、ファシリテーターとしてプロジェクトチームに入ってもらったり、進める人を募ったりして一緒にやっていく。そうでない場合、「みんなで話し合しましょう」と言っても、なかなか話し合いが進まないことがあるので、仲間を作りつつ増やしていくことが大事だ。

データについて疑似体験していただきたい。ダミーデータだが、極力リアルなデータに近いものがある。そのデータを見て、この学校はどんな学校だと思うだろうか。また、どんなところに働き方の課題がありそうだろうか。話し合いの実例を紹介する。この学校はしっかりと研究や学びに取り組んでいる学校だった。やりがいも感じている人が多かったが、みんながハッとしたポイントが2つあった。1つは、自分たちの学校は帰りが大変遅いと思ったこと。しかし仕事の偏りがあり、全体的な分布をみると、実は早く帰る人と帰れない人とで二極化していたこと気付いた。もう1つは時間の確保についてである。研究に力を入れているため自分の授業に参加してもらう時間は確保できている。互いの授業を見る時間、研究をする時間も確保できている。しかし一方で自分の授業の振り返りができておらず、子供の評価をする時間も取れていないことに気づき、驚愕した。自分の授業のことを考えられなければ研究しても仕方がない。多くの研究をして、自分の授業を考えられないのはむしろ本末転倒だ。これが、この学校が変わるきっかけになった。何が大事かというハッとする瞬間をみんながその場で共有する。その場でみんなが一斉にそのデータを見て、自分の学校の課題だと考えることに大変意味があり、それが動くきっかけになる。データを示しているときつらいことがある。1つは分析することである。データがあり、たとえば、「はい」と答えた人が4割という書き方をしているが、これを平均値にした瞬間に感情が動かなくなる。平均3.4と平均3.5の違いに何の違いがあるのか、それが大きいことなのか小さいことなのか分からない。分析してしまうと分析をされた結果を読む感覚になり、考えることができなくなる。もう1つ、データを出す側が答を出してしまうと、「うちの学校の組織の課題はこうです、はいはい、分かっています」と人によってはなぜそんなことを言われなければいけないのかと感じさせてしまう。答を出してしまうとみんな動かない。逆に、なぜこうなっているのか、これはどういう意味なのかという考える余地を残さないと対話にならないのだ。これは何か動きだしたり対話のきっかけになったりすることが目的であり、データによって答を出すことが目的ではない。誰かが難しい分析で答えを出すことでは組織が動くきっかけにはならない。みんなが考えるきっかけになるには余地を残し、答をシンプルに出し、同じタイミングで見ることである。データを見て、やらされ感という言葉や、本当は若い人はこう思っているのではないかという気持ちが浮かび上がってくるだろう。こうではないかと思ったことについて他の人と話してみたくはないだろうか。それは人それぞれかもしれないが、いずれにしても、データは対話のスタート地点だ。確固たる分析をして、ここが悪いから変えろという使い方をするのではなく、データを対話のスタート地点にして、みんなで考えることがこの取り組みのポイントだ。どのように視点を決めて実行に移すか。自分事にしてもらうために全員で対話をする時間を作って、それに参加してもらおう。それだけで変わるわけではないが、そのほうがみんなでやっていく連帯感が出る。その全員参加の機会を作るために、スタート地点のきっかけを作るためにデータを用いるという事例を紹介した。

今回、話したこと2つ。意識や雰囲気アプローチするために何をすればいいかという話と、スタート地点をどうやって決めるかのところでデータや対話を活用するといいいのではないかという話である。この中で何かヒントになることがあればと思う。

## 「ICT を活用した浜松学芸の働き方改革～実践と展望～」

(静岡県) 浜松学芸中学校・高等学校 教諭  
細 谷 賢 行

### 1. 本校について

浜松学芸高校は 1902 年に静岡県で 2 番目の私立学校として開学した。1990 年代後半に進学校として舵を切り、さらに 2020 年代以降には多くのコースを設置することで多様な生徒を受け入れる体制を整えてきた。この進学校化と進路の多様化は全く正反対の改革であったが、管理職からのトップダウンと現場からのボトムアップをうまく使い分け、今日までカリキュラムマネジメントを推し進めてきた。



### 2. 本校の働き方改革が後手になってきた理由

このような生徒向け改革に対しては柔軟に対応してきた本校であるが、一方で教師側の改革である校務の改善はほとんど進んでこなかった。これには大きく 2 つの原因が考えられる。

第一に本校の所属する教員や事務員、管理職の教員のもつ「自分たちよりも生徒のことを優先する」価値観である。これは教職に携わるものとして、ある意味当然の考え方であるが、それが行きすぎると、「生徒のためになるなら教師はどれだけ犠牲になってもかまわない」という雰囲気になってしまう。本校ではそこまで極端な発想にはならなかったが、「生徒のためになる」と始めた行事などが年々増大し、ゼロベースで考える機会が失われつつあった。

第二に過去の成功体験である。教員側の努力によって、本校は進学校として地域から一定の評価を得てきた。それを改革することは教員側にも非常に恐怖心が伴った。もし、改革が失敗して生徒数が減少した場合、再びその勢いを回復するのは難しい。現状である程度成功しているのに、あえて危険な橋を渡ることには多くの教職員は躊躇するだろう。

しかしながら本校でも 2024 年に新学科が始まることとなり、変わらないリスクよりも変わるリスクを取ろうという、生徒向け改革と教職員向け改革を車の両輪として走らせる必要があるという共通認識を得た。一方でリソースは限られているため、限られたツールと工夫で校務改善を目指すこととなった。

### 3. 本校の ICT 事情と、校務改善例

本校では生徒向け ICT 端末の方針として BYOD (Bring Your Own Device) を採用している。これは生徒が私物として所有しているタブレットやスマートフォンを教室でも利用する形態である。これは本校の「端末は文房具である」「生徒自身に考えさせる・選ばせることが教育」という発想が原点にある。家庭の金銭的負担が少ない、多様な選択肢が示せる、などのメリットはある反面、共通で使えるアプリが少なく、公私混同を招きやすいといったデメリットも散見される。

BYOD 方針を推進していたため、生徒向けの学習支援ツールも汎用性の高いものが選ばれることとなった。結果としてこれが「生徒向けツールを校務でも使えないか」という発想に繋がり、前述の「限られたツールと工夫で校務改善を目指す」という方針と一致した。

例えば、生徒が意見を交換するためにある掲示板機能を教員向けに開放し、そこに会議の議事録や朝の打ち合わせ内容を逐一記入することにした。これによって会議のペーパーレス化はもちろん、朝の打ち合わせ時間を大幅に短縮することに成功した。

また、教職員の勤務時間管理のためにタイムカードを採用している学校も多いと思われるが、本校ではこれも生徒向けアンケート機能を教職員向けに開くことによって解決した。緊急時の連絡用としても機能するため重宝している。

保護者からの欠席連絡や保護者向け文書の配布など、従来事務職に多大な負担を強いていた業務は ICT 化で最も恩恵を受けたと思われる。特に保護者向け文書については送信者、すなわち文責がはっきりすることで、誰がいつ、どのような文書を保護者向けに出したのかが明確になった。これらはトラブルの未然防止につながっている。

他校でも ICT 化によって情報共有やペーパーレス化などさまざまな面で校務改善に貢献している。

#### 4. ICT 化の今後

以上のように、校務を ICT 化することで多くのメリットが生まれた。特に会議時間が短縮することで、余った時間を生徒のために使えることについては教職員の満足度が高いものであった。

一方で、課題点も浮き彫りになった。まず、デジタルデータは何でもアーカイブできる。これは言い換えれば、情報をゴミ箱のように投げ込むことができる場所になり得るということである。今後、教職員側は掲載する情報を精選していく必要がある。

また、デジタル空間では「誰が言ったか」ではなく「何を言ったか」という内容がより重視される。対面の会議ではどちらかと言えば発言者が重要であった。このような意識の改革も必要であろう。

そして最も重要な点がルールとマナーの策定である。ICT ツールは便利な反面、誤った使い方や悪用が致命的な結果を生みやすい。しかし、ここでリスクを恐れて、あらゆることをルールで縛ってしまうことには一考の余地がある。例えば生徒を強い校則で縛れば、生徒は管理できるかもしれないが、生徒にしてみれば「私たちは信頼されていない」と感じるはずだ。これは教員も同じである。管理職から強いルールを押しつけられれば、信頼されていないと感じ、そのような学校に愛着を感じることは難しい。

ルールは信頼の証である。ICT という便利な道具を前にして、どのようにルールやマナーを定めるのか、これが学校を前に進める上で非常に重要なテーマであることに疑いの余地はない。

## 法人管理事務運営部会・法人管理事務運営分科会

### 「総括」

富田高等学校 校長  
米田 聡

当部会は、部会の中で法人管理事務運営と部活動運営の2つの分科会を設けて実施しました。2つの分科会とも募集人員を上回る先生方に参加頂き、厚くお礼申し上げます。

当部会は、午前中は部活動運営分科会と合同で法人管理事務運営部会として行い、一般財団法人日本私学教育研究所法人管理事務運営委員会専門委員長の工藤誠一先生に部会開会式での挨拶に引き続き、記念講演を賜りました。厚くお礼申し上げます。

工藤先生の記念講演では、これからの私学の運営について示唆を頂いた上に、兼務されている静岡聖光学院中学高等学校ラグビー部監督の佐々木陽平先生に部活動に関するお話も加えて頂き、中島政彦先生の実践発表では部活動と学校全般に関する働き方改革についてお話頂き、2つの分科会の参加された先生方にとって共に有意義な内容でした。

午後からは、2つの分科会に分かれて行いましたが、当分科会では、帝京大学教職大学院専任講師の町支大祐先生による講演と浜松学芸中学高等学校教諭の細谷賢行先生による実践発表が行われましたが、町支先生の講演は「データ活用と対話を通じた、持続可能な職場づくり」ということで、参加者同士の話し合いを含めながらの内容で先生方も積極的に参加できたのではないのでしょうか。細谷先生の実践発表は、現在、学校にどんどん取り入れられているICTを授業だけではなく、教職員の働き方にも取り入れるという、これから我々が取り組んでいかなければならない働き方改革ではないかと感じました。

初日の全体集会、2日目の当部会を通して、参加された先生方は多くの知識や情報、そして「ここからやるぞ」という改革の意欲を頭に詰め込んで、一杯一杯の状況になられたのではないかと思います。学校に戻られましたら、学校の先生方と情報の共有をして頂き、ともに学校の改善、日本の私学教育の発展に資して参りたいと思います。

来年は香川県の方で全国私学教育研究集会が開催されます。当部会の続きは、来年、さらにバージョンアップした法人管理事務運営部会が開かれることをお願いし、総括としたいと思います。



法人管理事務運営部会・部活動運営分科会 講演

## 「働き方改革時代の『部活動』を考える」

経営・組織・人材マネジメントコンサルタント

吉村 光正

私学の教育における部活動には役割があり、これは大事にしていかなければならない。ただ、法令に則っていないと万が一、コンプライアンス違反で学校名が出てしまったときに大変なことになる。コンプライアンスという言葉は直訳すると「法令遵守」だ。第二の意味として「組織のルール」も含まれている。最近では社会の世論形成も含めた大きな意味でも使われている。コンプライアンスは「守り」と思われているが、実は「攻め」だ。野球やテニスのようにコンプライアンスもラインがあって越えるとアウト、内側であればセーフだ。「なんとなくラインの手前を狙えば安心」ではなく、知識があればぎりぎりのラインを攻めることができる。



まずは時間外労働の上限規制について考える。上限は原則として月 45 時間、年 360 時間だ。時間外労働というと平日の残業時間のことで、休日労働は関係ないように思われるが、法律上は違う。法律では週 1 日を法定休日として、法定休日に働いた分は休日労働、法定外休日に働いた分は時間外労働とカウントする。1 日 8 時間勤務で週休 2 日だとしたら、1 日は法定休日、もう 1 日は法定外休日だ。これが怖いところで、法定外休日に遠征や試合に行った場合も時間外労働になってしまう。この法定外休日も合わせて、月 45 時間以内にするというのが今回の働き方改革だ。ルールを正しく知らないと、正しくカウントできない。コンプライアンスのラインがどこにあるか知ることの良い指導ができ、良い組織になることができる。

次に雇用の形態についてである。通常の契約は互いが対等であり、何を定めるのも自由だ。だが、雇用契約は当事者間が対等ではない。労働法で規制されていて、弱い立場である労働者を非常に強く保護するものである。労働者は年次有給休暇や産前産後休業、育児休業、介護休業、その他社会保険などで手厚く保障されている。逆に、何も守られていない、労働法の影響を受けていない、これが業務委託だ。業務委託は雇用契約ではなく、個人の請負事業主に対して請負契約をする。働いた時間ではなく、仕事の成果に対してお金を払う。注文主の指揮命令を受けない、事業主として仕事をする人なので、労働者としての法規制を受けない。社会保険や労災保険、最低賃金の規制もない。



注意すべきは、労働法は基本的に実態で判断するという事だ。働き方の実態から労働者であると判断されれば労働法の適用を受ける。仕事の内容を随時細かく指示されていたり、仕事の内容に変更依頼が頻繁にあったりする場合などは労働者と判断される可能性がある。部活動は顧問の先生に随時指示しない。顧問の先生に任せているということは委託できるという事だ。顧問の先生が普段していることが規則的には業務委託に近い。つまり、仕組みさえ作れば、労働法や 36 協定の規制を受けない業務委託にできるということだ。部活を委託契約する場合、作業指示はあらかじめ書面で依頼する。依頼したあとも作業の前後と途中で必要な打ち合わせをすることも認められている。業務委託では作業の完了や納品に対して委託費を払うが、部活の場合はどのように判断するのか。「いつ、どこで何をやりました」と報告書もらい、学校側が把握している事実と違わなければ支払う。時間×時給ではない、これが委託契約だ。

最後に、部活動の位置付けについてである。部活動は教育の場であり、さらには強豪校にとっては学校の



価値であり、生徒募集にも直結する。これを完全に外部委託にしてしまうとアイデンティティーが薄れてしまうことが心配だ。その場合、学校の事業のまま、指導員のみを外部委託するという形もひとつのやり方だ。外部の法人Aに部活の指導をやってほしいと業務委託契約をする。その法人Aはさらに個人事業主に対して「指導員をやってください」と再委託する。この「個人」がたまたま顧問の先生でもいいし、卒業生や地域の人が補助に入ってもよい。顧問の先生にも頑張ってもらえるし、他の

方たちも一緒にできる。この方式だと、部活動は今まで通りのスケジュールにより学校内でできる。指導員の先生及び補助の人たちは外部委託なので、働き方改革の上限規制は受けない。予め契約で決めておけば、学校設備や用具備品等についても、利用や貸与することができる。委託契約は民法上の契約だから、契約自由の原則で決めることができる。対外試合や遠征に関しても学校の部活動としての登録で大丈夫だ。学校と個人事業主の間に法人を入れることによって、労働が連続していないと見なされる。業務委託という考え方をを使うことによって、先生方の労働時間を増やさずに学校設備内で今までの部活動を続ける方法もある。

私学教育を改革される中で、コンプライアンスのルールを理解すれば、方法は無数にある。各学校のアイデンティティーは大事にして、よりよい学校をつくっていただきたい。





法人管理事務運営部会・部活動運営分科会 パネル・ディスカッション  
「私学の部活動運営の新たな可能性」

(パネリスト) 中京高等学校 副校長	田 中 信 博
(パネリスト) 岐阜女子高等学校 女子バスケットボール部総監督	安 江 満 夫
(パネリスト) 山梨学院高等学校 教頭・ハイスクールスポーツセンター長	相 馬 弘 正
(コーディネーター) 経営・組織・人材マネジメントコンサルタント	吉 村 光 正

吉村 3人のパネリストの先生方に各高校の取り組みについて話を聞く。

田中 中京高等学校は全日制に1,330人、通信制600人、合わせて約2,000人が在籍している学校だ。全国大会を目指している強化クラブが12ある。随分前に本校にも労働基準監督署の調査が入り、平成18年に36協定をはじめとした内容について整備した。教員は1年間の変形労働時間、職員は普通労働という形で勤務している。

特徴的なことが、硬式野球部を校技としていることだ。

建学の精神に基づいて学校の気運を高めていくために、

硬式野球部を校技として指定して、応援することで学校のまとまりを作っている。今回、クラブ活動の運営について勉強させていただき、組織やカリキュラムにどうやって反映させるか、資金をどのように外部から調達するのかといったことを考えていきたい。

吉村 資金についてもぜひ議論を深めていただきたい。

田中 部活動の指導を外部の個人に委託する場合には国の補助金や制度を学校法人として利用することが難しいのではないかと心配している。個人ではなく法人を設立する必要があるのか、保護者の負担を少なくするために企業の協賛を含め外部の資金を投入していくための仕組み作りを考えたい。

吉村 補助金や助成金、免税についてもあくまでも運営主体が学校法人ということであれば受け取ることができると思う。ただ要項が非常に細かく決まっているので精査が必要だ。

安江 私たちの法人は松翠学園であり、滋賀文教短期大学、岐阜第一高等学校、そして岐阜女子高等学校という3つの学校を設置している。創始者は松本富士之先生で「知育」「徳育」「体育」の調和の取れた人材の育成を目指している。

私はバスケットボール部を指導しており、部の活動の状況など話をさせていただきたい。

私が昭和51年に新卒で赴任した当時、本校にはバスケットボール部がなく、2年目に校長に直訴してバスケットボール部を作っていただいた。今でこそエアコン完備の体育館があるが、当時はグラウンドで活動して、雨が降ると廊下で練習したりしていた。当然、素人集団なので、試合をすると負ける。それでも子供たちと一緒に必死に練習していると、創部して4年目で県のベスト4に入ることができた。そのような時代を経て、今現在、全国優勝を5回、全国の決勝まで12回行った。部員30人は全員学校の寮で生活をしている。

生徒指導の中で私たちのチームが重視していることが選手のコンディションを把握することだ。我々指導者は毎日生徒を見ているが、だからこそ見えない部分がある。そこで、生徒たちに毎朝、自分のコンディションを必ずチェックさせている。具体的には睡眠時間や疲労、痛みの部分、メンタル、生理な



どの情報をスマートフォンのアプリを使い、入力させている。個人情報なのでスタッフだけが閲覧できるようにして、疲労度合いからその日の練習を考えている。

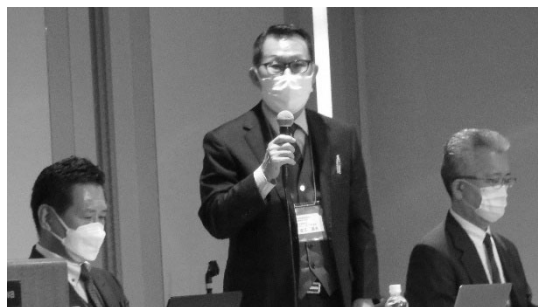
このシステムを取り入れたのは、生徒に直接確認しても「大丈夫です」となかなか認めないことが多いからだ。怪我をして選手から外されることを避けたいのだろう。しかし、無理をしたことによって数カ月休まなければいけない場合もある。外面から察することができない部分もアプリを使って把握し、生徒が出す心や身体のサインを見逃さないよう心掛けている。



最後に働き方改革を意識した部活動の在り方についてである。チームとして仕事を分担化していくことが個人に負担をかけないために重要だ。私が部活動の指導を始めたころは、学校の先生が実技を指導して、テーピングをしたり、バスの運転手をしたり、日本全国を駆け回っていた。過去にはそういう時代があったが、これからはスタッフが協力してフィジカルとケア、アナリストの部分と仕事を分化していかなければいけない。人件費の問題もあるが、選手ファーストにもつながっていくと思い活動させていただいている。

吉村 これまでの部活のやり方に新しい変化を取り入れていることは素晴らしいと感じた。

相馬 山梨学院高校は 2022 年で創立 66 年目を迎える。2017 年より「セメスター単位制高校」として新たなスタートを切った。文武両道と国際化の推進を特色に、普通科に特進コース（P・A の 2 系列）と進学コースがあり、これら 3 つの学びのフィールドを用意して生徒の夢の実現を応援している。



まず 1 つ目の柱、進学実績について、高校改革後の過去 4 年間で東大・京大 12 名、国立大医学部に 17 名が合格している。（その他、PowerPoint 資料参照）

2 つ目の柱、スポーツ振興については、運動部を育成部と強化部に分類して、スポーツを楽しみたい生徒からプロを目指すような生徒までを受け入れている（教育としての部活動が基本）これまでの戦績としては団体で全国制覇 5 回、個人は 12 名が全国の頂点に立った。

3 つ目の柱、国際化については、留学生の積極的受入れや外国人教員の増強など世界との接点を広げる取り組みを進めている。例えば、英語に力を入れている特進コース（A 系列）では、授業以外に休み時間もクラス内の公用語として日常的に英語を使用している。また、進学コースでは外国語科目として英語に加えて中国語の講座もある。

本校には、全国でも珍しい組織としてハイスクールスポーツセンターがある。今年で 14 年目になるが、現在は 11 の強化部を支援し、学校教育の一環として人間力向上と競技力向上を目指し活動している。

今年 2 年目を迎えるアシックス教育プログラムでは、スポーツメーカーと連携して質の高い部活動（未来のリーダーを育む）を目指している。現場ではフィジカルや怪我予防、栄養、主体性、海外留学など技術指導以外のサポートを通して、顧問の業務削減を図っている。

以上、進学実績、スポーツ振興、国際化で成果を出すためには教職員の働き方改革が課題となる。なかでも部活動の運営は難しく、強化部顧問の授業の持ち方、指導者の外部委託・連携、部内スタッフの分業化やシフト等を組み合わせ、部の特性を考慮しながら柔軟な対応をし、部活動運営の可能性を模索している。

具体的には、部活休業日に合わせた顧問の授業調整、平日の中抜け対応、専任顧問を核に外部コーチ

の委託、スタッフ・選手の高大連携、協会・クラブチーム・道場と連携し講師派遣や技術指導、大学生の協力等を工夫しながら教職員の働き方改革を進めている（PowerPoint 資料参照）

これまで7つの強化部について高大連携の実績があり、今年度からは陸上競技部・駅伝部を一本化した連携がスタートした。練習場所を共有しスタッフや選手の交流を通して、高大7年間で選手を育成したいと考えている。

吉村 働き方改革とクラブ活動の両立についてはどうだろうか。

相馬 強化部の特性に応じて休日の活動は業務委託者に依頼し、平日は分業や中抜け等を工夫して教職員を休ませ残業代等の手当が発生しないようにしている。勤怠管理はパソコン上で対応しているが、月に1回は必ずペーパーで活動状況を報告してもらい、ダブルチェックができるようにしている。

田中 クラブによっては顧問にクラブ手当というものがついている。給料の中に元々の残業手当が8%あり、それ以外にクラブ手当が支給されている。カリキュラムの方では強化クラブの監督には時間割のない曜日をつくり、その日を代休とすることで対応している。労基署には数十人分の時間管理表を提出し、労働時間を超えないように管理している。部活の指導時間を労働時間として明らかにすることで、「趣味のような時間なのに対価がもらえるようになった」と喜ぶ監督もいるくらいだ。



吉村 必要な手当てや先生、コーチをどうするか、働き方改革の対策など非常に参考になる話があった。各校が方向性を決めて、取り組みをされていることと思う。



## 法人管理事務運営部会・部活動運営分科会

### 「総括」

大垣日本大学高等学校 校長

古田 健二

当初、私たちが考えていた参加人数より多くの先生方にお集まり頂きました。これも今の社会の流れで、部活動の改革が求められているということだと思います。先生方が危機感を持っていろいろと取り組まなければならないという意味で多くの先生方に参加頂けたのではないのでしょうか。



当部会は法人管理事務運営分科会の先生方との合同でのプログラムから始まり、まず、聖光学院中学高等学校理事長・校長の工藤誠一先生の基調講演「変革を迫られる学校運営」が行われましたが、部活動運営分科会との合同ということで、講演の中に、工藤先生が理事長・校長を兼務されている静岡聖光学院中学高等学校の副教頭・中学校ラグビー部監督・中高統括の佐々木陽平先生から同校の部活動に関する実践のお話を加えて頂き、続いて、学校法人滝学園学園長の中島政彦先生から同学園の働き方改革として、滝教育研究所のお話を伺うことができました。その流れで、午後からは2つの分科会に分かれ、当分科会では吉村光正先生の講演、引き続き吉村先生にコーディネーターをお務め頂き、パネル・ディスカッションを行いました。パネリストの先生方につきましては、思いとすれば、岐阜県の私学は大変横のつながりがよく、例えば、岐阜女子高等学校のバスケットボール部は何度か全国制覇をしているので、全国から集まって頂けるのであれば少しくらい自慢話もできるのではないかと同校の女子バスケットボール部総監督である安江満夫先生にお願いするという流れでした。中京高等学校につきましてもどの部活動も強く、剣道などは全国レベルで頑張っており、同様に自慢話もできるのではないかと思います、副校長の田中信博先生にお願いしました。山梨学院高等学校教頭・ハイスクールスポーツセンター長の相馬 弘先生には、中部地区で開催の大会ということで、岐阜県以外の中部地区の県の先生にも参加頂こうということになったのですが、軽い気持ちで壇上に上がって下さいとお願いしたにもかかわらず、快くお引き受け頂いた上、予想以上の盛況ぶりに感謝以外の言葉が浮かびません。

今回の大会は、参加頂いた先生方にとって、有意義な会になったのではないのでしょうか。パネル・ディスカッションについては1時間という限られた時間で行いましたが、続きが聞きたいところです。

今回の内容が、先生方が学校に戻られて、部活動等に何か役立てて頂ければ有り難いと思っています。そして、ご参加頂きました先生方とのご縁が続きますことを祈念して総括とさせていただきます。

# 特色教育部会

予期せぬコロナウイルス感染拡大により、全国の多くの学校が休校となったが、各学校は「学びを止めない」ためにオンライン遠隔授業やその他工夫を行ってきた。国も GIGA スクール構想を前倒し、急速な ICT 環境整備を進め、岐阜県でも全ての生徒にタブレットの支給が行われた。しかし、遠隔授業等で活用されたものの、学校再開後に通常の授業に戻り、整備が進んでいるにもかかわらず、ICT を活用しない学校も少なくない。新学習指導要領でキーワードとなっている「探究」には ICT 活用が効果的と言われ、またそれ以外の教科・科目、部活動、学校行事、さらには校務においても ICT 活用はその効果を発揮する。ICT 環境が整った先進校で効果的に活用している事例も多い。

これからの私立学校は ICT を効果的に活用し、特色ある教育を目指すことも必要である。

当部会では、授業を展開するための効果的なツールとしての ICT 活用を講演と実践発表を通して研究し、さらにコロナ時代の「探究」についての講演を拝聴し、各校のそれぞれの特色教育を構築する一助としたい。

- 1 研究目標 ポストコロナ時代の私学の特色ある教育
- 2 会場 ホテルグランヴェール岐山 2階 カルチャーホール
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、教員
- 4 参加人員 93名
- 5 日程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16
月日	15	45	30	15	15	15	45	
10月21日 (金)	開 会 式	講演 I	実践 発表 I	実践 発表 II	昼 食	全体会	講演 II	閉 会 式

## 6 内容・日程細目

8:30	受 付 (中島 康貴・中村 充)	機材担当：中島 康貴 記録(写真)担当：中村 充 集録担当：高木 俊明
9:00	開 会 式	司会：南谷 和宏／記録：高木 俊明
	1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	特色教育部会運営委員長 横 山 豊
9:15	講 演 I	司会：田中 龍次／記録：中村 充 講師紹介：高木 俊明
10:45	演 題 「タブレット端末を活用したデータ駆動型教育への転換」 講 師 松 井 徹 岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科 准教授	

10:45	実践発表Ⅰ テーマ 「ICT×鶯谷 ～教育の当たり前を変える～」 発表者 中島康貴 鶯谷中学高等学校 教諭	司会：南谷 和宏／記録：中村 充
11:30	実践発表Ⅱ テーマ 「ICT本格導入より4年目、見えてきた生徒の学習の変化と今後の課題」 発表者 中村 充 岐阜聖徳学園高等学校 教諭	司会：田中 龍次／記録：中村 充
12:15	昼 食	
13:15	研究協議（全体会） テーマ 「各学校の特色ある教育の取り組み」 ●具体的実践例の紹介・共有 等 事前アンケート実施し、島根県の開星中学高等学校教諭の津森康介先生、愛知県の名古屋経済大学市邨高等学校教諭の中川琢雄先生、愛知県の中部大学第一高等学校教諭の村上哲也先生、東京都の学校法人聖パウロ学園入試広報部長・企画戦略室長の伊東竜先生の4名にそれぞれの特色教育について発表頂きました。	司会：田中 龍次／記録：中村 充
14:15	講演Ⅱ テーマ 「コロナ時代の『探究』の作り方」 講師 菅谷亮介 認定NPO法人 v e r y 5 0 代表理事	司会：南谷 和宏／記録：中村 充 講師紹介：高木 俊明
15:45	閉会式 1. 開式の辞 2. 総括 3. 閉会の辞	司会：田中 龍次／記録：中村 充 特色教育部会運営委員長 横山 豊
16:00	解 散	

7 講師・発表者（順不同）

松井 徹	岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科	准教授
菅谷 亮介	認定NPO法人 v e r y 5 0	代表理事
中島 康貴	鶯谷中学高等学校	教諭
中村 充	岐阜聖徳学園高等学校	教諭

8 運営委員・指導員（順不同）

委員長	横山 豊	鶯谷中学高等学校	校長
副委員長	高木 俊明	岐阜聖徳学園高等学校	校長
委員	南谷 和宏	鶯谷中学高等学校	教頭
	田中 龍次	岐阜聖徳学園高等学校	教頭
	中島 康貴	鶯谷中学高等学校	教諭
	中村 充	岐阜聖徳学園高等学校	教諭

特色教育部会 講演 I

## 「タブレット端末を活用したデータ駆動型教育への転換」

岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科 准教授  
松 井 徹

実際の現場でどのように ICT が活用されているのか。

ICT 活用を見るには 3 つの観点があり、私はそれを ICT 活用コンセプト 3C と名づけている。すなわち、「伝える」というコミュニケーションの C、「つなげる」というコネクトの C、それから「創造する」というクリエイトの C である。まず、私がこの 7 年間どのような ITC 活用をしてきたのか、ICT 活用コンセプト 3C の観点も含めて紹介する。

岐阜大学教育学部附属小学校で副校長をしていた 2015 年に、iPad100 台と MacBook 80 台を導入し、デバイスを文房具として使いこなそうと児童や先生に呼びかけた。これを修学旅行に活用した。岐阜県の小学校 6 年生はたいてい京都、奈良に行く。その時に iPad を使った。岐阜大学附属小学校の修学旅行においてタブレット PC を学習面、安全面で利用したことを大学、企業、グループに報告した。また、この年 Apple Distinguished Educator のアジアパシフィックのメンバーがシンガポールで行った institute に 1 週間ほど参加した。これがよい起点になり、他の参加者から今もさまざまな刺激を受けている。ポストコロナということで、来月には東京に集まって meet up を行う。

2 年後の 2017 年には出身中学校の校長になり、iPad 120 台と MacBook 80 台を導入した。生徒の可能性を引き出す道具として使ってみよう、授業においてはインプットの教育からアウトプットの教育への転換を考えてみようと呼びかけた。

京都で ADE のアカデミーがあり、また新たな方々との出会いがあった。この年、本社が岐阜県羽島市にある文溪堂という教材メーカーと羽島市、岐阜大学が連携して学力向上プロジェクトを行った。同時に文溪堂、岐阜大学と、白川郷のある白川村とも同じようなプロジェクトを行っている。これによって算数や国語の学力向上について論文を書いた。2019 年に定年退職をして岐阜女子大学に勤めることになった。小学校の新学習指導要領が完全実施の年で、プログラミング学習が必修になり、5 年生の算数で行うことになった。

本年度の学力・学習状況調査の算数にはプログラミングの問題が出ている。私はプログラミング的思考の育成を呼びかけている。プログラミング学習というと、プログラミング技法の習熟だと考えがちだが、小学校においては異なる。プログラミング的思考の育成が重要だ。私は「小学校算数科でのプログラミング教育の一試行」という論文を書いた。2020 年は GIGA スクール構想の 1 年前だが、白川郷学園が小学校、中学校を一貫校にした義務教育学校になった。6 年生が終わっても卒業式は行わず、9 年生のときに行う。ところが新型コロナウイルス感染症の流行によって、その卒業式ができない。しかし、やはり保護者には卒業式を見てほしいということで、白川村の教育委員会からビデオ放送か、オンライン配信はできないだろうかという相談があった。ビデオ放送だとかなり予算がかかる。オンラインで Zoom を使えば安くできるだろうと答えたところ、白川郷学園の卒業式は Zoom でライブ配信された。その際、ピンチをチャンスにということで、岐阜大学の教員と白川郷学園で Zoom の使い方の研修をした。全国的に休校だったので内容は指導できなかったが、白川郷学園は Zoom を活用した遠隔授業で翌年の 5 月の連休までにすべての授業内容を終了したそう。大学も対面授業ができず、同じ 2020 年からオンライン授業をしている。その記録は大学紀要に載せた。2021 年には GIGA スクール構想が始まった。本来は 5 年計画で中学 3 年生から小学校 1 年生と順番に





端末を整備していく計画だったが、新型コロナウイルスの流行のため前倒しで導入され、岐阜県にも小中学生全員に端末が届いた。OS の選択は岐阜県では他県と違う傾向になった。他県では Chrome が 50%、iOS (iPad) が 30%、Windows が 20%だが、岐阜県は iOS (iPad) が 70%、Windows が 23%、Chrome が 7% だ。GIGA スクール構想は国が施策として、児童、生徒一人ひとりに端末を整備する。1 人 1 台 45,000 円の補助になる。かなりの規模の予算で、世界で初めてであることがクローズアップされているが、もう 1 つポイントがある。校内に高速大容量のネットワークを確立することだ。ただ端末を配って終わりではなく、大容量のデータをストレスなく扱い、活用できるようにするという構想があった。今、多くの教育改革が行われている。しかし、もう少し真剣になったほうがよいところもある。現場を見ると、うまくいっているところと、うまくいっていないところの差が、どんどん開いている。岐阜市は広い町なので、短期間ですべての小中学校にネットワークを敷設できなかつた。そこで Wi-Fi ではなくセルラーモデルが配備された。たとえば鶯谷中学高等学校もセルラーモデルで iPad を運用している。私の所属する岐阜女子大学が ITC アドバイザーとして北方町と連携を結んだので、昨年は北方町の小中学校で授業をした。2022 年にはさまざまなオファーがあった。県の ICT アドバイザー支援事業の講師として小中学校の授業や研修をするが、飛騨市、山県市とは直接契約をして行った。飛騨市の各校には 2 年間で 2 回ずつ行った。

7 年前の岐阜大学教育学部附属小学校の修学旅行 2 泊 3 日の事例になる。日程としては岐阜羽鳥駅から新幹線に乗り、45 分で京都に着く。京都の 1 日目はタクシーを使い、研修し知恩院で宿泊した。2 日目は自分たちで立てた計画を元に京都から奈良にグループごとに移動しながら研修をする。そのときナビゲーターとして iPad を使用する。教員はその iPad の位置を表示する GPS アプリで様子を見ることになる。たとえば多くのグループが奈良に着いているのにまだ京都にいるグループがあり心配していると、FaceTime という通話アプリで、どう行けばいいだろうという連絡が来るという具合だ。子供たちは iPad で写真を撮ることができるので、私はミッションを出した。みんなで世界遺産の写真を 10 枚以上撮るとか、外国の方に話しかけて英会話ビデオを作るというようなことだ。また何百台に 1 台しかない四つ葉のクローバーのついたタクシーを撮るという課題では、タクシー会社がわざわざそのタクシーを特別支援学級の子供のために用意してくれて、全員が撮ることができた。最終的には 5 年生に伝わるプレゼンテーションを作るという課題があるので、iPad でデータをたくさん集めながら 2 泊 3 日の修学旅行を終えた。

次に、プログラミング教育について触れる。「小学校プログラミング教育の手引き」という資料にプログラミング的思考、コンピューショナル・シンキングのことが書いてある。プログラミングをするときには「デコンポジション」をする。「デコンポジション」とは必要な動きを分けて考える、「分解」して考えるということであり、これは重要だ。ある事象をスモールステップに分けて、その動きに対応した命令にしていくという一般化、抽象化が行われる。それから上手に組み合わせるためにアルゴリズム的思考を使う。この工程を何度も試行錯誤しながら改善していくのが評価、デバッグだ。このコンピューショナル・シンキングを日本語にしたのが、文部科学省のいうプログラミング的思考だ。この「分解」をきちんとやれば、今年の学力・学習状況調査の最初の問題が解けただろう。オードリー・タン氏はプログラミング思考とは 1 つの問題をいくつかのステップに分解し、それを多くの人たちが共同で解決するプロセスを学ぶことと定義している。タン氏はプログラミング思考と知っているが、「分解」の「デコンポジション」を経て、探究の時間を持つということである。そういう切り口で見ると、アイデアがもらえそうなどころがあるだろう。最近ではデータ駆動型教育への転換という言葉をよく聞く。来年度の文部科学省でも予算化されていて、岐阜県の市町村も使っていこうと相談を受けている。

昨年 6 月の教育再生実行会議で、ポストコロナ期における新たな学びの在り方について、鎌田座長が当時

の菅首相に提言した。その内容は文部科学省のホームページに載っている。データ駆動型教育とは教育データを活用した現状把握と学びのデータ活用で、初等中等教育に関してはデータ駆動型教育へ転換するということだ。学力、学習状況調査が教育データを活用した現状把握にあたる。現場を見ると、既にデータ駆動型教育への転換がどんどん行われている。駆動させるデータの種類にはどのようなものがあるだろうか。教育データの利活用に関する有識者会議の令和3年度の資料には教育データの定義がなされている。基本は児童、生徒のデータだ。そのなかには学習のスタディ・ログと保健室や養護教諭が昔から使っているライフ・ログがある。教師にはアシスト・ログがある。それからAIを使って分析し施策に使うビッグデータと、学校、学校設置者の使う運用、行政データがある。これらを分けて考えていく。ビッグデータやテストの点数などは定量的データだが、そうではない、定性的データもある。成果物や主体的に学習に取り組む態度といったデータも対象にし、定性的データも大事にしていこうということである。GIGA スクール構想では、高速大容量のネットワークという環境のなかで1人に1台の端末が与えられており、今まで扱えなかった定性的データが簡単に扱えるようになった。

探究的な学びのなかで使ってもらうための事例を紹介する。中学校でも実践が中心なので高等学校でも使えるだろう。本年度の学力・学習状況調査では今年は理科もあった。教科にはテストだけではなく、質問手法という調査もある。小学校5年生までにまたは中学1、2年生のときに受けた授業で、PCやタブレットなどのICT機器をどの程度使用したかという調査項目があった。ほぼ毎日使ったとか、週3回以上などの選択肢を子供たちは選んで回答している。これはビッグデータだが、解析すると興味深いことがわかった。OSは市町村が選択するのでどの県でも3種類のOSが入っている。政令指定都市は横浜市などの例外を除き1種類のOSになっている。このデータは次年度のタブレット配備の予算資料を作るのに使える。授業双方向支援アプリはロイロノートを使っているが、iPadとのベストミックスで使用している。データを中学校で並べ替えると山梨市が1番になり、ほぼ毎日使っていることになる。次が熊本市である。熊本市はGIGAスクール構想以前に小中学校にiPad端末を配備した。その次は新潟市、それから相模原市、名古屋市、川崎市と続く。iPadでロイロノートを使うのが一番よいようだ。しかし広島市はiPadなのに順位が低い。これは調査の少し前に導入されたばかりだったからだそうだが、新聞でいろいろ報道された影響もあるのではないか。このようにデータを分析してみると、来年度以降はiPadにロイロノートの使用を選択する市町村が増えるだろう。岐阜県の資料でも同じような傾向だ。このようにデータ活用ができる。

施策に活かすというと、岐阜県の例だが、本巣市は学力・学習状況調査の中学校数学の平均正答率が全国でトップ級になったと新聞報道された。本巣市は数学の高木貞治博士の出身地なので、博士を顕彰し、数学に特化したさまざまな事業を行っている。数学ワンダーランドという施設をオープンしたり、毎年数学甲子園を開いたりしている。その成果で平均正答率が高くなったため、市としては学力・学習状況調査と関連させて施策を打っていきたいところだ。

ライフ・ログについてはデータ駆動型教育の実践で紹介する。ライフ・ログは養護教諭、保健室でよく活用されている。学校DX、教育DXと言われ始めているので、デジタルトランスフォーメーションという視点で見えていく。デジタルトランスフォーメーション、DXはデジタル技術を浸透させることで人々の生活をよりよいものへ変革することだ。既存の価値観や枠組みを根底から覆すような革新的なイノベーションをもたらさないとDXとはいえないという考えもある。生徒が体調を崩して保健室で処置してもらいと、今までは養護教諭が書類に記入して、教科担当の先生に届けていた。これを、ICTを使ってDX化する。ロイロノートで記入してデジタルで教科担当の先生に送る。それだけでなく担任、校長、教頭にも送られる。これが、革新的イノベーションだ。先生方も忙しいのでこういう情報はどこかで止まってしまうことがあるが、ロイ

ロノートを使えば、明日からでもできるようになる。また、この養護教諭は毎日帰るときに、出席黒板の写真を撮って、ロイロノートの出欠状況というフォルダに保存している。そうすると担任が月末などに参照できる。高速大容量のネットワークで容量制限がないので無限にデータ保存ができる。30人のクラスでそれぞれが動画を動かそうとしても問題なく動く。データに関しては、劇的なDXが起こっている。革新的な変革、イノベーションになる秘訣は何だろうか。複数のアプリを組み合わせることだ。たとえば保健室だよりは今まで紙だった。アナログだ。デジタルにして、iPadのPagesというアプリに動画を挿入してブックに書き出し配信すれば、動画も伝えることができる。デジタルブックなのでAppleのブックストアに出すことも可能だ。新型コロナウイルス感染症についての文書などを保存しているGoogleドライブのリンクに書いておけば保護者も簡単にアクセスできる。ちょっと工夫するだけでこんな画期的なことが簡単にできる。まさにデータ駆動型教育だ。学校だよりの行事予定でも、紙だと無くしてしまうが、デジタルにすればiPadですぐ見られる。この学校はiPadを自宅へ持ち帰ることを許可しているので自宅からも確認できる。ライフ・ログをうまく使っているということだ。

次も保健室の実践でQRコードとFormsを使う。さまざまな機会に活用されているようだ。宿泊研修や修学旅行ではアレルギーや投薬など事前の健康調査をする。以前は紙の調査票をそのまま宿泊先へ持っていくこともあった。個人情報なので、紛失した場合には大問題になり、教育委員会などが謝罪をしなければならぬ。デジタルではQRコードを読み込んでMicrosoftのFormsのアンケート画面で回答してもらう。Googleフォームでもできる。ある小学校で使用した際にはできないと紙で提出したのは80人中5人だけだった。今の保護者はスマホに慣れている。先ほど紹介した中学校では紙を提出しようとした生徒自身にiPadで入力してもらう。集まったデータは見やすいようにカード型データベースにして、検索もできるようにする。緊急連絡先のデータを出すこともできる。宿泊先にはiPadを持っていくだけで、紛失してもUSBメモリとは違いロックされており安心である。

次は子供たちが作った、「新型コロナウイルスから自分やみんなを守る、感染症に負けない中高の生活を」というビデオだ。高富中学校生徒会の保健安全委員会がPages、ブック、Googleドライブ、iMovie、Clips、写真、カメラ、GarageBandとたくさんのアプリを使って作ったが、これはiPadがあればできる。特殊な機材はいらない。この生徒たちは教わるだけでは満足しない。もっとよいものを作ってくるとして実際に自分たちで作ってくる。教材開発会社の文溪は岐阜市と連携協定を結んで、こころとからだの健康についてのアプリを開発している。岐阜市で実証実験をしているが、評価が高く、導入しようという市町村も出てきている。来年3月、リリース予定だ。朝の会と帰りの会で、心と体の様子を可視化するというアプリを使い、毎朝、体の調子や気持ちを記録する。自分の気持ちに応じてハートマークを選択する。それを誰かに伝えたかったら、それも入力する。誰に聞いてほしいかを入力するところがポイントだ。担任や他の教科の先生など誰でもよいのである。生徒指導の先生が話しやすい人に話すようメッセージを送ることと同じだ。帰りの会では気持ちだけを記録する。帰りにハートマークが半分になっていたら何かあったということなので、その生徒の特質に応じて、担任などが声をかけたりする。この気持ちを表すハートマークは天気の変更にすることもできる。これを先生方はクラスの座席表を見て、対応状況も可視化される。学年主任などの管理職とも共有する機能もついている。これもデータ駆動型教育の転換の1つだ。

次はスタディ・ログについてである。点数など数値だけでなく、思考力・判断力・表現力を育成するためのデータ駆動型の教育への転換の提案だ。岐阜県の学力・学習状況調査から無回答のワースト3は「訳を書く」、「求め方と訳を書く」、「求め方と答を書く」で、思考力・判断力・表現力に課題があるということがわかった。育てたい資質、能力の2つ目の柱で、評価規準は「…を説明している」だ。今までは全員を評価す

るのは難しかった。実際に中学校で行われている事例を紹介する。授業で、式変形の説明を画面収録して、ロイロノートに提出する場面で、「…を説明している」という評価に活用できる。ロイロノートに動画データとして提出されているので、2.5倍速でも十分聞き取れる。電子黒板に提出者を表示するようにすると全員提出する。できない生徒は友だちに聞いて、自分の言葉で入れて出す。これは思考のドリルになっている。数学的活動として、毎日の数学の授業に位置づけていくと、思考力、判断力、表現力が育成できる。動画は1人100MBくらいの大きいデータだが、高速大容量ネットワークなのでストレスなく動く。

次は公立中学校の理科で、ダニエル電池の仕組みを説明である。自分の説明をiPadの画面収録機能を使って、ロイロノートに提出する。

次はアシスト・ログである。岐阜聖徳学園高等学校で学級だよりを発行したあとアンケートを取り、それをテキストマイニングした。初めて発行したデジタル学級だよりはどうだったかというアンケートだ。たくさん意見があった。「受け取れた」、「簡略化されたのがよい」、「紙を使わないのがよい」という好評の反面、「届きにくい」、「バグがある」、「Air Drop に問題があった」という気になる回答もあった。デジタル学校だよりはPagesというアプリで作成し、EPUB形式で、AirDropで書き出した。動画データも入っているので100MB以上になる。それを全員にAirDropで送ったので、届くまで時間がかかり、バグが発生したのではないか。その後、AirDropではなくMDMで送ることになった。感想はGoogleフォームで集めて分析しており、次は学年だよりも同じように発行するそうだ。

最後に「生徒会サミット G5」と銘打ち、「テクノロジーを活用して生徒会活動をクリエイティブに」という副題をつけて、岐阜県内の5つの中学校が集まって行ったサミットについてである。デジタル生徒会だよりを発行するのが参加条件だった。各中学校は岐阜県の南から北までと地理的に離れているが、Zoomを使い、ライブで行った。サミットのキーワードとして前述の3Cを使い、Zoomの共有機能を使って、すばらしいプレゼンテーションをした。生徒たちのクリエイティビティが発揮されていた。著作権の表示もある。送信を可能にするためには著作権者の了解が必要と書いてある。Pagesで作ってブックにするとコピーができない。画面収録をすれば撮れるがそれは違法と書いてある。これも1つの勉強だ。アンケートへのリンクもあって、実際に生徒、先生、保護者にアンケートを取った。7月に実施して、アンケートの集計結果が出ている。1回目のグラフはインタラクティブグラフになっていて動く。AIを使ったテキストマイニングで記述式のアンケートの分析をしている。このとき呼びかけたのは通学するときの靴は白でなければならないという校則を変えようということだった。3割の生徒は「変えた方がいい」、7割が「今のままでいい」という回答だった。保護者は、7割が「変えた方がいい」、3割が「そのままでいい」という回答で、「汚れが目立つ」とか、「不潔だ」が理由だった。その結果に対して、「変えたほうがいいのか」というアンケートをまた行った。来週の火曜日にまたサミットがあるが、その結果を報告する予定だ。結果は変えるということになった。単色で、3色のうちのどれかが望ましいという校則になったそうだ。その校則を作るにあたって、生徒会はきちんと手順を踏んだ。PTAの実行委員と熟議をして決定し、最後は校長が認めたそうだ。テクノロジーを使って、自分たちの学校生活をよくしていこうという動きだ。これもテーマの探究の1つだ。

特色教育部会 実践発表 I

## 「ICT×鶯谷 ～教育の当たり前を変える～」

鶯谷中学高等学校 教諭  
中 島 康 貴



本校での iPad の導入は 2018 年秋に教員用 70 台に始まり、2019 年度から中学 1 年生、高校 1 年生に導入し、学年進行で導入を進めた。2021 年度全生徒への導入が完了したところになる。導入を検討している時点では、タブレットを導入している学校も少なく、主体的な学びにつながるという点、タブレットとしての安定性が高い点、Apple の標準アプリを活用するだけでも十分学びの道具として活用できる点が優れていると考え、主にこれら 3 つの点から iPad を導入することとなった。

教室の環境は、電子黒板機能付きプロジェクターと Apple TV を備え付け、HDMI 等のケーブルで接続することなく、iPad の画面を投影することができる環境を整えている。生徒も iPad を使用しているため、先生の端末だけでなく、生徒の端末もスムーズに共有することができる。他にも椅子と机が自由に動かせるコンピュータ室、アクティブラーニング教室も整備し、グループワークなどをスムーズに行えるような環境も整えている。

iPad の仕様は docomo 回線の LTE モデルを契約し、校内や家庭では Wi-fi、通学中には docomo 回線と常に iPad を活用できるようにしている。また、端末は 3 年間のレンタル契約で卒業時に返却することになっている。端末の補償サービスにも加入しており、紛失・破損などの際には無償で交換することができる。

校内の運用体制としては、導入が決まった年度に ICT 推進委員会として発足し、教員 5 名と事務部長が担当となり、導入の検討と運用をしてきたが、導入学年が増えるにつれて、他分掌との兼任が負担となっていた。現在は ICT 推進部として独立した分掌となっており、iPad の運用に専念できる体制になっている。担当教員は 4 名だが、ICT 支援員がいないので、トラブルが起こった場合にはサポート窓口に直接問い合わせをしたりしながら 4 人で協力して当たっている状況である。

契約しているサービスは端末管理の面では Jamf と Apple School Manager を利用している。現在よく使っているアプリは、授業の中ではロイロノート、オンライン授業等で Zoom です。特にロイロノートは普段の授業での活用も広がり、現在欠かすことのできないツールとなっている。他にも導入しているアプリは、スタディサプリや教科で要望のあったアプリ、Apple の標準アプリなど様々ある。

4 年間で失敗したなど感じたことや苦労したことは大きく次の 2 点である。

1 つ目はアプリの選定だ。導入する端末を iPad にした理由でも話した通り、iPad には教育で活用できるアプリが標準搭載されており、クラスルームやスクールワークを活用すれば追加で別のサービスを契約することなく、活用できると考えていた。しかし、実際に生徒とのやり取りの中で使ってみると、普段から使っていない先生にとっては使いにくいと感じたり、分からない部分も多かったりと活用が進まなかった。そこを解消すべく、すぐに授業支援アプリの追加導入に向けて検討を進め、ロイロノートを導入したところ、授業での活用が進んだ。

2 つ目は先生の意識をどう持っていくかである。「iPad を入れる意味があるのか？」と思っている先生に向けて、iPad を導入する利点や活用場面、どういう生徒を育てたいかなどをしっかりと伝え、教員間での共通認

識を持つことに苦労した。

思うように活用が進まない中で、活用を増やすために考えたことは「個人任せにしない」、「抵抗感を減らす」、「使う機会、触れる機会を増やす」の3つだった。その方針のもとで行った取り組みを紹介する。

1つ目はICT研修である。iPadで何ができるようになるのか、どう使ったらいいのを知る機会として研修を定期的に行なってきた。スクリーンショットの取り方など、簡単に誰でもできるところから研修を行い、授業での活用法を共有した。そうすることで、このぐらいできれば授業に活用できそうだという実感を持ってもらうことができ、授業での活用が進んだと感じている。

2つ目はiPadを使う機会を作ることである。本校で行ったことは、ロイロノートを活用した職員会議のペーパーレス化とZoomを使った全校集会の中継である。以前から全校集会の中継をZoomで行なっていたことで、新型コロナウイルスの影響による休校期間に入った際にもスムーズにオンライン授業を実施することができた。

3つ目はICTアンケートである。学年末にすべての先生、生徒に対して行い、活用状況や使い方についての調査をしている。その状況を共有することで、さらに活用してもらうにはどうしたら良いかなどの検討に使っている。

4つ目はICT通信である。ICT通信は不定期に発行している。アプリの使い方やアップデート情報、困った事例の共有、先生の活用事例の紹介などの情報を発信している。

次に授業での活用実践の紹介である。

数学では反転授業に向けて取り組んだ。実は、iPadを導入する前にも反転授業に取り組んだことがあるのだが、うまく展開することができず従来の形に戻したことがある。予習の指示を出しても、教科書を読んでもわからずそのままにしてしまい、結局授業中に始めから説明しないといけなくなってしまうことが多く、今のままでは難しいと感じ、戻すことになった。その時に感じたことは、予習をどう取り組ませるかの難しさである。

今回は、その点をロイロノートで授業動画を送ることで解決できないかと考え、再度挑戦した。授業の準備としては、教科書の項目ごとに10分を上限として授業動画を作成した。授業後に次回の授業内容にあわせて授業動画と予習の確認プリントをロイロノートで配付した。授業は、前半で予習の確認、後半で傍用問題集を利用しての問題演習を軸に展開した。

2ヶ月ほど反転授業に取り組んだ後、以前の授業と比べてどうだったかのアンケートを取った。全体的には好意的な回答が多く、特に、予習に活用してもらうための授業動画だったが、「何回も見返せるのがいい」や「休んだ時にも授業に遅れなくて済む」などの利点を感じている生徒が多くいると感じた。

最後に、これからに向けた課題である。課題と感じていることは授業での活用を共有するための雰囲気づくりだ。授業での活用を進めるためには、できることとその効果を知ることは当たり前だが、お互いに取り組んできたことの共有が大事であると感じている。普段からお互いに、共有し合うことで刺激になり、「自分もこう使ってみよう」とか、「こうしたらうまくいくのではないか」といった交流が活用の促進に繋がるのではないかと考えている。この点は本校の弱いところでもあると感じているので、交流の機会を作っていきたいと思っている。特に、失敗を恐れず挑戦し、その結果を気軽に共有し、認めていける環境になっていくと活用が進んでいくと考えている。

本校では「常にこれでいいのか」という言葉を心に留めながら、日々の教育に取り組んでいる。これから先も当たり前を疑い、時代のニーズに合わせた教育を進めていくために日々研鑽を積みたいと考えている。

特色教育部会 講演Ⅱ

## 「コロナ時代の『探究』の作り方」

認定NPO法人 v e r y 5 0 代表理事  
菅 谷 亮 介

まず、そもそもなぜ探究を行うのかを中心に話したい。

私は高校1年生のときにオーディションを受けて globe という3人組のミュージシャンの見習いの形で入れてもらった。今、振り返ると、高校3年生のときに、大学へ行く意味は何かと考えることができたのは、高校1年生から外の世界に触れられたことが大きかったと思う。外に触れて、学校の友達の悩みなど、どうでもよいと思うようになった。人間というのは視野が広がると、良くも悪くも痛みが消えていくというか、逆に痛みが増すこともあるが、そのように高校の段階から体感できたことはとても大きかった。そして小室哲哉という天才の近くにいることで、私もできるのではないかと勘違いをした。今振り返ると、このことがとても良かった。アジア平和音楽祭という音楽フェスで『Let It Be』を演奏したときに、世界中の人が一緒に歌っているあの感じがたまらなく、涙が出た。楽屋に戻ったあと、世界中のことをもっと知りたいと思い、大学へ行こうと決めた。大学へ行ったあとは、世界中をバックパッカーしながら、音楽のさまざまな音をサンプリングしようと旅に出たが、そこでいわゆるSDGsや貧困に出会って、国際協力のなかでも国際保健医療にどんどん入っていくようになり、大学を卒業するころには、将来自分で世界中の社会問題を解決しながら稼げる仕事をしたと思うようになった。卒業後はデンソーへ入社し、その後、アメリカのコンサルティング会社マッキンゼーの香港オフィスへ入り、2008年に日本に戻った。現在は、自立した優しい挑戦者を応援して育成し、世界をもっと面白くしようというミッションを掲げて動いている。このミッションを達成するためにやっていることが3つある。1つは、貧困問題やSDGsのさまざまな課題をビジネスの力で解決しようという、いわゆる社会起業を支援している。たとえば、カンボジアのスラム街には家がトタン屋根のようなところが多くある。台風に見舞われると、風は来るし雨は降るしという状況なので、頭からゴザをかぶって寝てしまう。そうすると勉強などとてもできない。安全な家が必要だが高価なので、カンボジア人のある事業家は、そうした貧困層のためにレゴブロックのようにカチャカチャと付けて家を作ることができるレンガを開発した。これは建材を販売するというビジネスだが、その背景にあるのはその地域のなかにおける、ある課題を解決するために行っている事業であり、社会起業という。ほかには、カンボジアとバリ島にショップを持っていて、スラム街の母親が自分で作った商品を販売する場所がないという場合、私たちがお店を運営して、そこに商品を自由に置いてもらい、その利益を自分のものにしてもらう。かつ、そこで経営や生きる力を覚えてもらうショップのような、学校のようなところを経営しながらやっている。もう1つは、この社会起業になり得るような未来を作り変えていってくれるような人たちを応援するための教育事業をしている。やっていることは超究極的なPBLで、実際にある会社の経営者のなかに入っていくながらも、かなり戦略的なことを一緒に立てていながら、進めていくということをやっている。当初は大人向けに会社の人材育成としてやっていたが、中学高校生からやらないと遅いのではないかとということで、2016年から中学高校生にも始めることになった。そして日本だけにとどまらず、世界中の高校生たち、大学生たち、そして起業家育成をいろいろな国で行っている。個人的なことでは、音楽業界へ復帰した。私自身が輝かないと、この仕事はできないと思っている。探究のテーマの1つとして、やはり自分の夢をあきらめない、複合的





でもいいので、先生方がすごく輝いていることが絶対に重要だと思う。あともう1つは、仙台の聖ウルスラ学院で理事顧問として、主に学校の経営についてアドバイザーのような形で参加しながら、経営に携わっている。本日の前半は、そもそも探究をなぜやるのか、共通の理解をさせていただきたい。

近年、国が私立大学のAO推薦入試を増やした理由が探究をやる重要なポイントになると思う。内閣は3.11の東日本大震災が起きたあと、日本を再復興、再構築していくためにいろいろな人たちを全国から集めてセカンドオピニオンのようなチームを作った。私はそのチームで日本の企業経営が担当だったが、そのときに強烈な危機感を覚えた話がある。1つ目は、日本の株価が下がっていたり、日本全体で給料が全然上がっていなかったり、企業の時価総額では1989年は世界のベスト15はことごとく日本だったが、2022年には日本1位のトヨタ自動車の世界で40位となり、良い悪いではなくだんだん落ちているというのが共通認識だ。そして、国の借金と高齢化率は世界1位になった。今の子供たちが活躍する14・15年後にはどんな世界になっているかということは1つのポイントで、そのために今の授業があり、教育があると思っている。それから、もう1つ世界一のものがある。それは独身者数だ。離婚率が非常に高くなったのはバブル崩壊と男女雇用機会均等法で女性が働くようになってからで、社会がどんどん変わっていった1つの大きな原因である。人口比率で見ると、日本はソロ率世界一だ。20年後の日本は人口の5割が独身、1人暮らしが4割、男の生涯未婚がなんと3割、女性も2割いる。結婚しても子どもを生まない、もしくは生みたいけど生めないという方ももちろんいるが、それがおそらく1割である。年収が高ければ高いほど結婚し、低ければ低いほど結婚できないということがデータから分かる。女性は結婚の利点を経済的な余裕が持てることだと言うのに対し、男性は金銭的に余裕が持てるから結婚しないと言っている。データだけで言うと、金がないから結婚できない。この「金がない」ということ、つまり、貧困になっているのだ。今の生徒は、15年後、20年後にまだ1人であることが圧倒的に多くなる。では、その1人である時代に対してどのように備えるのか。これは頭に入れておきたいデータだ。実は保護者の方はどこの大学に入るかよりも、一番大事なのはこの子がどうやって生きていけるのかということだと、何となく気づいてきている。重要なポイントの2つ目に、コミュニティが崩壊して地域社会のおせっかいな人がいなくなったことでお見合い結婚が減ったことや職場結婚が減ったということがある。1972年と2015年を比べてみると、職場結婚とお見合い結婚の数が減った数とほぼ同数である。だから、結婚しなくなったのは地域のコミュニティで自分におせっかいをしてくれる人たちが減ってきたということを意味する。このような時代だからこそ、逆に人とつながる力がとても必要になってくる。最近、「分人」という言葉が出てきて、いろいろなところの軽いつながりで、いろいろな自分になるという軽いコミュニティをどれだけ持てるかが、これからの時代のかなり重要なスキルだと思う。そのような時代のなかで、社長さんに「今後10年間あなたの会社は大丈夫ですか」と聞くと、97%は「10年後の経営に自信がない」という。3%しか「大丈夫」と言わなかったそうだ。2000年代に入って、企業のトップが「申し訳ありませんでした」と謝っている場面を見ることが増えた。日本の経済力がだんだん落ちてきているとともに、この数が増えている。たとえば、東芝は3期に渡って粉飾決算していたことがニュースになった。これはつまり、時代についていけなかったということだ。日本はこの20年間の生産性がほとんど変わっていない。この「変化をしていない」ということがポイントだ。TSUTAYAは動画配信が出てきてから全く行かなくなった会社だが、その代わりに本屋になり、さらにインテリアや場づくりが上手いということで、図書館の運営に取り組んだ。どんどん自分たちを変えていながら、時代に合わせていくことをやらないとだめなのだ。ここが1つ大きいポイントだった。では、この時代にコロナで加速したものは何かというと、1つ目はデジタル化、2つ目は新しいエネルギー、再生可能エネルギーだ。このデジタル化により世界を変えていくような新しいチャレンジがたくさん生まれて、この流れに乗った人は富裕層になり、貧富の差が開いている。今、日本では少年院等と児童虐待の相談がとて増えている。貧困が増えると、犯罪率が増えるからだ。これが私たちの進んでいる本当に悲しい状況だ。

では、なぜ日本はこんなことになってしまったのか。日本は発明や新しい技術を海外に取られてしまうことが多い。たとえば、最近非常に注目を浴びているペロブスカイト型太陽電池という技術は日本人が作った技術である。これを今、いろいろな国でこぞって開発している。しかし日本はこんなにすごい技術なのに、これほどまでに有望になるとは思っていなかったのだ。誰の何の問題を解決するのかという発想が市場創出につながるわけで、つまり、問題解決能力養成の必要性はここにある。もう1つは、世界的な普及力が足りていない、つまり世界中の人たちとコミュニケーションができる力が足りてないのではないか。ここを鍛えることが探究の最初のスタートだった。さらにもう1つ、日本は責任を誰も取りたがらないので、リスクを避けてしまう。これが3つの大きい問題だと思う。

日本のテーマは人材育成だ。日本は教育への公的支出が低いのだが、かつてデンマークが大不況に陥った際に、教育改革を行い、生徒が学ぶ、learn をする場所にして、教員はファシリテーターになる、学習アドバイザーに切り替わっていくということをやった。人材を20年、30年のケアを考えて強化していった、その結果として経済成長もしていった。日本人にもアニメやクラシック音楽、バレエなどで世界的に活躍している人が多くいる。これは自分で現場に行き、個別にやるのが圧倒的に多く、こうした才能の育て方をしているのだ。この状況は江戸時代に似ている。江戸時代に公教育は藩校でやっていたが、今のような変革期になったときに私塾がたくさんできた。黒船も来て、このままではまずいと感じた藩は私塾にお金をつぎ込んだ。その結果、吉田松陰や井伊直弼などが出てきて、国家の大役を担っていった。私は今、私立学校というのは現代のなかにおける寺子屋であり、私塾だと思う。公立学校にはない特色をどのように出すのが議論になることが多いが、より柔軟に未来を担ったところに教育をしていくことが、おそらく正しいのだろうと思う。

日本の暗い話が続いたが、われわれの事例を紹介する。未来が暗くなってきた日本のなかで、いかに子どもたちの夢を教育が守っていくことができるかが、この時代に求められているのではないか。しかし、真面目な話をしてもつまらないと思う生徒は多いと思う。探究学習で生徒たちに何を伝えていけば良いのか、授業一つ一つをどのように設計していけば良いのかということに、答えはまだないだろう。生徒たちが生き生きと楽しくめんどことと、10年後の生徒たちにちゃんとしたものを残したいという思いの両立は難しい。very50はこの不確かな時代に大事なことは、答えを教えることではなく、1歩力を鍛えていくことだと結論づけている。このような社会のなかでも、生き生きと生きている人はいる。その人たちの共通点は失敗の数がとても多いことで、このたくさんの挑戦を1歩力と表現している。探究のなかではこの1歩力をテーマにしている。これは大人がチャレンジして、自分が率先して語るような探究にならないと、なかなか生徒たちには1歩力が届いていないと感じている。実際にステッカーを作ってみると、生徒たちからはダサいと笑われるが、それでも何か届いていて、「あの人もやっているよね」という空気感がどんどん伝わっていく。5教科7科目をないがしろにしていっていいわけではないということも探究として感じるころだ。やはり学力を捨ててよいわけではないことも生徒に伝えようとしている。しかし、大学受験は変わってきているので、理論だけでは受験すら今後勝てない可能性もあり得る時代には来ているということはやはり認識しておくべきことだ。そのようななかで、われわれが具体的にどのようなことをやっているかということ、1年間をだいたい3つのタームに分けて、1歩力を実践していこうということをやっている。1学期には韓国語を習得したとか、おいしいマフィン作ったというように、まずは興味の幅を広げるところから、1歩を踏み出してもらって、2学期には、身の回りの課題に焦点を当てていこうという形で、学校内のごみを減らすエコプロジェクトや、スタバとコラボして地元の特産品やお土産を使ったフラペチーノを作るといったようなプロジェクトをやっていた。最後はビジネスアイデアプロジェクトとして、より社会に近づいていくような、そういう段階を踏みながら1歩を踏み出していく。この過程で、自分の好きなテーマを見つけてい

く力や他者と協働する力、自分の得意、不得意を学びながらも、共通している土台は1歩力だ。全員が1歩を踏み出す力は持ち帰ってもらいたいというのが基本的な探究だ。それから、研修旅行で沖縄のカフェの売上を上げるために、アイデアを提案し、実践するというを行った。そうすると、意外とお客さんが来ないなど、いろいろあるなかで、そこから学んでいく。実際に売上が上がらなくても、なぜ上がらなかったかを受け取って帰ってもらうことが大事だ。考えるのではなく、実行してみようというところにフォーカスをしている。1歩踏み出す力があれば、10年後振り返ったときに、すごく生き生きと、生きていけるのではないかと思う。いろいろな先生方と探究を作っているときに、よく話すのだが、やはり大人が楽しそうでないとか、大人が挑戦してない、大人が探究してないようなときに、生徒が探究できるのかというのは私たち自身にも突き付けられている課題である。だから、この探究の時間だけはある意味フラットに先生方も very50 のスタッフも関わる大人も生徒もみんな一緒に1歩を踏み出そうということだ。先日あった探究授業で、50～60代くらいの先生から「私はガラケーからスマホに変えました」という一言があった。小さな1歩と思われることでも、意外とそれが生徒たちに響いていて、「私たちもやらない」という空気感が伝わっていき、それが学校全体に広がっていく。ただ、探究の時間では1歩力だが、5教科7科目を捨ててよいわけではないという空気感を作ることができる、いろいろな生徒たちに対して10年後、探究を学んで良かったと思ってもらえるように感じている。

「他者と話すことが苦手」などやる気のない学生対策はとても大事で、350人中50人は楽しめているが、300人は乗り気でないところをどうにか巻き込む工夫をしている。とりあえずやってみる1歩力から始めて、徐々に興味の幅を広げていく。最後の3学期にはしっかりと山場を持ってくると、乗り気じゃなかった300人にも届いていく。また、タブレットやグーグルフォーム、Slack というビジネスツールなどを活用するなど、プロジェクトテーマの工夫もしている。探究の時間をなかなか取れないという現場の先生方の声も聞くが、たとえば文化祭を3倍楽しむというテーマにすると、もともとある文化祭準備の時間を利用することができる。探究のなかで伝えなければならないことはただ話をするだけではなく、アニメーションを付けた動画を見もらうなど工夫している。ほかには、大学生のメンターに入ってもらくと、大人が何を言っても聞かない生徒が、なぜか少し年上の大学生の言っていることは意外と聞くようなこともあり、あの手この手でいろいろな角度からトライをしていくことで、一学年の探究になっていく。これからの未来を考えたときに、探究がどのようにあるべきかの答はまだないが、私学一丸となってさまざまな取り組みが今後発展していくと良いと思う。

冒頭であえて暗い話をしたが、楽しく生きていくために一番重要なことが1歩を踏み出していく力なのではないかという結論にたどり着いた。論理的思考能力とかプログラミング能力とかスキルベースのものを追いかけてちださと思うが、10年後、20年後にはなくなっているかもしれない。つまり、これからどのようなものが出てきたとしても、そこに順応していけるような1歩を踏み出だせるフットワークの軽さこそがこれからの時代をしっかりと生きていくのに必要なことではないかということで私は1歩力をやってきた。一番大きいキーワードとして、あまりやる気がないとか、やりたくないなという子供たちに対して、私たちが何をしているかということ、彼らができそうなゴールの設定をとても短くするところにある。個別にどれだけ1人1人の1歩の距離感を設計するかということに妙があるのだということをお伝えしたい。

それから、ぜひ学校で行くと良いと思うことが同窓会だ。大学生たちの同窓会で母校に貢献したいと思っている学生たちはたくさんいると思う。学校はたいへんな資産を持っている。今、私たちが行っていることは大学生メンターたちがきめ細かくやってくれるので、1人1人の探究を見ることが実現できている。先生方がその資産を使っていけると良い。

先生方自身、そして私たちもみんなで輝いていくことが、とても大切なことなのではないか。

## 「ICT 本格導入より 4 年目、見えてきた生徒の学習の変化と今後の課題」

(岐阜県) 岐阜聖徳学園高等学校 教諭  
中 村 充

### 【1. 岐阜聖徳学園高校について】

大学から幼稚園、また自動車学校を擁する学校法人聖徳学園という総合学園内に位置づけられる高等学校である。建学の精神は聖徳太子の「以和為貴（わをもってたつとしとなす）」の成句を象徴と掲げ、「平等」「寛容」「利他」の大乗仏教の精神を体得する人格の形成を目指している。1964（昭和 38）年に岐阜南高等学校として開校し、2001（平成 17）年に清翔高等学校、2013（平成 25）年に岐阜聖徳学園高等学校と 2 度の校名変更を行い現在に至る。本校のグラデュエーションポリシーは「自立」「共生」「学び」の 3 つを中心としている。生徒数は 1 学年 300 人超で特進、進学 I 類、進学 II 類、商業科の 4 コースがある。全校生徒数が約 1,000 名、教職員数は専任、非常勤講師、事務職員を合わせて約 100 名である。



### 【2. 岐阜聖徳の ICT 環境】

#### （1）ICT の導入

ICT の導入は 2018（平成 30）年の年度当初に、翌 2019（平成 31）年度から新入生より順次、学年進行で 1 人 1 台の iPad を持たせることを職員会議で決め、2018 年の夏から秋にかけて各教室に大型提示装置の設置、非常勤講師も含めた全教員への iPad の配付を行った。特筆すべきは iPad 導入 1 年目である 2019 年の秋に第 1 回 ICT 公開授業を行うと決めて、ICT の本格導入に踏み切ったことである。

#### （2）利用しているサービス

iPad（LTE モデル）を「NTT docomo」から生徒・保護者・教師をつなぐ学校全体のプラットフォームとして「Classi」、授業支援アプリとして「ロイロノート」、II 類・商業科の生徒の e-Learning の教材として「すらら」、特進・I 類の生徒を対象とした教材として「スタディサプリ」を利用している。ただし、e-Learning についてはその活用方法が思ったよりも難しいと感じている。

#### （3）一般教室の環境

教室の前方には SAKAWA のワイドという黒板の半分から 2/3 程度まで投影することができる大型のプロジェクターを設置している。そのプロジェクターに Apple TV を介して教員や生徒の iPad の画面を投影して授業を進める。Power Point や Keynote の教材、デジタル教科書の画面を専用に取り替えられた黒板にそのまま投影できるのでそのまま黒板にチョークで書き込んで授業を進めることが可能である。ほぼ全ての教員が利用している。また、Apple TV 以外にも教員個々のパソコン等を接続できる端子もある。外部から講師を招いた時などに利用される場面があり、別途利用できる端子は必要である。

### 【3. ICT 導入で生まれた教育活動】

#### （1）資料提示、配付、回収、保管

まずは「資料提示・配付・回収・保管」である。1 つ目の例は地理の授業である。従来の授業では教科書や資料集を見ながら語句を覚えることが中心だったが、ある生徒が「先生、その場所を Google Earth で見せてよ!」と言ったことから授業の内容が変わった。教室にしながら実際の画像を目にすることで生徒の興味関心を惹きつけることができるようになり、学習意欲も高まったと聞いている。言われると簡単なことだが、ちょっとした生徒のアイデアが授業展開に活かされた例である。

また教室にプロジェクターが設置してあることから、ほんの数分間だけでも生徒たちに動画を見せたいと教員が考えた時、今までであれば視聴覚室などの特別教室に移動しなければならなかった手間を省くことができた。手間が減るということは授業展開に大きく影響を与える。

次に、ロイロノートを活用した授業である。このアプリケーションのプレゼン機能を用い、生徒たちは簡

単な資料作成を短時間で終わらせる。言葉で話すだけでは伝わりにくいことを動画や画像を用いるだけでなく、レイアウトや文字の大きさ等を考えて伝えようとする。それが直接的に数学や英語の点数に結びつくわけではないが、「人に伝える」「資料をまとめる」などの力の育成につながっている。

また、資料の保管に非常に有用である。経験があるかと思うが、B紙やロール紙に付箋やマジックでイメージマップや派生図等を書かせることがある。特に総合的な探究の時間で用いられる手法である。授業後、その成果物（B紙やロール紙）をどのように、いつまで保管されるだろうか。これらを写真に撮り、ロイロノートの資料箱に保管しておけば過去に考えたことを教員も生徒もいつでも読み出すことができる。教員の保管や準備の手間が大幅に減った。また、資料箱は授業でのみ使用するわけではない。例えばHRで生徒たちに配付した模擬試験の案内、学級通信、各種委員会からの連絡など様々な案内用紙をPDFにして保管することができる。どの学校でもチラシが1枚だけ各HRに配付され、それを掲示版に貼っておくことがよくあるだろう。よほどインパクトがあったり重要であったりしない限り、生徒たちが目にすることはない。もちろんiPadで見られるからといって全員が見るとは限らないが、必要な生徒がいつでも資料にアクセスできるようになった。

#### （2）生徒と教員のコミュニケーション

ICTと聞くと何か無機質のような印象を受けるが、それは活用方法次第である。私はClassiの学習記録の機能を利用し、ほぼ毎日、クラスの生徒たちとコメントのやり取りをしている。日常の些細な出来事を生徒たちは文字にして担任に教えてくれる。それらのほとんどはわざわざ口頭で伝える必要もないことだが、時には生徒たちからのSOSが入ることもある。クラスの様子を全て把握できるわけではないが、普通に生活していたら有り得ないコミュニケーションがiPad上で生まれている。

#### （3）個別学習と外部との交流

e-Learningだけでなく、例えば同じ動画を生徒が視聴しながら調べ学習を実施する時、黒板のプロジェクターに投影するとどうしても個人によって情報を読み取れる時とそうではなくて一時停止をしたり巻き戻したりしたい場面が出てくる。そのような時に個別に端末を持っていると個人のペースで学習や情報収集に取り組むことができる。これもメリットの1つである。当然、教室を離れた場所とのコミュニケーションも容易である。国内外を問わずに接続可能である。

#### （4）YouTube 甲子園

本校には動画作成に特化した部活動はなく、ある数名の生徒が自主的に参加したいと申し出たことに対して学校が対応した例である。2人の女子生徒が中心となって作成した動画がある。彼女たちは特進コースに所属しており部活動に入ることができない。それでも高校時代に何かに挑戦したいと思い、この動画作成に臨んだ。幸い本校にはICTの活用に長けたICT支援員が在籍しているので、その方の力も借りながら参加することができた。今回はICTを活用した挑戦だったが、校内に「いろいろな事にチャレンジしてみよう」という雰囲気が出てきたことも非常に良かったと思っている。

#### （5）その他

コロナの関係で臨時休校になった時でも単に授業の中継をするだけでなく、様々な方法を用いながら学習保障を継続させることができた。教員が諸事情で学校に出勤できない時は生徒は教室にいながら教員が自宅から授業をすることもあった。岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科准教授の松井徹先生のアドバイスもあり、EPUBを用いてハリー・ポッターの世界のような学年通信の作成にも取り組んでいる。

### 【4. ICTの推進のために実施したこと】

#### （1）ICT活用状況調査

まず、校内の先生方に「電子黒板の電源を入れることができるのか」といった一見すると馬鹿にしたような質問から始めた。最初は約30%の先生方しか「できる」と回答された先生はいなかった。なんとなくの肌感覚ではなく、誰が何をすることができないのか、何に困っているのかを明確に把握することで先生方個々に「お手伝いしましょうか?」と声をかけていった。もちろんそれはICT担当だけでなく、ICT支援員の多大な尽力も頂いた。回を重ねるごとに状況が好転していったが、苦手な先生に強制してもあまり上手くいかない。時間をかけて少しずつ取り組んだことが結果的に非常勤講師の先生方や年齢層の高い先生方も含めて全員がある程度ICT機器を使用できる状況になったのではないかと。

## (2) ICT 通信

2019年と2020年のICT公開授業で参加者の方々に渡している。年間で50号前後発行している。とにかくICT担当が考えていることや世の中で起きていること、校内の先生方の取り組み、機器の使用方法など思いつくことを不定期で発行し続けた。特に導入初期には校内の雰囲気づくりや情報共有に役に立った。私が好き勝手なことを書いて発行したのだが、それを認めてくれた校長及び管理職の先生方に感謝している。

## (3) ICT活用におけるアイデア集

校内で「ICT活用におけるアイデア集」を作成した。ICTを活用した授業実践集だが、校内の1/3程度の先生方に協力頂いた。本校の校長にも2年前に副校長の立場で授業実践の報告を寄稿して頂いた。トップに積極的な姿勢を示して頂くことによって、教師集団も刺激された良い例になった。

## (4) 授業実践交流会、先進校訪問、保護者への説明

放課後に授業実践の交流会を実施することもあった。正式な研修会ではなく、任意の研修にすることによって、肩肘張らない和やかな雰囲気の中で分からないことを遠慮せずに尋ね合う雰囲気がある研修の機会になった。また、先進校への訪問や全国各地で行われているICTの公開授業に複数の教員で参加したことも教員同士の情報共有およびモチベーションの増加につながった。本校が1人1台のiPadを導入したのは2019年4月であり、地域では最も早い導入だった。そのためなぜこのような教育活動をするのかという学校の願いを保護者に丁寧に伝える必要があった。ほぼ全員の保護者に理由を説明し、また家庭での協力を依頼した。そのためかiPadに関するトラブル等の家庭からの厳しい意見は皆無である。保護者の方々に理解頂き、学校と一緒に新しい教育活動のスタートを切れたことは嬉しく思っている。

## (5) ICT公開授業

ある程度取り組みが成熟してきたからの公開授業ではなく、導入初年度の秋に実施したことに意義があった。1年生の全クラスで2コマの授業(10クラス×2時間分)を公開し、午後からは分科会を実施した。主催者である本校の教員はやはり少しでも良い授業を公開したいと気合が入る。公開授業当日まで授業者同士でアイデアを出し合いながら、より良い時間をつくりあげようと努力した。この雰囲気が学校全体でICT活用を進めていこうという流れを生み出してくれた。参加者の方々から多くのアドバイスを頂くこともできた。また、学校改革を進め、少しずつ地域からの評価も上がってきたところではあったが、本校の教育活動を見るために多くの方々にお越し頂いたことも我々教員の自信にもつながった。

## (6) ICT支援員の活躍および組織

本校のICTの推進を支えたこととして絶対に欠かせないのはICT支援員の活躍である。支援員には朝9時から夕方5時まで常勤として働いて頂いている。機器やネットワークの保守点検に留まらず、時には授業づくりのアドバイスも頂いている。我々教員は教師本来の仕事である授業や教育活動に専念できる環境が整えられている。もし仮にICT担当になった教員がこれら本来教育活動とは関係のない仕事に時間を取られることになっていればICT担当は潰れてしまっていただろう。現在も教員だけでなく生徒たちからも絶大な信頼を集めている。ICTの推進に関して校内のICT委員会が中心になって黎明期をつくりあげてきたが、管理職、生徒指導部、事務職員、理事会までもが協力して取り組めたことは導入の初期段階において大きな役割を果たした。

## 【5. 今後も大切にしたいこと】

どれだけICTが教育活動で利用されようとも教員同士のコミュニケーション、生徒と教員のコミュニケーションは欠かすことができない。また、弁論大会などのアナログな行事も大切である。生徒の本気の訴えを直に耳にすることで聞き手の心が揺さぶられる。そのような機会をなくしてはならない。また、本校は夏に教師だけでなく、生徒や保護者にも協力してもらって中学生向けの学校見学会を開催している。近年は4日間で約3,000名の参加者があるが、生徒スタッフの数は400名を超えることがある。全校生徒は1,000名弱なので実に5人に2人がボランティアで学校の行事を支えてくれている。これも日頃、教員と生徒の関係が良好に保たれている証拠である。

学校は生徒がいなくては成り立たない。どんなに学校のICT化が進んでも、なくしてはならないことがある。ICTと従来の教育活動は相反するものではなく、融合させることで更に進化するはずである。時代の担い手となる生徒たちの可能性を拓ける取り組みを今後も学校全体で模索していきたい。

## 特色教育部会 研究協議（全体会）

### 「各学校の特色ある教育の取り組み」

特色教育部会研究協議（全体会）を実施するにあたり、参加者に各校の特色ある教育の事例に関してアンケートを実施した。そのアンケートをもとに、4名の参加者にさらに詳しく報告して頂いた。

#### 【島根県 開星中学高等学校】

昨年度から「なりたい自分に、なれる場所」をキャッチコピーに生徒募集をしている。本校はもともと女子校でスタートし、1978年に共学校となった。2年後に迎える100周年のアピールのため、卒業生を含めて、学校を盛り上げている。

探究については「礼をただす」、「道徳的な部分」、それから「文武両道」、これらを3本柱として、自ら課題を見つけ、主体的に考え行動し、問題を解決するというテーマのもとで行っている。平成25年からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けて、いろいろな取り組みを行ってきた。中高一貫校で、中学生も一緒にSSHに取り組んできた。フィールドワーク、一般



の方々の前での研究発表といった取り組みも行った。SSHの期間が終了後も、そこで培ってきた取り組み等は現在の探究の基盤となっている。SSHの指定を受けている時は海外でも研修を行い、近くにある島根大学の先生にも同行頂いた。本校の教員だけではなく、大学の先生等に協力頂きながら探究を進めている。中学校の探究については、まず1年生は「探究とは何か」、2年生では「地域」について学びながら進め、3年生では「起業家スクール」、これは本校の特色ある取り組みだが、地域の店などとコラボして商品を開発、販売する。卒業生の紹介で、ロールケーキを作っている地元のパン屋で商品を開発した。その際、生徒が梨の入ったロールケーキを作りたいと言うと、店の方は「梨は水っぽいから難しい」と言ったが、煮詰めた梨を入れたらどうかと発案して、作ったところ、非常に美味しく、その店の商品になり、生徒たちも喜んだ。

本校は中高一貫校であるが地元の中学から中学校から入学する生徒の方が多く、1年生は高校に入ってから探究の基礎的な部分から学んでいく。2・3年生は進路別に分かれるが、クラスや進路希望毎に個人探究、グループ探究、専門分野の探究に分かれる流れとなる。外部講師の先生にも協力頂いている。

本校には研究開発部があり、その先生方が中心になり、多くの学校を視察している。

生徒たちがいろいろ取り組んだことを発表する場を設けている。例えば個人研究の発表では「食と心理学」、「食と地域」、「ICTとスポーツ」、例えば、短距離で足を速くするにはどうすればよいかをICTも使いながら視覚的に目で見て理解しやすくしている。「生活と科学」のように、本校は就職を希望する生徒もいるので、ICTと就職を絡めたような取り組みもしている。

〈質問〉

基本的には中学校であれば総合的な学習の時間が週1時間、高校も同様に総合的な探究の時間が週1時間なのか。発表会は全員が発表するのか。中学校も高校も基本的には探究は担任の先生が行うのか。

〈回答〉

授業数は中学が週1回（1時間）。高校は週1回（2時間）となっている。校内発表で代表生を決め、外部の方に向けて発表する時は代表生のみの場合もある。ポスターセッションも行っている。必ずしも全員が発表会で発表するわけではない。

研究開発部で担当者を決め、教科を超えて指導する。中学校の教員が高校生を指導することもある。

#### 【愛知県 名古屋経済大学市邨高等学校】

名古屋にある学校で、高校が1学年13クラス、中学校が1学年3クラスと割と規模は大きい。2017年に中学校、2018年に高等学校で、全校一斉に1人1台のiPadを導入した。

ICTが入ることで先生の役割が根本的に変わった。本校の先生方の多くはMetaMojiを使っており、専任の先生方はほぼ100%活用している。一方で主に非常勤の先生方うまく連携できない部分があり、そこが大きな課題である。



授業を含めた学校の教育活動は、基本的に Teaching ではなく Learning で行っている。例えば私は、解説が必要であれば Google サイトを作ってそこに動画をあげ、見たい人が見るといふ形をとっている。ICT を使うことでずいぶんやれることが増えたが、特に海外をふくめた学校の外につながるができるのが良い。国内外を問わず学校間交流も行えるようになった。iPad は文章はもちろん、絵も描けるし作曲もできる。大概の創作活動ができるので、創造的なアウトプットが非常にやりやすい端末である。

<質問>

マイクロソフトの Teams を使って共有をし、Google も使っているようだが、どのように使い分けをしているのか。

<回答>

基本的にマイクロソフトでも Google でも、フォームなど基本的な活用においては大きな違いはない。学習者には、Microsoft でないとダメだとか Google でないと使えないとか Apple だけ使いたいとか言わずに、全部使って欲しいと思っている。そのため、それらのツールに触れる機会を均等に与えることを意識している。

<質問>

本校でも授業改革に取り組んでいるが、一番の課題が評価とテストのあり方である。定期テスト等で取り組み等があれば教えて欲しい。

<回答>

高校 1 年生から新カリキュラムになったこともあり、定期テストがかなり姿を変えた。まず、中間テストがなくなった。期末テストはあるが、基本的には知識系を問うのではなく、思考判断表現テストという名称で、一問一答式の問題は出さないようにしている。知識系の問題は各教科の単元テストで行っていただき、A・B・C で評価している。思考判断表現テストは 1 点刻みのテストとは相性が悪いので、A・B・C 評価が適している。したがって、本校では何点というテストは行っていない。それぞれの科目で A・B・C がそれぞれ累積し、成績がつけられるかたちになっている。

### 【愛知県 中部大学第一高等学校】

本校はユネスコスクールに加盟しており、ユネスコの理念及び SDGs や ESD は、建学の精神である「不言実行、あてになる人間」へとつながっている。現代に求められる人材育成にあった建学の精神であると考えているため、ユネスコスクールとしての活動コンセプトを「ICT×ESD×探究」として定め、それを通じてどのような能力を育んでいくかということの本年度から明確化した。知識・技能、思考力・表現力・判断力、学びに向かう力という 3 観点の中に重視したい資質能力を位置付けた。それは 10 の ESD 資質能力という形となる。

私は ICT を管轄する情報部で、iPad の導入や ICT の体制作りを行ってきた。今年度からは、ESD 推進部を立ち上げて、探究を含めてさまざまな教育開発等を担当している。創造性をはじめとする能力の涵養や諸活動の円滑化を図る ICT を大枠として、ESD、SDGs を中心とした学び、特にその核になるのが探究であるという形をとっている。授業内にも SDGs の視点を位置付けているが、さらに発展的な学びのフィールドワークの場として ESD 国内研修や海外研修などを実施しており、これには希望者が参加する。探究については、各教科の中心に探究が位置するイメージで、探究の中でさまざまな能力が育まれるように意識している。特に、生徒の興味関心と進路希望、SDGs がうまくマッチするように枠組みを作りながら試行錯誤をしている。比較的自由度の高い形で探究を進めており、iPad が導入されてからはスムーズになりつつある。

本校は中部大学の併設校で、毎年 150 名程度の生徒が内部進学をしているが、学部と生徒の興味関心にミスマッチが発生することもあるため、高大接続の円滑化を考えることは非常に重要だ。また、他大学への進学実績も同時に求められている。そのため、大学入試が多様化する中で、発展的な学びに向けて個人の興味関心が広がり、次の進路につながればよいという思いで探究を進めている。これは昨年度の 3 年生で実施した探究テーマの一例である。「完全自動運転」や「香り」、「フェアトレード商品販売のデータ分析」などテー



マは多様である。iPadについては制限がかかっているが、データ分析の探究では「MESH」というアプリを使いたいのインストールしてほしいというような、リクエストにも柔軟に対応しながら進めている。

個人の探究がグループでのプロジェクトとなることもある。例えば、昨年の愛知県ユネスコスクール交流会では、いくつかの探究を一つの地域デザインプロジェクトとしてまとめ、本校が位置する日進市の発展に向けた提言となるように発表した。

昨年度までは、学校としてこうした教育の支援システムが確立されていなかったが、今年度はESD推進部が主導しながら探究アドバイザーアワーといった探究の支援も展開している。推進部のメンバーにほとんどの教科の教員がいるため、探究の相談に来た生徒に対して横断的なアドバイスができるように心がけている。また、今年度からはカリキュラムが変わったことに伴い、普通科は特進コース、一貫コース、文理探求コースという編成が変わった。工業系は創造工学科という新しい科となり学びの内容を見直した。その中で、生徒の多様なニーズに対応する学びを今後どのように発展させるかが課題である。

〈質問〉

それぞれの興味関心に基づくテーマというのは本当にその通りで、そのようにつなぎ合わせたいと考えているが、一方で、生徒それぞれのやりたいこととなるとかなり散らかる。例えば、どういう形でどれくらいの頻度でフィードバックをされているのか。あるいは問い立てがうまくいかないとか、途中で変更もありうると思うので、どのようにマネジメントされているのか。

〈回答〉

ご指摘の通り、ただ自由にやらせるだけでは成立しない。一応、今年度からは生徒用テキストとワークシート、教員用授業案をESD推進部で作成している。さまざまな業者のテキストで方法論は大体同じだが、テーマを深めていくところはなかなか難しい。今年度は育む資質能力を定めたので、それに合うように本校独自で用意している。探究は週一時間ではあるが、テーマ設定に向けて連続性のあるフレームワークを用意しており、ワークごとにフィードバックをする。ワークの手順に沿っていった最後にテーマ設定となるが、そこでうまくいかない場合は、探究アドバイザーアワーなどで教員からアドバイスをすることで方向性を定めるようにしている。

### 【東京都 学校法人聖パウロ学園】

本校が取り組んでいる探究活動をメインに発表するが、前提となることも必要となるので、先に本校の紹介をする。

東京都と想像できない山の中にあり、JR中央線の終点駅の高尾駅からスクールバスで15分ほどのところの東京ドーム5個分のかなり広い敷地の中にある。カトリックミッションスクールである。1学年の定員は80名という小さな学校である。さらに附属中学校、附属大学もない高校単独校のため、学内でできることも限られてしまっている。

ただし、キャリアデザインでは、この時代にどう3年後、5年後、10年後を見据えるかということで探究活動はかなり力をいれて実施している。また、少人数の学校ということもあり、3Dプリンターやレーザーカッターというような機器が本校には全くない。

本校の探究についてであるが、本校は生徒数が少ないので、常勤の教員は校長を含めて18人しかいない。その中で、「探究ゼミ」と呼んでいるが、3年生3クラスの担任3人以外はすべて探究ゼミを開講する形で実施している。1つに偏らないようにいくつもの、大学という研究室のような感じで、我々が年度当初に生徒にプレゼンして、どこに配属したいかというアンケートをとる。1・2年生は必ずどこかのゼミに配属する。1年間かけて、週1時間の割合だが、2時間連続の時間を隔週や夏休みを使って取り組んでいる。ICTも活用するが、あくまでも学力の向上というより、幅広い視野を身に付けて、興味あるものをどのくらい掘り下げて考えていくかというところをメインにしている。

本校の場合はパウロの森と呼んでいるが、資源を持っており、そこがかなりのヤードとなって、森に入って実施している。また、「ジェンダーと炎上」というゼミを開講していて生徒に人気があるが、「なぜ森・元首相の発言はあんなに炎上するのか」をいろいろな男女問題を含めて考えていき1年間かけて追求するプログラムを実施している。

本校は公立中学校の生徒が100%入学してくるので、ほとんどICTが使えない。中学校の頃に使っていないので、3年間でそこを含めて卒業させて行くにはかなり教員側の能力も必要になる。



本校は土地柄、梅がたくさん採れるので、梅干しを商品化してきちんと売る、儲けるためではない。梅を作るには塩分濃度何%なのか、どれくらいのが科学的に人体に良いのか悪いのかを近隣の大学と共同で授業をしてもらったり、実際に梅干しを作って試食をしてもらったりしている。

パウロの森で行う探究は、パウロの森の動植物図鑑を作ろうというテーマでやっている。

麻布大学という食品系、獣医系が強い大学と連携し、パウロのオリジナルの中華まんを開発している。今年は大豆ミートを使ったオリジナルの中華まんを麻布大学の学園祭で販売することが決定した。梅干しにしても中華まんにしても、本校の探究の場合はものを作って「よかった」で終わりではなく、例えば大豆ミートを使う理由、代替肉と呼ばれているが、肉を使わない理由がどのSDGsと関連しているのか、どういう貢献があるのかということまでしっかり考えさせて、年度末に研究発表としてまとめている。実際に中華まんを作るにはメニュー作りから考え、何度も試作する。実際に食品会社に行き、工場で作成をしてオリジナルのものを作って行く。またそれだけではなく、市場調査から始めて、これをいくらで、どのターゲットにというマーケティング、それから原価計算も生徒に考えさせる。赤字になることや、高い値段に設定すると学園祭で売れなくなってしまうことも生徒主体で考えさせることを目的にしている。

本校の場合は大学の附属がないため、どのように外部とつながっていくかを1つ1つ模索しながら、生徒が少しでも興味が持てるようなゼミを開講できるように考えている。毎年アップデートしていけるように我々も楽しみながら生徒と一緒にやっているのが現状である。

最後になるが、SDGs関係でいうと、探究ゼミとキャリアデザインということで、今年の夏、認定NPO法人開発教育協会、聖心女子大学グローバル共生研究所と気候変動に関するワークショップをオンラインで実施した。また、企業等と絡んでかなり壮大にSDGsと企業の取り組みについて公開授業を行った。本校が大学や企業と提携しているものが地元になんか広がっていき、いろいろな活動ができるようになった。

たいへん制約のある校舎、教員の人数の中で回していかなければいけないが、コンパクトな学校であるため、かなり小回りがきく中で探究に関しては模索しながら行っている。

〈質問〉

探究の授業の主任役をやっているが、探究のテーマ等に苦慮している。大学や企業とタイアップしていることが多いのかなと感じたのだが、特に企業等とタイアップする際はどのように捜しているのか。また、決まった後に生徒たちにどのような事前指導を行っているのか。

〈回答〉

捜し方であるが、本校はカトリック精神のもと、もともとは「他者のために」ということで、ボランティア活動を通して外部とつながるといいうところからスタートしている。ただ、コロナで保育園のボランティアとか、対人のボランティアがほぼなくなってしまっていて、どうするかを考えたとき、1つボランティア系でプロバスケットボールチームの集客が現在非常に困っているということで、試合を見に来るだけではなく、一緒にチームのPRやスポーツマーケティングでどう集客するかを考えてみないかというコラボを頂いたり、ボランティアをしていて地元の企業がそこを見て頂いたり、そのようなつながりが強いということがある。麻布大学との共同は本校が山の中の環境にあるので、獣医とか食品の方に毎年、受験をする、進むということから、実際に近い距離なので、大学がパウロのことを見てくれて、高大接続の協定を結んで、本格的な探究をやらないかと声をかけて頂いたことが実際である。

ただ、我々教員が捜してこない、生徒が見つけてこられるものでもない、そこは生徒とマッチしているかどうか。すごく難しいことを実施されている企業もあるが、こちらの準備が届かずに、実際になかなか内容が詰められないものもあるが、そこは本校の生徒の実態を見て、ジョイントして頂けるかどうかを1つ1つ捜しているということが現状である。

生徒への事前指導は、特に行っていない。良い意味でその場で頑張るといいうか、もちろん大学に行く際は気をつけることは指導するが、どちらかといえば、生徒が気になることをその場でどんどん質問してもらおうというように、ガチガチの指導や事前の根回しのようなものは行っていない。

## 特色教育部会 「総括」

鶯谷中学高等学校 校長  
横山 豊

ポストコロナ時代の私学の特色ある教育という教育目標で岐阜女子大学教授の松井徹先生と NPO 法人 very50 代表理事の菅谷亮介様のご講演を聴かせて頂きました。松井先生からはタブレット端末を活用したデータ駆動型の教育への転換という演題で講演を頂きました。いかにデータを集めて集積をするか、そしてどのように活用・利用をしていくのか。具体的な活用例をたくさん見せて頂きながら、ポストコロナの時代にどのような方向に向かえばよいのかということをお伝え頂きました。菅谷様からはコロナ時代の探究の作り方と題した講演を頂きました。興味の幅を子供たちの中で広げてやること、そしてプロジェクトの中でテーマの選定をする。失敗を恐れずに一步を踏み出す力を付けるということを教えて頂きました。先生も生徒たちも楽しくなければいけない、その通りだと思います。そして岐阜聖徳学園高等学校教諭の中村充先生と鶯谷中学高等学校教諭の中島康貴先生の実践を発表させて頂き、研究協議の中では島根県の開星中学高等学校、愛知県の名古屋市邨学園中学高等学校、岐阜県の中部大学第一高等学校、東京都の聖パウロ高等学校の先生方に各学校の特色ある教育を紹介して頂き、いろいろな意見交換もさせて頂きました。



現在のウイズ・コロナの時代、これはいずれ終わり、来るべきポストコロナの時代の教育のあり方について、私なりに様々なことを考える機会となりました。皆様の学校の教育にとって、少しでも本日の研修会が参考になれば幸いです。



# 参加者アンケート（感想）

## 第1日「全体集会」

### ◇岐阜県私立学校活動紹介

- 学校活動紹介においては、ハンドベル、聖歌隊、ダンス部のコラボレーションが素晴らしかった。また、ギター・マンドリン演奏は珍しい楽器による演奏で驚いた。
- ハンドベルの音色には改めて心を癒やされた。
- ギター・マンドリン部、ハンドベル、ダンス部のステージ、素晴らしかった。
- 活動紹介の発表に感動した。他校にはできない各校の独自性がしっかりと出ている。
- 参加する度に思うが、私立学校活動紹介で生徒たちの活動ぶりを拝見するのは楽しみでもあり、ある意味励みにもなる。
- 毎回学校活動紹介のすばらしさに感動を覚えている。生き生きとした活動を実践できる私学教育の粋を見せていただいた。
- 富田高校、聖マリア女学院高校の活動報告は素晴らしかった。本校の活動に更に頑張れと言われているようなエールをいただいた。
- 聖マリア女学院高校の聖歌隊、ハンドベル、ダンス部の演奏に癒やされた。
- 生徒たちの明るく自信を感じられる取組に熱いものを感じた。コロナ禍で披露の機会が少なく悔しい思いをしてきただろう。今回披露できてとてもよかったのではないかな。これからも頑張ってもらいたい。
- ハンドベル演奏では、ダンスも含めて感動した。
- コロナ禍の中、頑張っている生徒の様子は素晴らしい。生徒の発表の場として今後も継続してほしい。我々もパワーをもらうことができる。
- ギター・マンドリン演奏、ハンドベル演奏など岐阜の学校活動のレベルの高さに感動した。
- 高校生の素晴らしいパフォーマンスに感動した。
- 素晴らしい演奏を拝聴し、日常業務から研修の場へと気持ちを切り換えることができた。
- ハンドベル演奏もギター・マンドリン演奏も生徒たちが真剣に取り組んでいて素晴らしかった。
- 生徒たちの生き生きとした顔つきに感動した。
- マンドリン演奏と聖マリア校の共演（ベル、歌、ダンス）のような芸術が入り、生徒の表情もよく伺えて素晴らしかった。
- 生徒による発表が素晴らしかった。生徒の研究活動発表などがあってもよいのではないかな。
- 素晴らしかった、コロナ禍で活動が制限させる中、一生懸命取り組んでいる姿が伺えた。

### ◇報告 I（吉田 晋 日本私立中学高等学校連合会会長）

- 幅広いご見識と私学人としてのお考えと歯切れのよい話にはいつも刺激を受ける。
- 話されることが県の協会や加盟校でシェアされていない。国と闘って下さっているのに末端はそれを無にしていると感じた。
- 近年の変化の激しい教育動向を踏まえながら、私学が抱える課題認識に沿った研修内容で大変勉強になった。
- いつも日本の教育課題を教えていただいている。学校運営の宿題をいつもいただいているようだ。
- 吉田会長の私学教育に対する熱意と行動力には毎回感銘している。国に対しての要望や提言、文部科学省からの情報など参考になる。
- 少子化が進み日本において一人一人の質を高める教育が必要だという考えに同感だ
- 私学におかれた現状を知ることができ有意義だった。これからも定期的に聞きたい。
- 教育現場の frontline に立っている者としては吉田会長の報告は大変示唆に富み、かつ刺激を受けるものであった。惜むらくは時間に限りがあったこと。もう少し細かく拝聴したい。
- 私学情勢について、詳しく知ることができ非常に勉強になった。読み切れなかった資料は帰って読み、いろいろ調べていきたい。知識が少なく、制度についても勉強していかなくてはならないと感じた。



- 初めて大会に参加させていただいたが、日本全体の教育課題、その中で私学ができることなどいろいろ考えることができた。自校に戻ってからも話題にしていきたい。
- 経常費補助、働き方改革、英語教育など具体的、現実的な話が多く、説得力があり大変参考になった。
- 資料に沿った適切なもので大変参考になった。
- 日常的に生徒に接しているだけでは感じられない教育現場を取り巻く状況に俯瞰的な視座をいただいた。
- 日本全体の流れを知ることができ良かった。ICTのネットワークの問題等はどこにでもあると感じた。
- 私学助成や軽減のおかげで私学のよい所を見直す保護者も増えたと思う。公立志向の強い地域だが、吉田会長の熱意に負けないよう頑張りたい。
- 教育政策などの報告が具体的で、今後の私学の在り方等参考になった。
- コロナ換気による充熱費を政府へ要求していると聞き、細やかな部分への配慮もされて素晴らしいと感銘した。
- 心に響き、我が国の教育行政に対する危機意識を強く感じた。国のトップがいかに教育現場やこの国の未来について認識が浅く視野が狭くなっているかが気がかりだ。
- 私学のこれからはしっかりと考え、私学ならではの試みを実践していきたい。日本を代表するような生徒を育成していきたい。
- 教育者という立場では考えたこともない経営者サイドの話は大変参考になった。
- 全国各校の取組と教育の真髄の格差が生じないよう私学経営がなされないといけないと思う。毎回この大会で学んでいくことが多い。4年ぶりの参加だったが、今後も是非参加していきたい。
- 教育政策と私学情熱の資料を再度熟読し、今後の学校運営について検討したい。
- 私学をめぐる情勢について学び、様々な資料をいただいた。学校に持ち帰り、更に学んでいきたい。
- 資料もあり、とても興味深く、また気持ちを新たに前進させる内容だった。
- 私学経営に対しての誇りと熱意が伝わった。公立の真似事ばかりでは良くないと感じることができた。
- 私学の主体性、今後の国に対しての取り組みについて考えさせられるものであった。
- 私学の現状をストレートに伺うことができ、また資料も充実しており、勉強になった。
- 毎年楽しみにしている。今年度も私学を取り巻く情勢等を中心に大変興味深い話で勉強になった。
- 時間的にももう少しゆとりがあるとよかったが、それでも教育政策と私学情勢を知ることができ参考となった。
- 吉田会長の熱意から自分も熱意をもって私学に今後も携わる気持ちを一新した。
- 私学教育における現状や課題だけでなく日本全体としての課題、これからの方向性などわかりやすく説明していただき大変勉強になった。
- 私学の英語の大切さを再確認した。本校の英語科とも話し合い、特色ある英語教育を続けていきたい。
- とても興味深かった。国の政策に振り回されるばかりで、何が本当のねらいなのかも分からず、対応だけをしている感じだったので、説明解説いただきよかった。一教員だが、私学の教員として誇りを持って日々の業務にあたりたい。
- 納得させられる内容が多く、今後の生き残りをかけて励みにもなった。広い視野と私学の特性をいかした教育を進めていかなければいけないと強く感じた。
- 大変感銘を受けた。今後の国の教育政策に対して注視していかなければと感じさせられた。
- 資料がしっかりとっていて文部科学省等の考え方、方向性などがよくわかり参考となった。
- 文部科学省から直接情報が届きにくい現場の私学教員にとってコンサイスな情勢のまとめと感じた。
- 普段の業務を行っている中でなかなか知る機会がない話もあり、改めて私学の在り方を考えることができた。また、いろいろな研修もあり、ICTについて更に深めたいと思っているので参加したい。
- 普段はなかなか気にかけないような私立学校の財政など、吉田先生による私立学校の価値、その生の声を聞くことができて大変貴重だった。
- 参加するたびに刺激をいただいている。日本の未来、子供たちの未来に私学として責任を背負う。その為の示唆をいただいた。
- 私学をめぐる情勢についての理解が深まり、より私学としての本学の存在意義や方向性を考えることができた。



## ◇報告Ⅱ（平方邦行 一般財団法人日本私学教育研究所所長）

- 時勢をとらえた大変参考になる内容だった。本大会に足を運び、熱意に触れることができた。
- 「創造力」についての話が聞けなかったのが残念だ。
- 「予測不可能な社会現象の中で、子供たちが的確に判断できる豊かな創造力を身につけさせなければならない」という話が心に残った。
- いつも日本の教育課題を教えていただき、毎回、学校運営の宿題をいただいている。
- 教育現場の前線に立っている者としては、大変示唆に富み、かつ刺激を受けるものであった。惜しむらくは時間に限りがあったことだ。もう少し細かく拝聴できればと感じた。
- 大切なキーワードを知ることができた。特にブルーム型タキシノミーについて理解し、それがいかに学校教育に落とし込むかについて考えていきたい。
- 私学が差を出しやすいところ（英語教育以外にももっと時間をかけてお聞きしたい）は何かということのを伺え、勉強になった。
- グローバル教育の拡充ということを単一コース（弊社）だけに限らず、全コースに導入すべきだと感じた。美しい日本について国語力（読解はもちろん論理力や表現力）を基本にして、外に向けて発信できる力の養成は、英語力だけではなく課題解決力も大切である。
- 変容する社会で生き抜くために、自己変容型知性を身につける教育が必要であることを改めて認識できた。本校ではまだ知識偏重型の教育の色が濃いので、改革をしなければならないと強く感じた。また、建学の精神に基づいた特色ある教育に未来への対応力をどう組み込んでいくのか課題が多いことも理解できた。
- 時間をもっと取っていただき、さらに詳しく説明していただきたい。
- 私学の特色を活かして選ばれる学校にしていきたい。
- 私学とはどうあるべきかを考えるよい機会となった。建学の精神と現実の狭間で残すべきところは残し、変えるべきところは変えながら本校の進むべき道を考えていきたい。
- 話が途中で終わったことは大変残念だ。創造性をいかに育むかについての議論は大事なことである。是非来年は1時間近くの時間をとってほしい。
- 独自性、創造性等、学校教育を再構築することの重要性を改めて認識した。また、3年後、5年後の生徒像、教師像、学校文化を予見しイメージすることも大切だと感じた。
- 費用面でのしくみが興味深かった。α世代のためのブルームタキシノミー達成のための思考コード共有理解していきたい。何かのためではなく知の水平線を広げる、そこにも目をむけた探究を作りたい。
- 現在の教育現場における実情について話を聞くことができた。普段あまり意識したことのない点についても話を聞くことができ大変参考になった。
- 平方所長の私立学校の価値、その生の声を聞くことができて大変貴重だった。また、日本私学教育研究所主催の各研修会のダイジェストを冊子にまとめていただき、今後の私立学校が目指すべき方向性がきちんと全国に広く知れ渡り、共同体として、私立学校のあり方を考えていける、考えていかななくてはならない時代であると改めて実感した。



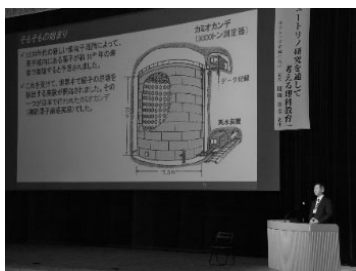
## ◇記念講演（梶田隆章 東京大学宇宙線研究所教授）

- 大変興味深く拝聴させていただいた。理科教員として簡単にあきらめることなく根気強く何かに努力し続けることの大切さを伝えていきたい。本当に素晴らしい内容だった。
- 研究をする方法について、個からチームで行うことが大切であることを教えられた。
- わかり易かった。人柄がノーベル賞に結びついたと感じた。
- 控えめな表現であっても今の日本の教育に対する根本的で重要なものであった。
- 高校生を意識した、非常にわかりやすい講演だった。



- 「純粋に自然を知る営み」という話が印象的だった。経済的利潤の追求ではなく、自分自身の好きな物、興味関心のある物を見つけられるよう生徒、児童を導いていくことが理想である。
- 難しいニュートリノのことではなく教育の根本を示していただいた内容だった。本校の教員そして生徒たち、又、保護者たちにも聞かせたい内容だ。
- コロナ禍もあり、今の学生はみんなで何かをすることが少ないと思うが、「チームワークで何かを成し遂げる経験が大事」ということがとても重要なことだと思った。自分自身もチームで活動したことはとても大切な思い出となっている。
- カミオカンデのことが詳しくわかり、知識が増えた。生徒たちが未来の夢を持ち続けられる教育の大切さをより強く感じた。
- 中々理解できないにもかかわらず未知の領域の取り組みに敬服している。
- 流行の研究や役に立つ研究ばかりでなく人類の知の地平線を広げるような研究の大切さを再確認した。その視点をもって共同、分担しながら探究活動を促したい。
- たゆまぬ研究をされている梶田氏の話が聞けてよかった。どう子供たちを育てるか考えさせられた。
- 梶田教授から直接話しを聞くことができ感動した。これからの教育の役割がより鮮明となった。
- 梶田先生の講演が大会の参加を決めた1つの理由である。やはり一流の人はなんといってもすごい。人間味のある方で親近感を得た。
- とてもわかりやすく構成され素人にも理解できた。また生徒に伝えたい内容もあった。
- わかりやすく、穏やかな語り口だったが、先生の研究への思いが伝わる貴重な話を聞くことができた。
- 梶田先生の人柄がうかがえるもので、たいへん心地よく拝聴させていただいた。一つのことに探究するだけの時間を高校生に持たせることが大切という考えは強く納得した。
- 理科教育における指導の在り方について話があり、今後の学習、進路指導に活かしたい。
- 中高生のみならず教員のメッセージとして大変すばらしいものだった。
- 専門的で難しいものであったが、中高生に望む点が納得させられるものであった。
- とても感動した。生徒に伝えたい言葉、話が多くぜひ学校で多くの教員と共有し、生徒にも伝えたい。
- 興味関心を持ったことに対して努力し続けることの大切さを学んだ。
- 物理学とは縁遠い者だが、初心者として（だからなお？）ひきこまれる講演だった。謎を解き明かしたいワクワク感が研究の原動力にあったという話が特に印象に残っている。ノイズから見えてくるもの、これは人文科学の世界でも大切にしたい視点だ。
- 難しい分野にかかわらずとてもわかりやすく、そして興味を持って聞くことができた。教育現場、学校においてもこれはとても大切なことと改めて感じた。
- 夢を実現した取り組みなど学びになった。
- 「教育とは何か」を自問するととてもよい機会となった。
- 探究学習の本質を我々教育者に教示していただいた感があり、圧巻だった、感動した。
- 2度目の拝聴だが、科学者としての余裕が感じられる。「地平線を求めてもいつまでも日が昇らない人もいるのだらうなあ」と思っている。人柄が出ていて心地よいものだった。
- 大変興味深かった。男子生徒も女子生徒も関係なく、純粋に自分が興味を抱いたこと、まだ分かっていないことを研究し、解明する楽しさが経験できる社会、将来に夢や希望を持てる国にしていかなければならないと自分の使命を改めて確認させられた。女子教育に携わる教員として現場で何ができるかを考えていきたい。
- 理科教育に関しての現状や課題がこれからの日本にとって重要なことと感じた。
- 非常に楽しく聞くことができた。難しいと思うが、本校で講演をお願いしたい。ニュートリノやカミオカンデなどの言葉は知っていても、中身はよくわかっていなかったもので、そういう話を聞くことができたことは大変貴重であった。また梶田先生が気になると言っていた「旧帝大の女子学生の割合の低さ」、「日本の若者の将来への肯定感の低さ」は非常に重要な課題だ。
- 専門分野外の私にまでゆっくり理解できる内容であった。研究成果の大きさはもちろん人柄が成果につながっていると感じた。
- 私たちが実際に生徒たちへアプローチするために新たな引き出しを与えていただいた。特に、時間内で迅速に一つの正解を出さなければならないことなど、実際社会ではほとんどないのではないかと問には全くその通りだと感じた。
- とても興味深く、提言に関しては我々も考えさせられる部分があった。確かに研究者を目指すような土壌はぜひ作りたい。だが、私もDr.まで出たがアカデミックな正解は若者に対して厳しく、勧められない。この状況を改善して欲しい。
- 私自身、専門に学んできた者、また教育者として生徒に話ができる内容が多くあり、参考になった。

- 研究に取り組む姿勢や物事の考え方に共感すると共に、今後の学習指導や生徒指導に役立つ理念を学ぶことができた。
- 時折ユーモアを交えながら、今の教育の問題を鋭く指摘しておられるという印象が強い。
- 仮説をたてて研究、疑問を無視せずに追求する姿勢に感銘を受けた。
- 純粋に子供たちへの想いを語っていただき、それを大切にして教育にあたりたい。大切にしたいかつ同意できるキーワードを多く聞くことができた。
- スーパーカミオカンデ（岐阜県）にちなんだ講師として梶田先生に講演いただいたことは大変よかった。また、ご自身の研究を振り返って理科教育や日本の教育について、提言や課題を指摘されたが、一つひとつに納得させられた。貴重な講演をお聴きできたことを嬉しく思う。
- 研究者としての視点から今の教育に求めたいことをいくつも話していただき、生徒にも折りを見て伝えたい。
- 「神岡でのニュートリノ研究を通して考える理科教育」を楽しみに参加した。わかりやすく、さらに詳しく聞きたいと思うくらいに時間があつと言う間に過ぎた。
- 物理の教員なので、大変楽しみにしていた。スーパーカミオカンデは、授業の中で良く取り上げているが、より具体的に理解することができた。
- 記念講演では、貴重な話を聞くことができた。先生の体験を踏まえた、現在の生徒に対するメッセージは是非伝えたい。
- 「自分の思うことをやり抜く力、大切なものに出会ったときに、それに気づく力が大切」という言葉に深く共感した。
- 中高生に時間を気にせず何かを調べる経験をさせてほしいという言葉は、分かってはいるが、なかなか実践させられずもどかしい。
- 大変興味深く聞かせていただいた。難しい問題をわかりやすく話していただいたので物理を知らない私もよくわかった。最後に示していただいた統計はショックだった。
- カミオカンデの苦労話を聞くことができたことに加え、理系教育の課題も見えたことが良かった。
- 感動的だった。時代が変わっても、大事なことはシンプルで、学問の基本は自然や世界への疑問からそこを視野に入れて教育を行っていきたい。
- 役に立つか立たないかだけでなく、知の地平線を広げるような研究もあるという言葉に考えを改められた思いがした。自分自身一度立ち止まって何をすべきか、何を伝えたいのか考えたい。
- 正直ニュートリノの専門的なことはよくわからない部分もあったが、先生の教育現場への問いかけ中高生へのメッセージなどは確かにそうだと改めて確認ができた。
- 普段なかなか聞けない話や裏話が聞け、とてもよかった。説得力がある話で一つ一つがとても参考になった。
- 貴重な話をしていただき、ニュートリノについての知識を深めることができた。話の折々に現在の生徒たちへのメッセージ（心構え）を交えていたことが特に印象に残っている。生徒たちが学校生活の中で、時間を考えずに没頭して取り組めるような、探究活動のサポートをしていきたい。



#### ◇その他

- 学校訪問や視察（社会見学）も行っていたきたい。
- 充実した内容の全体集会であったが、もう少しコンパクトにして、終了を16:30頃にしてほしい。
- 会場がバスでの移動のため路線バス以外に臨時バスがあれば有り難い。
- 全国各地で開催しているが、その土地についての研修ができずに終わってしまう。なかなか難しいことだが、2泊3日で中日の午後を学校視察や見学というようなプログラムにすると、その土地の実践例も含め研修の価値が上がるのではないか。

## 第2日「部会」

### ◆私学経営部会

#### 講演Ⅰ（広石英記 東京電機大学副学長）

- 常に考えてはいるものの、中々うまく改革に辿り着かない現状に、少し明るい光を見出せるような思いになった。全職員と生徒・保護者が同じベクトルで進むことができ「悩んだときに戻ることができる学校づくり」に尽力したい。
- 私学経営にとって根源的な問題をご教示いただき大変参考になった。（「建学の精神」をどのようにブレイクダウンして GP.SP に落とし込んでいくか。）
- 「建学の精神なき改革は、無定見な迷走」この言葉を心に留めておきたい。
- 最終目標から、そこまでの道筋、手段や方法を検討する流れは普段の業務の中でも（無意識的に）行っていたことだったので、講演内で言語化していただき、自身の自信に繋がった。また、改めて頭の中を整理したい。
- 大変勉強・参考になった。本校にも建学の精神「学園三箴」があり、これを戦後「実践目標」に落とし込んで教育にあたってきた。今の時代に応じた GP の作成を考えていたので生かせそうである。
- 建学の精神の具現化に悩んでいる本校にとってとても参考になった。また先進的な取り組みをされている学校の事例紹介も大変刺激を受けた。
- 建学の精神を教職員全体で共有することや建学の精神の具体化に悩み続けていたので勉強になった。
- SP を再定義しようと準備している本校にとって大変有益だった。正直どのように取り組むべきか、悩んでいたが、建学の精神を GP に変換し「見える化」の工夫を検討するという非常にわかりやすい手順を示していただいたおかげで、希望がでてきた。
- 「建学の精神」の再創造と教育イノベーションは、我が校でもさっそく取り組みたい。もう一度整理をしていく中で、チーム学校を強めていきたい。
- いつも建学の精神の具現化を目指そうと教員たちに言ってきたが、この言葉を具体的にわかりやすく、そしてどんな教育活動の中でも実践していかななくてはならないかがはっきりとわかった。また、それには特に GP が大切だと感じた。
- 建学の精神を 21 世紀の学力等に置き換えていくなどの手順について、大変参考になった。
- スクールミッション等、今、必要とされる課題について明解に説明していただいた。
- 役立つ内容だった。各校のグラディエーションポリシーを確認してみたい。
- 自校の教育活動と建学の理念をどう結びつけていくか、具体的な例や手法が示され、多くのヒントをいただいた。
- 本校の建学の精神も悪い状態だ。早速スクールミッションを具体的なスクールポリシーに落とし込み、平素の活動で実践できるようチームを組んで取り組んでいきたい。
- 本校においても「建学の精神」を再認識し、日々の教育にどう活かせるかを考えていきたい。
- SP、GP は設定しているが、まだまだ浅いと感じた。すぐに学校で協議したい。
- 建学の精神の見える化、共有の方法について、現在の状態・状況を踏まえてわかりやすく端的にスクールポリシー、教育の柱としていくということが参考となった。

#### 講演Ⅱ（大橋博行 有限会社大橋量器代表取締役）

- 「自社は何屋か？」と、何にこだわるべきかに改めて気づかせていただいた。
- 何ごとにも時代に応じた創意工夫が必要である。企業でのノウハウは学校経営においても応用できると思う。「幅広い工夫⇒実践」をチームで行う中心となっていかなければならない。
- 伝統を守りながら、新しい事へのチャレンジがないと伝統さえもすたれてしまうと感じた。記念講演（梶田先生）にも通じるが、失敗から先に進めることもあるということが大変勉強になった。
- 伝統の地場産業の挑戦も教育改革も同じ問題点や着目点、将来への取り組みを抱えているように感じた。教育の危機も知恵を出し合い工夫して乗り越えていかなければいけない。
- 地域産業での取り組みと地域（学校）とのタイアップの事例が聞きたい。
- 企業がどれだけ努力しているか、とても苦しい思いをしていることがよく理解できた。

#### パネル・ディスカッション

- 日々現場で頑張っておられる先生方の考えを知るとともに、ヒントをいただくことが多く有り難い。ただ、その一方で、自分の仕事の責任の重さを痛感している。
- 地方の私学の大変さ、また工夫など大変勉強になった。
- 校長としての役割など、それぞれの先生方のビジョンを聞くことができ参考になった。

- 進行もよく、特に各学校の熱量をじかに感じることができ、自分の学校を十分に振り返りたい。
- 今後の改革改善に向けてのヒントをいただいた。参加して良かった。
- 講演（広石先生）との連動性があったよかった。それぞれのパネリストの話が具体的で、敬服した。



#### ◆教育課程部会

##### 講演Ⅰ（炭谷俊樹 ラーンネット・グローバルスクール代表／神戸情報大学院大学学長）

- とても興味深い内容で全て導入はできないが、多くの点で参考になった。特に探究サイクルに関しては、本校に戻ってからも教員がいつも意識してほしいことの一つとして伝えたい。
- 探究について、生徒とのゴールイメージ（先生と生徒との意図の共有）をもつことの大切さを感じた。探究学習の方法や発表、まとめの仕方を今一度教えていきたい。
- フリースクール、ティーンネットの教育方針は興味深いものがあつたが、高等学校で探究中心のカリキュラムに踏み込むのは容易ではない。
- 自分がこれまで抱いていた「探究」のイメージが覆された。「探究と基礎学力は比例する」は驚いた。
- 具体例とその根底にある探究の捉え方を伺うことができ良かった。本校の実践に生かすことができる点も具体的にイメージできた。
- 既存の学校とは異なる視点で運営されているフリースクールのあり方を知り、生徒の内面を尊重することで、能力を伸ばさせる方法、特に「探究サイクルを回す」という点を意識し、授業、その他生徒との関わりを設計していきたい。
- 消極的な姿が見受けられる弊校の生徒をいかに探究する方向にできるのか。LGSでの学校づくりのポイントから本校を見比べ、修正ポイントの具体化と変えていける実践希望が生まれた。
- 総合的探究の時間の改革を実施して2年目となるが、本校独自の取り組みとしての外枠は概ねできてきていると感じている。しかし、探究サイクルがしっかり回せていないという課題がある。教員のナビゲーターとしての役割をもっと強化しなければならないことがよくわかった。また、アウトプットの機会ももっと増やす必要性を感じた。学校全体で成果発表会のような行事を取り入れていきたい。
- ラーンネットの考え方「選択、集中、達成感」の考え方すごく参考になった。
- 探究の考え方は、すぐにもちかえて使っていきたい。ナビゲーター、クリエイターといった棲み分けを学校で導入したい。
- 学校のスタイルの違いはあるにせよ、生徒の興味をどのように引き出すか、参考になった。特にポジティブな言葉かけを忘れずに行いたい。
- 自己肯定感は低い生徒が増えてきた今日に対して、探究的な学びを通じて取り組み方や具体例が参考になった。探究力と基礎力との関係は気になっていたが、自らやるものであるとの話で納得できた。
- 探究爆発サイクルについて興味深く聞くことができた。認可校で実践する場合、自由選択が前提となっているため、学習指導要領など多くの制約があり、本格的に探究的な学びを考える場合、根本から見直さなければ難しいと感じた。しかし、多くの点で参考になった。
- 探究学習と学校生活、育てたい生徒像をいかにしてつなげていくかはやはり真剣に考えていかなければと強く感じた。
- フリースクールからみた、ラーンネットのカリキュラム実践は興味深いものだった。どのようなカリキュラムの時程設定や運営システムなのか非常に気になった。

##### 講演Ⅱ（遠山和大 富山大学総合情報基盤センターICT教育推進研究開発部門講師）

- 大学での情報処理の話は興味深かった。特に教科書作成にあたって、「どう使うか」から「何を作るか」という点が大きく変わったところだということは印象深い。
- 情報教育一元化に向けての取り組み、シラバス、教科書の策定までの苦労が伝わってきた。

- 高校の視点からだけでなく大学の視点から ICT 教育の重要性を見るのはとても大事だ。現場がどのように変化しているか、知らないのは高校教師も同じことだ。
- ICT や情報について参考になる情報がたくさんあった。
- 自分自身の「情報処理と仕事」の歩みを整理できたとともに、現代の大学教育における情報教育の位置づけを分かり易く教えていただいた。
- 前半は中高生にも役立つ話だった。後半は教育課程を考える際に必要な視点を様々教えていただいた。

#### 実践発表 I・II

(森永武人 神戸学院大学附属中学高等学校教諭)

- 探究についての発表はとても面白く興味深かった。特に講演会を中心とした特別活動について本校でも自分のクラスなどで実践できるものはないかと考えながら聞かせていただいた。
- 中身は非常に濃く、類似例も掲げられたため、分量が多すぎた。スライドも細かく、話のスピードも早すぎて、消化不良を起こしてしまった。
- 素晴らしい実践にもかかわらず、コロナ禍でその検証が十分になされていないところが勿体ない。
- 私立大学付属校(神戸学院大学附属)の学校運営を知る機会となった。
- 総合的な探究の時間について、各学年、具体的な活動内容がありよかった。

(松本兼太郎 麗澤瑞浪中学高等学校教頭)

- 大阪大学研究チームに課題の洗い出しをしてもらったことが素晴らしい。
- 学校の課題を外部によって洗い出してもらい、改革につながる動きを紹介が参考になった。
- 麗澤瑞浪高等学校は寮についての話を聞き、本校も 300 名の寮生をかかえており大変参考になった。
- 本校のことを想定しながら拝聴させていただいた。特に最後の「麗澤さ」の実践報告は本当に参考になった。持ち帰り本校の見直しを行っていききたい。

#### (その他)

- 教育課程部会ということで、今年度 6 月に大阪で開催された私立学校専門研修会・教育課程部会とはやや異なり、探究と ICT の報告が中心であった。特に探究に関しての報告・講演は本校で参考になる点が多く、これからの更なる発展のための検討テーマとして考えたい。大学における情報の捉え方は個人的には面白いものであり、我々があまり知らない大学の実情が垣間見ることができた。
- 探究については、本校では思うように進んでいないのが現状であり、今回の 4 名の先生方の話は大変参考になった。特に実践例を豊富にあげていただき、本校でも取り入れていきたい。
- 探究活動や ICT 教育について、自校では遅れていることも多いので、参考になった。ただ、取り入れたいと思うが、全体として動けるかが不安だ。自校に戻ってから、チームとして動けるように、まずは教員同士で情報共有をしていきたい。
- 講演、実践発表ともに「子供の主体性、変容」にきちんと丁寧に目を向けられた取り組みをされていて探究の未来のあるべき姿を再認識した。
- 教育課程部門とすれば、現在は ①新学習要領のスタート②具体として観点別評価の実質スタート③情報の共通テストへの採用が最近の話題であり、この点での発表や講演も聞きたい。
- それぞれの方面、角度からの講演や発表はとても興味深く、これからの指導の参考になった。
- 2 つの講演はどちらも勉強になったし、実践発表も具体的な実践例などを知ることができ、とても充実した時間を過ごすことができた。成功例だけでなく、うまくいかなかったことなども教えていただき、自校にあてはまることが多かった。
- アクティブラーニングの授業を増やすのはよいが、結果として生徒が自宅で自学せざるを得ない状況が本校では見られる。今後どうバランスをとっていくかが課題だ。「主体的、対話的で深い学び」を意識して活動していく必要性を実感した。
- 自分の学校の取り組みに、講演内容で教えていただいたことや実践発表の内容をどのように転用して取り込めるかを考えながら聞かせていただいた。大変よい気づきの時間となった。
- 総合的な探究の時間について、本校でも取り組み方の改善が必要と感じた。有意義な時間だった。
- 参考になる点が多々あった。情報 I は共通テストの課題だが、大学の立ち位置をよく理解できた。松本先生の発表は表と裏の話をしていただき、課題も聞くことができて本校に役立つ情報だった。
- 探究学習に関する考え方、具体的な進め方の一例を学ぶことができた。今後本校で探究を構築していく際の参考になった。

- 学校（教育界）以外の方の講演も取り入れてほしい。井の中の蛙になるのを防ぐために。
- 探究的学習や、総合的な探究の時間についてはどの学校においても課題となっている。いろいろ参考になることが多くあった。
- 探究・ICT教育について、本校でも対応しようと努める中、参考になる内容が多くあった。
- 発表された学校の実践や特色が今後のヒントになった。新学習指導要領、学年進行の過渡期であり、教育課程設定の工夫や学校経営目標実現に向けた特色ある教育課程等についても知りたい。
- 総合的な探究活動、ICT教育など、今、学校現場で直面する課題だけに大変参考になる事象が多くあった。



#### ◆法人管理事務運営部会

基調講演（工藤誠一 聖光学院中学高等学校理事長・校長／佐々木陽平 静岡聖光学院中学高等学校 副教頭・静岡聖光学院中学校ラグビー部監督・中高統括）

- 時間管理（時間外を含む）を確立していくことを数年前より模索しておるが、何を行うかが定まらず、今回の内容は参考の一つと考えている。
- それぞれの先生の話に刺激を受けた。特に佐々木先生の部活動の話、部活動の意義、目的についても改めて考えさせられた。
- 工藤先生のプレゼン力、佐々木先生の生徒に対する思いがわかり、聖光学院がよい学校だと感じた。
- 部活動の時間外対応は私学にとって非常に大きな課題である。適用法令の差で解決できることではないと感じる。教員の業務に公立、私立はない。
- 工藤先生の昭和の人生すごろくに合わせた人材育成からの転換についての話は自校でも伝えたい。佐々木先生の TALK&FIX を自分の指導でもやってみたい。
- 静岡聖光学院の佐々木先生のラグビー指導方針は勉強になった。工藤先生の話の中の行政分野との連携を図りながらの学校全般の取り組むことも興味深かった。
- 練習時間の短縮や選手（生徒）の主体性を重んじたラグビー部のあり方が大変興味深かった。
- 静岡聖光学院ラグビー部の生徒主体の活動や1週間のトレーニング時間の仕組みなどとても興味深く感じた。その活動が全国出場などで結果を出していることに驚きを感じた。参考になることが多かった。
- ラグビー部の活動が週3日の話を聞き、すべてではないが見直していかなければいけない部分もあるように感じた。とてもよい研修になった。
- 静岡聖光学院ラグビー部が実践している子供たちの自主性・主体性を大切にする取り組みは素晴らしい。
- 私自身が励まされるものであり、参加してよかった。私学の部活動のあり方について、本校でも担当教員を巻き込んで議論を活性化したい。

実践発表（中島政彦 学校法人滝学園学園長）

- 『滝教育研究所』取り組み、文化、スポーツ活動を継続する中での働き方改革は興味深く素晴らしい。
- 株式会社滝教育研究所を設立して、業務と副業という形を作ったことはとても興味深い。業務外の部活動の場合、顧問が変わった場合はどうなるのだろうか。その都度変わったら、生徒が振り回されないだろうか。（そんなに顧問が変わらないとも思うが）
- クラブ活動での業務委託（各クラブ）報酬のそれぞれ月額ほどのくらいなのか知りたい。
- 部活動運営について、学校管理下にするか外部組織管理下にすべきかを考えていきたい。
- 滝学園教育研究所の取り組みは大変参考になった。
- 現状の部活動の問題点を法規制の観点から考えるきっかけとなった。部活動指導員の外部委託について、その考え方、フレームワークなど参考になる部分が多かった。
- 部活動指導の外部委託は何となく考えていたが、実際に導入している事例を聞くことができ参考になった。



## 法人管理事務運営分科会

### 講演（町支大祐 帝京大学教職大学院専任講師）

- 話の内容に加え、会場前後の方と意見交換できる機会があり有意義だった。
- 他校の先生方と情報交換ができ、共通の悩み等があることも確認できた。今後に大いに活かしたい。
- グループワーク的な時間もあり、対面研修の意義があった。
- 他校と比較することが少ないためか、有意義な時間を過ごすことができた。

### その他

- 工藤先生、中島先生の話しの奥深さはもちろんのこと、佐々木先生の実践内容にもとづく講演に心打たれた。
- どのプログラムも参考になる内容だった。改めて働き方改革への取り組みの重要性を認識した。
- いろいろなキーワードをたくさんメモしたので、持ち帰って今後の学校運営に役立てたい。
- 参加してよかったと思える充実した内容のプログラムばかりだった。講師の選任が大変よかった。
- 記事やテレビで承知していた先生方から生の声を聞くことができ、発想の転換の必要性を強く感じた。町支先生の話も現場目線に近く、大変有益だった。
- 内容がすべてよかった。若い先生の現場で工夫している実践の話が特によかった。町支先生の話はヒントが多くあった。



## 部活動運営分科会

### 講演（吉村光正 経営・組織・人材マネジメントコンサルタント）

- 部活動指導をめぐる問題の課題整理ができ、とても学びがあった。これまでの学校が積み重ねたものも世の中の動向をふまえて対応していく必要があると改めて感じた。
- 吉村先生の講演は非常に参考になった。正直なところもう1時間程聞きたかった。
- 実践例などがわかりやすい講演だった。

### パネル・ディスカッション

- 働き方改革から生じた時間外勤務や部活動の問題は、これまで置き去りにされてきた問題ではあるが、法律に適合しない実態の改善に向けて各校の取り組み、工夫が大変参考になった。
- クラブ活動等、勤務時間外の学校教育のあり方について、とても勉強になった。働き方改革の必要性は理解しつつも、実現へのハードルの多さはなかなか越えがたい悩みだが、新たな発想が必要だと実感した。
- 様々な学校の取り組みに触れることができ、有意義だった。本校も早期に改革すべきだと強く感じた。

### その他

- 学校改革の中で、働き方改革への対応（滝学園）、部活動での改革（静岡聖光学院）の話では、アイデア、生徒や教職員との話し合い等について勉強させられた。決意や覚悟が大切だと感じた。

- 各校の取り組みは参考になった。各学校で抱えている課題は違うが、負けずに取り組みたい。
- 法律のことから各学校の現状工夫がよくわかった。これまでの部活動指導の考えから新たな指導へ変化していく必要があると感じた。
- 部活動運営分科会の参加人数の多さにびっくりした。どの学校も働き方改革において部活動の運営方法に苦慮していることがよく分かった。
- 部活動指導と働き方改革について、改めて勉強となった。部活動の学校方針を明確に捉えることを第一に考えていかなければならない。
- 働き方改革と生徒に必要なもの、何のための部活動なのかと学校として考えなければならぬ。
- 部活動については学校法人として一丁目一番地で改革していかなければならないと考えていたので、工藤先生、佐々木先生、中嶋先生、吉村先生の講演等は大変参考になった。
- 部活動における課題は、どの私学も抱えており、早急に解決しなければならない問題である。今回の内容は本校で導入できるもの、また学校に合った方法を検討するよい機会になった。
- 働き方改革の時代に、私学のクラブ活動をいかに継続させていくかということに対して、多角的な話を聞くことができた。クラブ活動そのものの時間の使い方、別法人を立ち上げての委託という形式での指導を実質継続させる方法など、とても参考になった。



#### ◆特色教育部会

##### 講演Ⅰ（松井 徹 岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科准教授）

- ICT 活用、探究について非常に興味深かった。今年からスタートした高校探究のカリキュラムを見直しすることができた。
- ICT 活用について、校内で満足することなく、常に新しい情報を取り入れたい。探究について各校の様々な取り組みが参考になった。
- ICT の充実が私立学校の特色として最もアピールしやすい部分であると感じた。特にソフト面の充実がポイントになると実感した。
- ICT の取り組みは、本校でも始めているので、同じような体験や苦労があると思いながら聞かせていただいた。探究に関しては、本当に様々な視野から様々な取り組みがあることを知ることができた。

##### 講演Ⅱ（菅谷亮介 認定 NPO 法人 very50 代表理事）

- 「危機感」「一歩力」の大切さ、本校でも何ができるか模索し実行したい。
- ドキドキ！ワクワク！の時間だった。
- very50 の方の視点がこれからの学校教育には必要だと感じた。

##### 実践発表Ⅰ・Ⅱ

###### （中島康貴 鶯谷中学高等学校教諭）

- 反転授業は私自身も行おうと考えており、大変参考になった。
- ICT 教育の取り組み方について、学校内でどのように進めたかがよくわかり参考になった。
- 活用事例としてよい例、うまくいっている例はたくさんあるが、トラブルやその他の対応を中心に知ることができると否定的な教員に説明がしやすい。その意味で非常に参考になることが多かった。

###### （中村 充 岐阜聖徳学園高等学校教諭）

- 生徒が ICT の活用で肯定的に学校生活を送れているところが印象的だった。
- 学校内でどのように進めたかがよくわかり参考になった。



### 研究協議（全体会）

- 各学校の取り組みは新鮮だった。急な依頼にもかかわらず、スライドや動画を使って説明されていることを見て、「まだまだやらなければ」という思いが湧いた。各先生方がICTを使いこなしていることにも驚いた。
- 探究、ICTに関する様々な方の話を聞くことでよりよい学校教育を模索していく貴重な機会となった。また、特色教育「探究」の本校の取り組みを発表し、各先生方からの質疑応答もあり充実した時間となった。

### その他

- ICTの導入から、教室、学内での活用事例や実践に加えて、様々な苦労や創意工夫を具体的に聞くことができて非常に有益な部会だった。
- 各学校の各先生方の積極的な取組が素晴らしく、少しでも近づきたい。
- 実践報告を聞いて、本校との違いが良くわかった。自校で報告しながら考え方を修正したい。
- 各校悩んでいる問題点が共有できて良かった。各先生から新たな活用方法を学ぶことができたので持ち帰って実践したい。
- 各校の具体的な取り組みを知ることができ、また、探究活動を今後進めていく上での参考になった。
- 様々な学校の取り組みを知ることができ、とても刺激になった。毎日の業務の中でどうしても惰性で働いてしまう節が自分にあり、常に新しいものを吸収しなければと背筋が伸びる思いだった。
- 各学校の特色ある取り組みを具体的に知ることができ、本校と比較して課題や今後の展望を持つことができた。
- 実際の現場での実践例やICT機器のこれまでの導入の流れ、今後の課題など共通しているものもあれば、考えたこともない内容等について話を聞くことができ、とても勉強になった。
- 他校のICTが進んでいることを知り、本校がいかに遅れているかを知った。他校への視察を含め、早急な対応が必要だと感じた。
- ICTは便利になり、いろいろな可能性が生まれると思うので、勉強し研究していきたい。
- 講演と実践発表、どれも勉強になった。ICTの活用は学校間で差があることがわかった。本校は遅れている。
- 各校の急速なICT環境整備、それに伴う先生方の尽力はたいへん共感した。また、様々な教育への活用、大変参考になった。
- 質の非常に高い講演を堪能させていただいた。著名な方ばかりでつながりもでき大変嬉しい。
- 岐阜県ではiPadが優勢のためか、iPadを導入している学校の実践例中心だったが、WindowsやChromebook導入校にとっては、少し遠い話だった。ICT関連の内容は、Apple,Microsoft,Googleをバランス良く配置する配慮もお願いしたい。
- とても参考になった。ICTはとてもハードルの高いものだったと思っていたが、自分自身で高いものにしていただけたと感じた。できることから積極的にチャレンジしていきたい。
- ICTに特化した内容だったが、教育現場としては大変参考になるものだった。本校も来年度よりいよいよiPad導入となり、更に勉強して臨みたい。
- 他校の取り組みや現在の問題点等を聞くことができよかった。自分たちが今後ぶつかる壁を知ることができた。
- 各学校の取り組みを聞いて、どのような目的で取り組んでいるのかだけではなく、苦労されていたこと、工夫されていることなど参考になった。また、本校でも取り入れているICTの活用法についても詳しく知ることができた。各学校の実践事例を知り、本校の生徒たちができることはまだまだたくさんあると強く感じた。
- ICTを活用した探究学習の事例など探究におけるタブレットの活用についての実践紹介をお願いしたい。
- ICTの活用について、各校の取組を聞くことができて参考になった。様々な苦労や失敗談も含めて話していただき、共感できる内容が多く、大変勉強になった。自校でも取り入れられそうなこともいくつかあり、持ち帰って検討したい。
- ICTについて、深く考えることができ、ロイロノートの利便性を理解することができた。



# 参加者数

総参加者数 541 名

## 参加者数（部会別・都道府県別）

### ◆部会別参加者数

No.	部会名	参加者数
1	私学経営部会	147
2	教育課程部会	115
3	法人管理事務運営部会	174
	法人管理事務運営分科会	58
	部活動運営分科会	116
4	特色教育部会	93
5	全体集会のみ参加	12
計		541

### ◆都道府県別参加者数

No.	都道府県	参加者数	No.	都道府県	参加者数	No.	都道府県	参加者数
1	北海道	15	17	石川	13	33	岡山	1
2	青森	0	18	福井	8	34	広島	12
3	岩手	2	19	山梨	12	35	山口	2
4	宮城	2	20	長野	16	36	徳島	1
5	秋田	10	21	岐阜	49	37	香川	7
6	山形	6	22	静岡	45	38	愛媛	2
7	福島	4	23	愛知	113	39	高知	1
8	新潟	2	24	三重	28	40	福岡	9
9	茨城	1	25	滋賀	4	41	佐賀	3
10	栃木	1	26	京都	18	42	長崎	5
11	群馬	2	27	大阪	20	43	熊本	1
12	埼玉	1	28	兵庫	12	44	大分	4
13	千葉	9	29	奈良	3	45	宮崎	1
14	神奈川	11	30	和歌山	2	46	鹿児島	5
15	東京	41	31	鳥取	10	47	沖縄	1
16	富山	10	32	島根	16			
計					46都道府県	541名		

# 開催地・研究目標一覽

回数	開催地	主会場	会期	参加人員
1	東京都	宝仙学園中学高等学校	昭和27年4月27日～29日	185
2	東京都	女子聖学院中学高等学校	昭和28年11月20日～23日	235
3	東京都	早稲田大学	昭和29年11月20日～23日	283
4	東京都	東洋大学	昭和30年11月11日～14日	402
5	京都市	立命館大学	昭和31年11月9日～12日	995
6	東京都	明治大学	昭和32年11月22日～25日	679
7	名古屋	椋山学園大学	昭和33年10月3日～6日	857
8	東京都	法政大学	昭和34年11月20日～23日	846
9	札幌市	北海道学園大学	昭和35年8月20日～23日	958
10	東京都	日本大学	昭和36年11月22日～25日	954
11	横浜市	神奈川大学	昭和37年11月22日～25日	841
12	広島市	進徳女子高等学校	昭和38年11月12日～15日	993
13	東京都	学習院大学	昭和39年11月20日～23日	612
14	福岡県	中村学園女子高等学校	昭和40年11月21日～24日	1,100
15	東京都	明星大学・明星学苑	昭和41年11月3日～6日	750
16	仙台市	東北大学	昭和42年11月5日～8日	1,172
17	東京都	文化女子大学	昭和43年11月22日～25日	1,074
18	大阪市	相愛学園	昭和44年11月15日～18日	2,294
19	宇都宮市	作新学院	昭和45年11月11日～13日	382
20	西宮市	武庫川学院	昭和46年11月11日～13日	2,513
21	東京都	昭和女子大学	昭和47年11月23日～25日	764
22	静岡市	静岡雙葉学園	昭和49年11月7日～9日	926
23	札幌市	札幌市民会館	昭和50年10月2日～4日	978
24	広島市	広島市公会堂	昭和51年10月26日～28日	1,216
25	東京都	千代田女学院中学高等学校	昭和52年11月16日～18日	1,054
26	福岡市	福岡市民会館	昭和53年11月7日～9日	1,714
27	埼玉県	埼玉会館	昭和54年11月20日～22日	1,043
28	仙台市	仙台白百合学園中学高等学校	昭和55年10月22日～24日	1,533
29	京都市	KBS京都放送会館	昭和56年11月12日～14日	1,923
30	東京都	学習院記念会館	昭和57年11月17日～19日	1,370
31	福井市	金井学園	昭和58年10月26日～28日	992
32	札幌市	札幌市民会館	昭和59年9月26日～28日	1,040
33	山口市	山口市市民会館	昭和60年10月31日～11月2日	1,210
34	福岡市	福岡市民会館	昭和61年11月12日～14日	1,696
35	千葉県	千葉県文化会館	昭和62年11月11日～13日	1,867
36	新潟市	新潟県民会館	昭和63年10月19日～21日	1,651
37	大阪市	大阪国際交流センター	平成元年10月25日～27日	2,530
38	東京都	学習院記念会館	平成2年10月24日～26日	1,773
39	愛知県	愛知県勤労会館	平成3年10月23日～25日	1,473
40	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成4年9月30日～10月2日	1,123
41	岡山市	岡山シンフォニーホール	平成5年10月27日～29日	1,306
42	熊本県	熊本市市民会館	平成6年10月26日～28日	1,170
43	神奈川県	国立横浜国際会議場	平成7年10月25日～27日	2,134
44	山形県	米沢女子高等学校	平成8年10月16日～18日	829
45	京都市	京都会館第一ホール	平成9年11月12日～14日	1,222
46	東京都	東京国際フォーラム	平成10年11月4日～6日	1,422

回数	研究目標
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	私学教育本質の究明・明日の教育体制の整備・全人教育の再検討
9	私学教育の将来と教育課程改訂
10	中学校及び高等学校の教育課程及び改訂に伴う問題点の研究・現在の世情に即応する青少年の指導のあり方・私学教育の充実振興を目指す諸方策の討議
11	日本の教育を前進せしめる私学の使命を果たそう―新指導要領の適切な展開と私学プランについて―
12	私学の教育を向上させ、日本の教育を前進させよう
13	中等教育革新のために
14	私学における教育はいかにしたらその実効を上げることが出来るか
15	私学教育の自由とその限界
16	私学教育の特性を発揮し、その内容の質的転換を図る
17	魅力ある私学中高教育の推進のために
18	教育の現代化に適応する私学のあり方
19	新教育課程の私学教育における展開
20	1970年代の私学教育の展開を如何にすべきか
21	1970年代の私学教育の展開―特色ある私学教育とその実践―
22	激動期における私学教育の原点を求めて
23	昭和50年代の私学教育の展開―私学の自主性を高め教育の充実発展をはかる―
24	創造的私学教育の展開とその充実―ひとりひとりのよい資質をのばすために―
25	教育の転換期に立って私学教育を考える―新教育課程をめぐる今日的課題―
26	新教育課程への移行と実践―私学教育の独自性と充実をはかる―
27	新教育課程実践の道―建学の精神と教師の役割―
28	私学の使命と特色教育―新教育課程の展開―
29	今日の中等教育における私学の役割
30	より豊かな私学教育の創造を
31	次代を担う私学教育の独自性と公共性
32	次代を担う私学教育の充実と発展
33	明日をひらく私学教育―私学の原点に立って―
34	豊かな私学教育の展開
35	国際化と近代化を志向する私学教育の発展
36	時代に対応する魅力ある私学教育を求めて
37	21世紀に向けての豊かな私学教育の創造を求めて
38	社会の期待に応える私学教育の推進
39	豊かな人間性の育成を目指す私学教育の推進
40	新しい時代に対応する創造的な私学教育をめざして
41	たしかな私学教育をめざして
42	活力ある私学のあり方を探る
43	21世紀に向かって躍進する私学教育
44	教育改造への試み
45	新しい時代を拓く私学教育の創造と発展
46	民間活力としての私学教育を

回数	開催地	主会場	会期	参加人員
47	静岡県	静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ)	平成11年11月10日～12日	1,042
48	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成12年10月4日～6日	862
49	徳島市	徳島文理大学徳島校	平成13年11月15日～17日	827
50	宮崎市	宮崎観光ホテル	平成14年11月6日～8日	928
51	水戸市・土浦市	茨城県立県民文化センター	平成15年10月29日～31日	1,590
52	福島県	郡山市ホテルハマツ	平成16年10月28日～29日	774
53	神戸市ほか3市	神戸ポートピアホテル	平成17年11月10日～11日	1,383
54	東京都	新高輪プリンスホテル国際館パミール	平成18年11月9日～10日	1,354
55	石川県	石川県立音楽堂コンサートホール	平成19年10月25日～26日	791
56	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成20年10月9日～10日	722
57	松江市・米子市	島根県民会館	平成21年10月22日～23日	505
58	佐世保市	ウインズ佐世保ゲルックホール	平成22年10月14日～15日	621
59	高崎市	群馬音楽センター	平成23年10月27日～28日	437
60	盛岡市	ホテルメトロポリタン盛岡 NEWWING	平成24年10月11日～12日	501
61	大阪市	シェラトン都ホテル大阪	平成25年10月24日～25日	621
62	東京都	新高輪プリンスホテル国際館パミール	平成26年10月16日～17日	1,023
63	長野市	ホテル国際21	平成27年10月29日～30日	592
64	札幌市	京王プラザホテル札幌	平成28年10月27日～28日	587
65	松山市	松山全日空ホテル	平成29年10月19日～20日	542
66	鹿児島市	城山ホテル鹿児島	平成30年10月25日～26日	681
67	宇都宮市	ホテル東日本宇都宮	令和元年10月17日～18日	603
68	秋田市	秋田キャッスルホテル	令和2年10月22日～23日	334
69	京都市	国立京都国際会館	令和3年10月21日～22日	380
70	岐阜市	長良川国際会議場	令和4年10月20日～21日	541
71	高松市	JR ホテルクレメント高松	令和5年11月9日～10日	(500)

回数	研究目標
47	21世紀の私学教育の充実を目指して
48	生徒と教師のロマンを実現する私学教育
49	新時代の私学教育－中国・四国からの発信－
50	感性豊かな人間を育てる私学教育
51	明日の私学教育を求めて－伝統と創造－
52	特色ある私学教育を求めて－建学の精神と国際化－
53	魅力ある私学教育の創造を目指して
54	未来を担う人材育成を私学教育
55	特色ある私学教育の創造
56	時代を見すえ、未来を拓く私学教育
57	これからの人材育成をめざして－悠久の地から私学教育の未来を考える
58	時代を創造する人材の育成をめざして－私学教育の挑戦－
59	日本の未来を拓く私学教育
60	未来を拓く私学教育～人間力を養い人格の完成を目指す～
61	私学教育の魅力を探る～夢探し夢実現を目指して～
62	21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～
63	新しい時代を担う魅力ある私学教育～安心と信頼に裏打ちされた私学教育の充実を目指して～
64	今こそ私学～明日への挑戦～
65	時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～
66	新時代に向けたさらなる私学の躍進
67	人間力（コンピテンシー）を高める私学教育
68	新しい時代のリーダーを育てる私学教育
69	世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～
70	これからの時代に対応する私学教育の使命～私学独自の教育の再構築～
71	持続可能な社会を実現する私学教育の創造

# 編 集 後 記

岐阜県で全国私学教育研究集会を引き受けてもらえないかと打診があったのが、2年前の12月のことでした。岐阜県ではたして全国大会が開催できるのかという不安を抱えながらの出発でしたが、先催の京都府の大会運営やおもてなしを目の当たりにして、改めて岐阜らしい大会を作り上げる決心をしたところでした。

そして、日本私立中学高等学校連合会中部支部と岐阜県中学高等学校協会21校の先生方が中心となり、岐阜大会開催に向けた準備が始まりました。

開催が決定した令和3年1月は、コロナ感染症の第3波のピーク時で、先が見通せない中、岐阜大会は無事に開催できるのだろうかという思いで準備を進めましたが、岐阜大会開催時の10月には第7波も収束し、開催当日は、全国から541名の先生方をお迎えすることができ、関係者一同熱い気持ちで運営にあたることができました。これも関係の皆様から子細にわたりご指導いただいたおかげであり、改めて感謝申し上げます。

「これからの時代に対応する私学教育の使命～私学独自の教育の再構築～」を岐阜大会のテーマとし、岐阜県ならではの伝統と文化に触れていただきたいとの思いで大会の内容を構成しました。

全体会では、岐阜県私立学校活動紹介として、21回連続全国大会出場を誇る富田学園（富田高等学校・岐阜東高等学校合同）のギター・マンドリン演奏、聖マリア女学院高等学校による神聖な聖歌・ハンドベル・ダンスの披露と、生徒たちの生き生きとした活動発表をご覧いただきました。また、記念講演では2015年にノーベル物理学賞を受賞された東京大学宇宙線研究所の梶田隆章教授の「神岡でのニュートリノ研究を通して考える理科教育」と題したお話を大変興味深く聞くことができました。

新型コロナウイルスの度重なる蔓延により、私学を取り巻く環境は大きく変化しました。学校の休業による新しい授業の在り方の模索、生徒が急激に減少する中での私学の生き残り対策、主体的・対話的な深い学びの実践、働き方改革が急速に進む中での部活動の在り方、ポストコロナ時代の主役となるICT教育の質の向上など数々の課題に対して、この2日間で多くのヒントを得られたことと思います。私たちは厳しい現状に対し情熱をもって、全私学が手を携えて立ち向かっていかなければなりません。

こうした原動力となるのが私学の歴史と建学の精神です。参加されました皆さんの力を結集し、これからの私学の再構築を進めて参りたいと思います。

ここに、大会の成果として研究集録が完成いたしました。今後の皆様の教育実践のお役に立てただけでしたら幸甚でございます。

結びにあたりまして、本大会の開催にあたり、すべての関係各位に対し、心から感謝を申し上げます。来年度、香川大会で皆様にお会いできますことを楽しみにいたしております。

令和4年度全国私学教育研究集会岐阜大会  
実行委員長 下屋 浩 実  
(日本私立中学高等学校連合会中部支部)  
(岐阜県私立中学高等学校協会会長)

---

---

**令和 4 年度  
全国私学教育研究集会 岐阜大会  
研究集録**

印刷 令和 5 年 3 月

発行 令和 5 年 3 月

発行人 一般財団法人日本私学教育研究所  
所 長 平 方 邦 行

発行所 一般財団法人日本私学教育研究所  
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4 丁目 3 番地 8 市ヶ谷 UN ビル 6 階  
電話 (03)3222-1621

編集 一般財団法人日本私学教育研究所  
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4 丁目 3 番地 8 市ヶ谷 UN ビル 6 階  
電話 (03)3222-1621

印刷所 マツヤマクリエーション  
〒356-0052 埼玉県ふじみ野市苗間 558-10  
電話 (049)263-0075

---

---

本研究集録についての著作権はそれぞれの講師・発表者・報告者等および一般財団法人日本私学教育研究所に帰属します。著作権法により認められる場合を除き、複製、公衆送信、改変、切除、ウェブサイトへの転載等の行為は著作権法により禁止されています。



